

東京国際大学論叢

人文・社会学研究

第1号

論 文

- 経済学者・早川三代治が小説『処女地』で描いた北海道虹別開拓村民の生活
——世界大恐慌の年に始まった凶作続きの村の「敗者」の物語——
..... 金城ふみ子..... 1
- Have Japanese English Textbooks Really Improved?:
Reexamination of Gender Representation in Current Textbooks
..... 中井 基博..... 39
- 「郭象莊子序」の眞偽について 水野 厚志..... 63

研究ノート

- 株式会社による自己の株式の取得についての一考察 本島 浩..... 75
-

東京国際大学論叢

人文・社会学研究

第1号

経済学者・早川三代治が小説『処女地』で描いた
北海道虻別開墾村民の生活

——世界大恐慌の年に始まった凶作続きの村の「敗者」の物語——

金 城 ふ み 子

**Economist Miyoji Hayakawa's Depiction of
Hokkaido's Pioneer Farmers
in His Novel *Shojo-chi* [Virgin Land]**

KINJO, Fumiko

Abstract

Miyoji Hayakawa (1895–1962) was a Japanese economist and writer. He devoted his life as a mathematical economist and econometrician to research into income and wealth distribution with a focus on distribution of cultivated land holdings in Japan before and after the Land Reform in 1946. At the same time, he also wrote a series of novels, *Tsuchi to Hito*, comprised of five completed volumes. The second volume entitled, *Shojo-Chi* [virgin land] was first published in Japan during World War II. In this story, a young farmer and his family were lured to move to Hokkaido by a propaganda film screened by the immigration office of the Hokkaido Government. However, the reclaimed land given by the Hokkaido Government was a barren land of volcanic ash. After several years' struggle with cruel nature, he abandoned it, and miserably died during the Great Depression. This paper examined each stage of his downfall, and investigated what caused him to die alone in a winter field.

Keywords: Miyoji Hayakawa, pioneer farmer, inequality, reclaimed land, Hokkaido

目 次

1. 研究の背景
2. 研究の狙い
3. 作品の概要
4. 凶作続きの開墾村での農民の生活
5. 釧路原野の「おらの土地」での悲劇
6. 世界大恐慌下の釧路の町での低所得階層の生活
7. 結びに：敗者となった開墾移民の物語に潜む社会問題

1. 研究の背景

1.1 早川三代治の三つの顔

早川三代治（1895-1962）という、小樽の地主の長男に生まれ、家業を継ぎながらも経済学者として活躍し文学作品も書いた人物がいる。

家族は、入り婿の父両三、母志満、弟昇の四人家族であった。弟の昇はアイヌの研究者で、1970年に『アイヌの民俗』民俗民芸双書54を岩崎美術社から刊行している。早川の作品にアイヌのことが書かれているのは、単に北海道の出身者であるということだけではなく、身近にいる弟の影響もあるのかもしれない。弟のことは「敗戦前後」（未定稿）に、父のことは『若い地主』や「農地解放」（未刊行）に、母のことは「ある時期の謙介」（草稿）などに書いている。これらの作品では、親戚についても書かれている。

1931年に山木たけと結婚し、4人の息子を得ている。¹⁾ 小樽商科大学附属図書館所蔵の早川文庫は、三代治の死後、たけ夫人による寄贈で作られた。その寄贈受入れの経緯については、松田（1976）「早川三代治教授と早川文庫」小樽商科大学附属図書館『早川文庫目録』²⁾ に詳しい。現在早川の四男佳郎によって、資料の追贈が行われている。

早川は、大正時代の人気作家の一人であり欧文脈³⁾の華麗な使い手と言われた有島武郎（1878-1923）と、日本自然主義の代表的作家の一人である島崎藤村（1872-1948）を、ともに師と呼んでいる（早川、1947g）。

この、経済学者、地主【農場経営者】、文学者という三つの顔を持つ早川は、19歳で有島に出会って師事した。大学卒業後にドイツに留学して戻り、母校北大の経済学の教員となる。しかし、母や弟の病を機に40歳で大学教員を辞め家業を継いで地主となったが、自身と同じく地主であった、師の有島が死ぬ前年に農場を無償解放したことや、トルストイの「地主の朝」の若い主人公の地主ネフリユドフと自分を重ねて考えることで、父親から受け継いだ「不耕作地主」であることに複雑な思いを抱くようになる。経済学者としては、土地【耕作地】所有の分布を調べ、資産分布の中の耕地保有分布の上層への偏りを実証的に示し、経済学者として得た知見や、地主としての考えや悩みを文学という形に結晶させていく。

1.2 有島武郎との関係

経済学者の早川が戯曲や小説なども書く文学者であったことは意外に知られていない（松田、1976；上久保、2003）。文学との出会いは、中学3年頃、英語の先生から「初めてホイットマンの大胆不羈な性格」を知り、翌年、母を通して知った高山樗牛の「ホイットマン批判とその詩」に

感激したことが早川治男・佳郎（2012b）「早川三代治 年譜」に書かれている。（以下、本稿では早川三代治に関する履歴事項などはすべてこの早川の長男と四男によって作成された年譜により、原則としていちいち引用注はつけない。必要に応じて付ける場合には、早川治男・佳郎（2012b, p. 9）を「年譜, p. 9」のように略記する。）

文学作品は、中学時代から書き始めている。中学校時代には、『小樽中学校校友会雑誌』に「THE CHRYSANTHEMUM」「愁の人と自由の鳥」「第五学年旅行記」を書いている。また、大学時代には、『北大文芸会会報』に19歳で朝千吉というペンネームを使って、1914年に「盲目の王子」（73号）、1915年には「サタンの目ざめ」（74号）の創作発表をしたり、小樽で新たに創刊される文芸雑誌『白夜』に同人として参加したりしている。

有島武郎との最初の出会いは、作品を通してであった。「有島武郎先生のこと」（未定稿）によると、早川が「有島武郎という名前を、私が初めて知ったのは、中学の四年頃だったと思われる。それは『白樺』に載てゐた『ある女のグリンプス』の著者としてであった。然しその人が札幌農科大学予科の英語の教授であると云ふことを知ったのは五年になって上級学校を何処に^{ママ} 撰ぼうかと思案するやうになつてからであつた。」私【早川】は、中学校を卒業後の進路のために、神戸の高等商業、札幌農科大学予科、仙台の二高の三校の受験を考えていた。しかし、願書は出していたが、神戸は遠く「神戸まで学問に行く」と云ふことは相当の決断を要することだったので、予科を受験した。しかし、「農業に関したことをやると云ふ考へを持たねばならないのだが、自分としてはまだそれほど考へがまとまつてゐた訳でもなかつた。その為であらうか。間際になつて予科の他に仙台の二高にも願書を出しておいた。」予科に合格して入学後、「学校が始まると、私の級の英語を受け持つ教授の一人が有島武郎先生であり、教室で『私が有島武郎です。』と自己紹介したその人は、入学試験の英語の書き取りをした試験官であつた。私は目をみはつて、その人の中に『ある女のグリンプス』の作者を見出そうとせずにはゐられなかつた。」と生身の有島との出会いについて書いている。（漢字は新字に直して引用。以下同様。）

有島との関係は、このように北海道帝国大学の前身の東北帝国大学札幌農科大学予科で出逢つて師事し、有島が妻の療養のために札幌を去つて後も、北海道帝国大学農学部農学科第一部を卒業3か月後の1921年6月に留学するまでの間、親しい師弟の付き合いがある。その関係は残された有島からの葉書などで知られている。有島が京都の同志社大学で行った特別講義に有島門下生で早川の生涯の友となった大島豊⁴⁾（1891-1965）【同講義企画・運営者】など「有島ファン」とともに出席して、暇な時間に嵯峨野などを散歩したり、新劇公演の総通し稽古を見に行ったりしている。自宅にも遊びに行っている。欧州へ立つ前に有島に会いに行つたが先客があり待っていたが夜更けになつても帰らないので、辞去したが、客が帰つた後でその旨が有島に伝えられると、「一言知らせてくれれば、先客を帰へしても会んであつたのに」と、有島が言つたと大島豊から聞いたと書かれている。（以上この段落、早川、1935bによる。）

また、早川が有島と親密な関係にあったことは、有島が妻安子の歌集『まつ虫』（非売品、限定私家本、発行400冊）を出したときに82番という比較的若い番号を贈られていることから推察できる。表紙には、有島の自著と思われる墨筆で「呈 早川三代治82/400」と書かれている。同書は、小樽商科大学附属図書館早川文庫に2015年に遺族から追贈されたものの一つである。文学作品としての「まつ虫」については、本稿の狙いからは外れるので、これ以上は言及せず、片山（2013）・片山（2004）他に譲る。

有島が1922年に狩太農場を解放したのも、翌年の有島の死も、早川の欧州滞在中のことであった。早川は1922年3月に経済学上の師でもある大西猪之助が急逝し、両者の共通の師のディー

ツェル教授とともに悲嘆していたことが「年譜」に載っている（年譜, p. 466）。しかし、同年の狩太農場解放については記載がない。有島の自死については、ベルリン大学に転学した直後のことであったことになるが、その時は何も書いていない。原稿を依頼されたが、どうしても書く気になれなかったと書いている（早川, 1935b）。

ちなみに、有島の死に関連した作品は、死後10年経った1932年になって、ようやく『北大文芸』有島武郎追悼号、第14冊に「出家」という作品を書いた。1935年には「有島先生のこと」という文章を書いているが未定稿で、発表していない。第二次世界大戦後の1946年には北大予科で講演「有島武郎と島崎藤村」を行った。1948年には『文芸復興』第3巻第2・3号に「作家と生活 一島崎藤村と有島武郎一」を、1953年には『北海タイムス』「小樽文学散歩」10月17日号に「有島先生と小樽の『草の葉』の会」を、1962年には講談社『有島武郎集』月報25に「有島先生」を書いている。

なお、藤村に出会うのは、帰国して3カ月後の1925年4月に北海道帝国大学農学部講師になり、欧州での経験などを随筆に書いたり、理論経済学の研究や翻訳をしたりしていた時期である。この時期に書いた随筆や、留学中や帰朝後に発表あるいは執筆したものは、『ラインのほとり』（随筆集）に収録されている（早川治男・佳郎, 2012a, p. 459）。また、家業の地主も行いながら戯曲「吹雪の底」なども書き、藤村に認められた。戯曲「吹雪の底」（後に「新しき縄」と改題）は、藤村から、築地劇場の創設者の一人である劇作家で演出家の小山内 薫（1881-1928）に紹介され、続いて、戯曲「聖女の肉体」が作家と実業活動を両立していた水上瀧太郎（1887-1940）に紹介される（年譜, pp. 467-468）。

1.3 学生時代

早川の育った当時の小樽は、樺太と内地との中継商業都市であると同時に国際的な港湾都市であった。人口は、小樽市の統計データによると、明治元年2,230（444世帯）、三代治の生まれた翌年の1897年54,996（11,602）、1899年61,893（8,909）、1907年90,373（14,462）10歳、1917年103,611（18,012）21歳、第1回国勢調査の1920年108,113（21,276）である。早川は、小樽の発展と共に育ったと言える。1928年に日本郵船営業案内（英文）では、Otaru Cityを“The most important port city along the Western coast and forming the gate way to Western Hokkaido (pop.128,000), is within one hour from Sapporo.”と紹介されている。なお、早川42歳のときに開かれた小樽開港大博覧会（1931）について触れている早川（1947d）では、小樽を「商港都市」（p. 90）と呼んでいる。前年の1930年に行われた第3回国勢調査による当時の人口は、144,887と増加しており、街のさらなる発展が裏付けられる。

市街地は天狗山と呼ばれる山の麓にあるなかで、人々の関係は都会としては密であった。早川は狭い市街地で10歳年下の伊藤 整⁵⁾（1905-1969）と同じく、旧制北海道庁立小樽中学校で学び、成長したが、当時どの程度交流があったかは筆者には不明である。中学校時代の友人には、先輩の岡田三郎⁶⁾（1890-1954、小説家）もいる。早川は、地元の小樽高等商業学校（現小樽商科大学）ではなく、理系の東北帝国大学札幌農科大学予科（北海道大学の前身の一つ）に進学した。しかし、当時の北海道で北海道帝国大学農学部農業経済学科に並ぶ、唯一の社会科学系の高等教育機関であった小樽高等商業学校の教師陣とも長ずるに及んで親交があり、学問上の知己に手塚壽郎（1896-1943）、大熊信行（1893-1977）などがいた。手塚は、小樽高商（現小樽商科大学）卒業後、東京高商（現一橋大学）を卒業し、母校小樽高商の教授となった「ゴッセン研究」などの翻訳もある著名な経済学者である。早川にもゴッセン（Hermann, Heinrich Gossen, 1810-1858）に関する

翻訳や研究論文がある。

1920年1月に東京帝国大学経済学部助教授森戸辰男（1888-1984）が東京大学経済学部の学術機関誌『経済学研究』創刊号に書いた「クロボトキンの社会思想の研究」で編集発行名義人大内兵衛と共に「朝憲紊乱他の罪」で起訴された、いわゆる森戸事件からの取り締まりが強化したとき、その影響の波及を心配した小樽高商教授大西猪之助（1888-1922）は、早川に卒業論文の当初の論題「クロボトキンの農業理論の批判的研究」⁷⁾（年譜, p. 466）を変更するよう助言し、早川は論題を「収獲通減法則の研究」に変更した。（大西には、主著に『囚われの経済学』（東京實文館, 1920）があるだけでなく、没後には12冊の全集がある。大西が早川の欧州留学中の1922年3月に急逝したことは「1.2 有島武郎との関係」で既に述べた。）

大熊信行（1893-1977）は、1921年に小樽高等商業学校の講師【翌年教授, 1923年病氣退職】となり、小林多喜二、伊藤 整らを教えている。大西・手塚などと共に、福田徳三（1874-1930）門下の経済学者であるとともに、石川啄木（1886-1912）に影響を受けた歌人でもある。早川は、1937年に神戸で開催された社会学会で、同人歌集『まるめら』の主宰者でもある大熊や経済学者で歌人でもある高田保馬（1883-1972）と出会い、アララギに入会している。大熊は日本文学報告会の理事でもあった。高田は1946年1月に京都大学名誉教授になったが、同年12月に東亜民主主義などを唱えたことを理由に教職不適格となり教職を追放されている。⁸⁾ 2011年に小樽市小樽文学館で行われた「小樽高商・商大ゆかりの文人経済学者たち：大熊信行・早川三代治・大西猪之助」という特別展（2011年7月2日～8月28日）からも交流の様が判る。

1.4 経済学者としての研究

経済学者としての早川は、限界革命と呼ばれる、いわゆる近代経済学理論を日本に紹介した経済学者の一人として著名である（松田, 2015b；Matsuda, 2014；上久保, 前掲書）。当時はマルクス経済学が主流の時代で、近代経済学理論は数学的に表現する数理経済学とも呼ばれていたが、その研究者は日本ではまだ少数であった。早川は、その分野の研究の他にパレート分布などの研究で計量経済学者・実証的経済学分野での功績でも評価されている（松田, 同上；寺崎, 1986；上久保, 同上書；汐見・毛里他, 1933）。

早川は、1921年に北海道帝国大学を卒業後、私費でドイツのボン大学に留学した。6月に船でコロボ（スリランカ）を経て、11月にドイツのボン大学哲学科に入学している。1923年5月にベルリン大学哲学科へ転学している。翌1924年2月以降は、ローマやウィーンに滞在し、6月には大学生の頃から憧れていたシュンペーター（当時は銀行総裁）を訪問している。ハンガリーに旅行した後、同年11月にマルセイユから船で帰途につき、1925年1月に帰国した。

帰国3か月後は、母校の北海道帝国大学農学部・工学部の講師に着任した。その後、経済学・興業経済学・財政学などの講義、経済学ゼミナールを担当する助教授になっていたが、1936年3月、家業のため退官し、一時教職を退いていた（早川, 1947a, pp. 9-10）。1948年に、商科大学昇格を目指す小樽経済専門学校（旧称小樽高等商業）に経済学原論・経済学史などの担当教授として任用された。その後、小樽商科大学商学部を定年前に退職し、早稲田大学教育学部で教鞭をとり、長年、所得資産分布の研究を続け、その集大成である「パレート法則による所得と財産分布に関する研究」により、1960年に早稲田大学から経済学博士の学位を得た。

ドイツ留学から帰国後の数年は、ワルラスやパレートなどの当時はまだ日本ではあまり知られていなかった数理経済学者の紹介のための翻訳や研究をするとともに、耕地資産の分布などの資産・所得分布の研究を継続して行った。1932年に高岡熊雄教授在職35年記念論文集『農政と経

済』に書かれた「我邦耕地の分配状態に就て」（1933年にイタリアの *Giornale Degli Economisti* のannoXLV III. No. 9にも投稿掲載）では、北海道での土地や土地利用の所有の不平等度が高いことが指摘されており、1932年6月に汐見三郎（1895-1962）が京都大学の『経済論叢』第34巻6号に発表した「国民所得の分配の型を論ず」や、汐見三郎・毛里英於菟・武田長太郎・益田熊雄（1933）『国民所得の分配』（金融経済研究会紀要）とともに資産・所得分布研究で高く評価されている（Matsuda, 前掲, pp. 56-59）。その後も、1934年に「旭川市に於ける所得分布」、1935年に「所得の社会的ピラミッドに就いて」および「農村に於ける所得分布」、1938年に「所得分布の形態に就て」など継続した研究が行われている。1944年には「所得分布に関する諸考察」が日本統計学会編『国民所得とその分布』日本評論社に掲載された。

経済学者としての早川の研究は、数理経済を用いた所得・資産分布などの実証的研究であり、土地所有における不平等の実態の把握などをしていたといえる。

1.5 家業の地主・企業家

早川家は祖父両三の代からの「商人地主」で小作も抱えていた。小樽商人のうち、北陸出身者は出身地の北陸地方から米や雑貨類を入れ、代わりに肥料用のニシン粕を運ぶことで海産物商売に手を染めた北陸系商人として、新潟出身の高橋直治・板谷宮吉の他に早川両三や山本厚三の父久右衛門らの名が挙がっている（小樽商工会議所, 1995b）。早川両三は、1905年には「不動産・農林水産取引き」、1906年には、第五高等商業学校の敷地購入のため1万円の寄付をしているなど、早川家は次第に財力を付けてきていることが判る（年譜, p. 464, 小樽商科大学百年史編纂室, 2011a/2011b）。

平成7年に当小樽商工会議所が創立100周年を迎えたのを記念して刊行された『小樽商工会議所百年史』では、「小樽の豪商といわれたような人たちは、本業が安定するとすぐ土地に手を出す傾向が特に目立っていた」と「商人地主」の出現が指摘され、「表1 商人地主」には「11. 早川両三 寿都郡黒松内町の未墾地に17戸を入れ、1908年買った岩内郡前田村に12戸を入れた。留萌郡天登雁333町歩の貸付地を牧場に」とあり（小樽商工会議所, 1995b）、祖父早川両三が「商人地主」の一人であったことが判る。ちなみに同じ表には小林多喜二（1903-1933）の「不在地主」のモデルになった磯野農場の農場主、「13. 磯野進 下富良野に175町歩の田など193町歩の農場」の記録もある（小樽商工会議所, 1995a）。

早川は、職業としては大学教員であったが、家業の地主も継いでいる。（1.1および1.2参照）1941年3月に「旭川在農地の解放（自作農創設【法による】）」（年譜, p. 471）、長編小説＜土と人＞第一部の『根』を刊行した1945年4月には、「前田村自作農創設作業を完了し、主な所有地山林処理問題おおむね整理終わる」⁹⁾（同上, p. 472）と書かれている。これらから、山林を含む所有地の処理は個人資産なので詳細は不明であるが、早川は終戦後に行われた「農地改革」ではあまりひどい影響は蒙らなかったと推測される。また、自伝的作品と考えられる「若い地主」や「農地解放」にも関連すると推測される事柄がより具体的に書かれている。（1.6参照）

早川は、教職から離れていた戦時中には鉄工場の経営も行っている。「昭和十九年九月某鉄工場を買収、有限会社小樽鉄工所として代表取締役役に就く」（同上, p. 472）。小樽で初めて空襲警報が出された1945年6月27日 午前11時20分頃に、「鉄工場に於て藤平親方と上半期に出す従業員のボーナスに就いて相談中であった」（早川, 1947f, pp. 14-15）。従業員は5名であるが社長と呼ばれ、ライオンズクラブが時節柄解散して名前を変えた火曜倶楽部のメンバーでもあり、大きな屋敷に住み、空襲の際には、帝国銀行支店地下室を借りて、有価証券類を自宅から移している（年

譜, p. 472)。「顔を出す色々の會合で、O市の米穀事情が極めて切迫してゐることを、実業界、財界、官庁、公区方面の有力者の口から聞いた」(早川, 1947d, p. 137)。大学教員をやめていた時期ではあるが、早川は、依然として財産家で、「町の名士」の一人であったと推測される。戦後に教職に戻った後も、地元企業北海製紙の監査役を務めているなど、企業活動も続けていた。

つまり早川は、経済学者、大学教員、文学者、地主、鉄工場経営者など¹⁰⁾多様な活動をした人物であった。

1.6 「土」・「土地」への関心

このような早川の生立ちや複数の「顔」の共通基盤は「土」・「土地」である。すなわち農林業(畑作・水田耕作と山林)である。耕作地所有面積や所得稼得の分布の経済学的実証研究は、裏を返せば不平等社会の実証的研究でもある。

早川は、文学者としては、戯曲・詩や小説、随筆・旅行記など様々なジャンルで書いている。そのなかで「土」・「土地」に関する文学作品には、戯曲に「入地」(初出『劇と評論』昭和七年所十一月号所載、『トレグラチエ 戯曲集』所収(pp. 1-34)や、随筆には1946年の「養ひの土地——小樽」があるが、その中核は土・土地の小説である。

早川の文学作品で土・土地を扱った小説には、生前には全部は刊行されなかったが、北海道の凶作続きの釧路原野の虹別開墾村の歴史を描いた¹¹⁾長編小説<土と人>五部作¹²⁾がある。また、私小説的な作品ととれる『若い地主』および「農地解放」(未刊行)、東京大空襲難民の入植者を描いた「冷たい土地」¹³⁾(未刊行)などがある。

『若い地主』が刊行されたのは、第二次世界大戦後の1947年7月であるが、その元となった「ボム神恵の地主」が書かれたのは、戦中の1938年である(年譜, p. 470)。この作品の主人公の信吉は、不在地主であるということを自覚し、小作に対しての憐れみの情を持つてはいるが、「師のやうに純粹に思想と行為の一貫性を押しつめゆくことは信吉の弱い性格では無理であった」(同書, pp. 133-134)。これは、早川自身とその師である有島を想起させる記述である。また、そこに書かれている、凶冷や他の自然災害による農業被害、そして小作人の逃亡、檻樓を來た小作や汚い顔をした子どもたちの悲惨な有様などの問題は、まさに「処女地」で書かれている小作人の生活である。「処女地」の主人公が凶作で不幸になっていくのを、早川は自分の小作の一人であるかのやうに見て、「主人公になりきろうとした」(同書, 「まえがき」p. 5)と推測される。

では、このように早川を弱者の立場に立たせようとするのは、どうした力であろうか。どこから来ているのであろうか。早川の「海から」という随筆の最初の方に、「一革命家の思出」の一部をふと思い出したということや、その後の漫歩の折には常にこの革命家のことが頭に浮かんだと書かれている。これは、クロボトキン(Peter Kropotkin, 1842-1921)が1899年に英語で出版した“Memoirs of a Revolutionist”を、1920年2月に大杉栄が主としてフランス語版(1901, Autour d'une Vie [ある生涯をめぐって], パリ:ストック社)から邦訳した「一革命家の思出」(春陽堂)のことであろう(高杉, 1979, p. 294)。

然し、その漫歩とても常に楽しいものとは限らなかつた。恣な連想は私を色々の方面へと誘惑しに來た。

その一つだつた。その日、漫歩しながら、私はふと「革命家の思出」のある部分を思ひ浮べた。それは牢獄に投ぜられた一革命家が他日の好機会に備へるために、体力を衰へさせぬ様にと、毎日回数を定めて独房の内を歩き廻つた、と云ふ経験談だつた。彼と

私との相違は思ふだに愚かしい事であるが、努めて散歩の運動をしやうとする時に、頭に浮かび出るのは常に此革命家の事だつた。(早川(1933)「海から」p. 3。下線は筆者、以下同様。)

早川はクロボトキンと自分の違いを認識しているにも関わらず、クロボトキンのことを考えてしまうくらい、クロボトキンの考えは、師の有島は達成したのに自分には達成できない、早川にとって苦しい理想として心の中に大きな位置を占めていたと推測される。

これらの作品で書かれていることは、地主の実体験と経済学者の知見という両眼による、農業と農村をめぐる、貧困の低所得階層の生活についての写実の試みである。それは、師の有島のように、「クロボトキンの書物を読み、物の所有に疑問を感じた」(「農場開放顛末」というような正面からの思想的批判は敢えて避けた、国家総動員法下での静かな、不平等社会の実態の指摘だったのではないかと推定される。

2. 研究の狙い

本稿では、有島武郎の弟子であるが、「知られざる文学者」であった早川三代治が、これらの耕地資産の分布などの資産・所得分布の論文と併行して書いた長編小説で、第二次世界大戦中の用紙の統制と出版規制のなかで、¹⁴⁾ ようやく1942年12月に元元書房から最初に刊行した第二部『処女地』を取り上げ、そこに描かれた開墾移民の中の、夜逃げした一人の「敗者」に焦点を当て、その没落の過程を整理検討し、著者の意図したと考えられる社会的な問題を浮き彫りにする。なお、表題にも含まれている「敗者」という表現は、同作品の長い「はじめに」に「主人公は人生に敗れた一農夫」とあるところから取ったものである。

同書は現時点では入手が困難だと思われるので、引用には初出書ではなく、入手が比較的容易だと考えられる、『北海道文学全集第9巻』(1980年立風書房刊行)に再録されている「処女地」(pp. 5-255)を使用した。

以下の本文での学歴、職歴についての記述は、すべて早川治男・早川佳郎編(2012b)「早川三代治 年譜」による。引用には「年譜, p. 464」と略記する。ただし、作品第二部『処女地』からの引用については、その出所9ページを(9)、10-11ページを(10-11)などと、本文中に括弧書きでページ番号のみを示す。また、早川(1945)『第一部 根』寶文館からの引用の場合には、(根9)とする。

なお、『処女地』の作品分析を主眼とした先行研究はないと思われるので、早川三代治に関する他の先行研究については、ここでは触れず、金城(2014)と上記全集の「解説」(神谷, 1980)等に譲る。

3. 作品の概要

3.1 長編小説<土と人>の形成と戦時下での出版開始

長編小説<土と人>は、早川の文学作品で唯一の長編小説として、当初は四部作として書かれた、北海道虻川開墾村の許可移民の物語である。第一部『根』、第二部『処女地』、第三部『土から生まれるもの』、第四部『生ける地』に、第五部『地飢ゆ』が戦後に書かれ、第六部「ひこばえ」の構想が昭和25年に浮かび、最終的には六部作となるよう構想され、資料収集が行われたと推定

される（年譜，p. 472）。その形成過程の検討については，金城（2014）前掲で詳論している。

この「ライフワーク」¹⁵⁾というべき連作で、1942年（昭和17年）に、第二部が最初に出版された。当時は、国家総動員法の下、出版も紙も統制下に置かれていて、大島豊の助力で、まず、第二部『処女地』が寶文館から出版された。（注4参照）それは執筆されてから約10年後のことであった。その事情については、同書の「はじめに」に詳述されている。なお、早川は「私は序文嫌いである。著書それ自身を以って総てを語らしむべきであると思うからである。然るに時世はこのようなまえがきを必要とせしめたのである。〈後略〉」と書いているように、長い「はじめに」が付いているのは、連作中、この作品だけである。

早川は、「はじめに」で執筆意図を「私は陰惨にも悲惨にも恐れない強剛さを欲する故に、この陰惨の底から生き上ろうとする力を感得したい故に、この『処女地』の主人公に成りきろうとした」(5)と述べている。しかし、物語の結末では、主人公の「運命は転落してゆく石のように止まる処を知らなかった。そうしてその止まった時は即ち彼の死であった」と、アンハッピーエンドになっている。それは、早川が多数の屍や労苦が豊かな土を作り、苛酷な自然が最後には豊かな地になることを、人間が「無数の悲惨な生活を堆肥として、極めて徐々に、極めて隠密のうちに、悲惨な生活からの向上が萌しているのである」(5-6)と考えているからであろうと「はじめに」からは推定される。

しかし、なぜ出版は第一部からではなく第二部から行われたのであろうか。第二部につけられた「はじめに」には、「土地と開墾者の死闘」(6)での開墾者の勝利の記述「不毛と言われた処女地も、惨酷無比と思われた自然も遂にこれらの人々の不屈の労苦に酬えたのである」(6)がある。しかし、これは、長編小説の当初の完結部であった第四部での虻別開墾村の歴史の最後の部分としては妥当だとしても、第二部の結論とは明らかに合わない。また、本文中には、人物紹介の記述がされぬままに唐突に開墾村の第一部の登場人物谷村が現われたり(88)、そもそも同村への許可移民の入植時の様子が主人公の回想や夢以外ではほとんど描かれていなかったりすることなどからも、長編小説の発表として当初から早川が予定していたとは思えない。また、内容が治安維持法への抵触の恐れということも、戦前に書かれた第四部までは戦前に出版されているのであるから、それも理由とは考えにくい。早川は、第二部『処女地』の出版された前年、1941年11月発行『北大文芸』42号に掲載された短篇「野火」が検閲で部分削除されるという経験をしているが、削除された部分のページから判断すると、思想的な理由によるものではなく、心中が描かれていて、「公俗良序に反する」ということのようなのである。

それでも第二部を先に出版した理由は、本作品の前半が、「鶴の棲息地」として『北大文芸』に昭和9年6月から翌10年10月に中断するまで発表されていたことや（年譜，pp. 469-470）、それに加え、この作品の、登場人物に強いスポットライトを当てたドラマチックな構成から考えると、早川の文学的創作活動において、その重点が戯曲から小説への移行期にあったことも関係するのではないかと推測される。1925年に留学を終え欧州から帰国した後、教職の傍ら、翌1926年からは「理論経済学の文献研究にあわせ関係原書の翻訳作業」をしているが、同年10月には秋田雨雀を招いたり、劇についての講演を聴いている。また、翌1927年には、藤村に戯曲作品を認められ、「評価と指導をうけるようになる。」(同上)長編小説<土と人>のテーマを得たという1932年には、それまでに書いた戯曲をまとめた第一戯曲集『聖女の肉体』（明窓社）を出し、1933年の末には、「新しき縄」が新劇座によって上演されている（年譜，p. 469）。1934年には、『処女地』の初稿である「鶴の棲息地」を『北大文芸』に連載し始める。1936年には第二戯曲集『トレグラチエ』（丸善札幌、私家本）を、1937年には第三戯曲集『マダムレア』（同上社）から出版している。『処女地』が出

版された1942年以後は、10月に藤村が死去したこともあってか、戯曲の発表はないようである。

3.2 第二部の設定

長編小説＜土と人＞は、昭和4年（1929）の虹別開拓村への移住から始まっている。不景気が広がる中、昭和6・7、9・10年と、東北北海道地方は「昭和初期凶作群」に襲われた。「東北農業研究センター水稲冷害早期警戒システム」国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（通称「農研機構」）によると、「冷害は平均して起こりやすいのではなく、波状的に襲ってくるから惨禍はさらに大きくなる。この例として顕著なのが、元禄・天保・文明の凶作群である」（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、2015）。明治以降も「明治凶作群」（明治35・38・39）があり、さらにそれを上回る「昭和凶作群」（昭和6・7・9・10）に襲われ、北海道や東北では農作物の収穫減率は甚だしかった（同上）。虹別開墾村は、周りが「平作」のときでも「凶作」という、寒冷な泥炭地という土地柄であったので被害は甚大であったことが推測される。

『処女地』は、入地からあしかけ4年が過ぎた昭和7年に、主人公である許可移民の「大崎常造一家は自分で開墾した土地に喰いつめられてしまった。」という文で始まる。「開墾した土地が収穫を与えず土地の為に食い殺されたという意味で」、「三ヶ年の大凶作は彼【主人公大崎常造、以下大崎と略記】に労苦と借金だけで酬いた」結果、大崎は逃亡を考え始める。「濃霧と土地に喰い殺されてしまう」ため、既に移住民の「三分の一位」は、「どこかへ消えて行ってしま」っている、大崎たちの移民団が入地するために通過したときのことを知っている、標茶旧市街地の宿の亭主が語っている（54）。

この物語の始まる昭和7年は、「昭和六、七年の世界的不景気のただ中にあった、北海道、殊に根室、釧路原野を襲うた連年の大凶作を生色なき原頭に立って目のあたりに視た時、私のうちに一つの主題が胚胎した」時点に一致する（5）。

3.3 粗筋・物語の構成

第二部『処女地』は、長編小説＜土と人＞の中で、昭和4年の早春に入植した第一回移民団体130人ほどの中の、「人生に敗れた開拓移住民」の大崎を主人公にしている（根159）。

物語は、回想部分や夢で語られる主人公の入植した昭和4年初春から主人公と思しき死体が釧路原野で腐乱死体として発見される昭和9年5月までの、あしかけ6年の、凶作続きに家族も財産も失い、最後は原野の土になった北海道の移住民を襲った悲劇の連鎖の生活を書いている。

場所と出来事から、(1) 入植地を捨てる決心に至る経緯、(2) 土地探しの旅、(3) 夜逃げの実行まで、(4) 釧路原野の新しい土地での悲惨な生活、(5) 不況下の釧路の町での彷徨の日々、(6) 結末部：釧路原野での死体の発見、の六つに分けることができる。

3.4 語りの視点

物語は、「大崎常造一家は」と、主人公の名前から始まる。早川は、「主人公になりきろうとした」と「はじめに」に書いている。しかし、物語自体は一人称では語られず、語りの視点は話の流れが俯瞰できる創造主としての存在である著者にある。

したがって、文体には第三人称の代名詞「彼」が多用されている。特に特徴的なのは、第三人称の所有格を使った擬人文が、他の擬人文と同様多数使われていることである。特に、大崎が新たな開墾地を探しに釧路原野に分け入る4泊5日の長旅では、「彼の+体の部位」という用法が多数見受けられる。それは、有島武郎の“An Incident”【題だけが英語で中身は日本語】にも見られ

る欧文脈である（金城，2012）。ただ，欧文脈としての文体解釈については，本稿の主目的から外れるので，ここでは，これ以上は触れない。

3.5 二つのシンボル

物語には，鶴と標杣という二つのシンボリック的存在が何回も登場し，物語の先行きを暗示したり，物語の展開を牽引したりしている。これらのシンボルは，この作品を舞台にかけた場合にも効果があると推測されることから，早川の戯曲から小説への過渡期の作品である傍証とも言えよう。

3.5.1 鶴

鶴は，最初平和や希望のシンボルの白い鳥として登場し，先住民族であるアイヌの伝承や踊りが紹介されている。

美しい鶴の棲む泥炭地は百姓の耕作には向かないことも，作品のあちこちに書かれている。

主人公は新しい入植地を探しに釧路湿原に野宿の旅を重ねる中，ある夜「夢幻の裡に聞いた声」を，「おらの」土地が見つかったときに，「爽かな不思議な声」として聞きそれが鶴であることを知る。そして，「鶴だ！鶴だ！」と絶叫し，「こみ上がって来る感動に押され」，「鶴が棲んでいる処だぞ」と家族を説得する「肚が出来上がった」（44）。

しかし，家族とともに移り住んだ「おらが土地」で，末娘が溺れ死んだ川の側から鶴が二羽飛び立つのを目撃したり（168），卵を獲ろうと湿地の浮島の巣に近寄ると，「叢の中から，自分をじっと凝視しつつ，今にも襲いかからんとする，鋭い光る目と鋭利な剣のような黒い長い嘴を見て，立ちすくんだりする中で（186），鶴は恐ろしい存在に変わり，物語は奈落の底へ転がり出す（185-188）。鶴の耳をつんざくような泣き声がそれを暗示する。

鶴の登場は全篇に亘るが，物語の結末部では，「百姓だってあれまでには保護されていない」と巡査が「皮肉そうに」言う（253）。天然記念物の丹頂鶴について，著者の分身と思われる博物学者は，「美しい鳥ではあるが，この土地では棲息が許されぬ時が来たのです。でも，大きな目から見れば，それが自然の法則なのだろう」と指摘する（254-255）。

3.5.2 杣標

二つ目のシンボルは杣標【太い四角い棒】である。これは大崎が逃亡先の「新しい土地」に建てるつもり所有者杣であったが，杣標に墨書を頼まれた赤井を始め，それを見る者は皆，墓標を連想する（69-74）。妻も「新しい土地」に立てられた杣を「墓標のようで，気味が悪い」と言う（176）。あまりにも明瞭に物語の先が墓に繋がるであろうという予測を読者に与える。

大崎は，皆の反応にいら立つが，杣標を建てた地で死んだ4人の家族の墓を残して「二度目の逃亡」する時になって，「大崎常造所有地」という杣標の文字が「『大崎常造之墓』というように見え」，やはり「縁起の悪いことだったのか」と身震いする（199）。

3.6 登場人物

長編小説＜土と人＞の他の作品と比べ，この物語に登場する人物はあまり多くない。それは大崎が開墾地を捨てたため村人達がほとんど登場しないからである。

3.6.1 主人公大崎常造の履歴書

大崎についての記述は，小説のあちこちに散在している。それをまとめると，次のような人物像が浮かび上がってくる。しかし，顔立ちや仕草表情などについての描写はほとんどない。

大崎常造：35歳（享年36歳）

生没年：1898（明治31）—推定没年1934（昭和9年）

学歴：小学校卒（199）

出身地：岩手県からの団体移住（232・233）

現住所：北海道釧路国河上郡虹別原野六十九線北十九号

入植年：1929年（昭和4年）

土地：15町歩（すでに高利貸しの手に渡っている）（121）

職業：農業（郷里では「二、三反の水田を小作する水呑み百姓」）（29）

性格：物語の最初の部分では行動的・楽観的、時に現実と空想との区別がつかなくなる面がある。たとえば、「自分が土地を盗みとりに行くんだと云うことすら忘れていた。何処かに土地を見つけると、それはそのまますぐ自分のものであるような気になっていた」（17）。

「新しい土地」に移って直ぐは、借金から開放され自信にみち、開拓を逞しくこなしていく、家族思いの優しい男である（142）。役人の前では臆病、警察では本音が言えないが、土地のことになると、よくしゃべる（233）。

体格：逞しい筋肉（124）、太い両腕（130）

家族：7人

祖母：お若75歳（享年76歳）

父：勉造57歳（享年57歳）

母：お種年齢不詳（享年不明）

妻：お捨年齢不詳（享年不明）

長男：秀造10歳

長女：お松8歳

次女：お常6歳（享年7歳）

親戚：警察の調べでは富山に兄弟がいるらしいが、本人は「小さい時分に別れてしまい」知らない（237）。胆振に遠縁のものがいるが、「あてにならない」（同前）。

野心：百町歩の大地主になること（7）、畑と水田と牧場と澱粉工場を持つこと（29）。

3.6.2 開墾村や村に出入りする人々など

虹別の市街地には、「道路の左右に十数戸ほどの低い家屋が建ち並んでいるに過ぎないが、その中には駅通所、移住民世話所、郵便局、蹄鉄屋、雑貨店兼宿屋飲食店などがあって、其処から枝のように別れる原野の開墾地の心臓を為す地点なので互に遠く離れて暮らしている入地者にとって立派な市街地なのである」（60）。拓殖鉄道の通じて「停車場が釧路川の向こうの東側へ建つ」たのに伴って市街地も移り、それ以前の市街地は「村役場と巡査派出所と神社とお寺と小学校と郵便局のほかは、辛うじて生計を立てているにすぎなかった」（17）。

①民世話所の世話人秋田さん

移住者の受け入れや補助金の支払いなどを仕事とする、この長編小説のどの作品にも登場する主要人物である。大崎がこの世話人に会うのを避けているのは、夜逃げの魂胆があるからで、「何処へ、何しに行くかね。この忙しい時に。」とバスの中で秋田に声をかけられることを想像するだけで「ぎくっとせずにはいられなかった」ほど怖れただけでなく（15）、「苦手」意識をもっていた（70）からでもあろうと推測される。

②寺の和尚、学校の先生、生方牧場管理人の赤井さん、木挽屋、医者、保健婦、神主、巡査、

皆、市街地住いで、必要なときには弟子屈など近隣の地域からも呼ばれてくる。木挽屋は、大崎が杓標を作るときには木を削り、父親の葬儀には棺桶を作り、肉親に代って棺桶を載せた馬車を村の「火葬場」（原始林の一區画）に御して行き、火葬役まで引き受けている（91-92）。

文字の読み書きができる人は、秋田、赤井、小学校の先生、お寺の坊さんの4人だけである（70）。

③精農、津田爺さん、横尾爺さん

凶作対策事業などの交渉のときに表に立たされる（68）。津田爺さんは、数町離れた近隣に住む、大崎とは同郷で交流がある（8）。

④小坂商店

店名ではなく店主の呼称としても使われていることから、小坂が「人でなし」扱いされていることが推測される。

「荒物と雑貨を石垣にしてその上にとぐろを巻いているような」雑貨商で高利貸しの小坂商店は店の一部が飲食店になっていて、大崎と同じような百姓が午前中から「もっきり」と呼ばれている焼酎を飲んでいる（61）。小坂商店は、掛売りと、土地を担保に高利で金を貸すという二つの方法で開墾村の百姓からお金と土地を集めている（76）。

⑤沼内

釧路市在住の新開墾地移民相手の、「債鬼」とも呼ばれる、取り立てのきつい高利貸しで大地主で、大崎も痛めつけられている（76）。

⑥その他

秋祭りにやって来る「三文商人」たちの群れ、客観的な目で虻別地区や他の近隣の収穫や、道庁への政策批判まで論じる標茶旧市街の、馬宿も兼ねている旅人宿の亭主と女房（17）、原野の真ん中で出くわし大崎を驚かせた牛熊村の阿波団の老農民、塘路駅の若い駅員、「原野の者の嬢」（58）など。

3.6.3 釧路で出会った人々

二度目の土地捨て以降に登場する人物を簡単に列挙すると以下のとおりである。

- ①釧路までの旅で：釧路への途中であって道を訊ねた農夫、釧路で安宿を教えてくれた年輩の百姓
- ②釧路近郊での宿泊の際に：最初の宿の亭主、馬・馬車の買人、古着屋
- ③釧路の町で：釧路駅の若い駅員、大崎が納屋にもぐり込み警察に突き出された屋敷の主人と、その屋敷の女中
- ④釧路の町を彷徨しているときに強盗に間違われて連れて行かれた丘の上の警察本署で巡査・看守・司法主任の警部・別の巡査
- ⑤鉄道自殺を図って入院した病院で：看護婦・警察・市役所の人・市役所から巡査と官吏・同室の入院患者2、3人
- ⑥賃宿に宿泊した2日間：亭主・同宿客・焼き鳥屋の女将・客引き老女・丸髷女
- ⑦サムライ部落【バタヤ民部落】の人々：大崎の下宿先の老婆・部落の世話人・主だったメンバー・死体を仲間に解剖用に私立病院に10円で売られた部落の元住人加藤爺さん
- ⑧大崎の死体を発見した人々：釧路原野に視察に来ていた老博物学者・巡査・警察医・人夫・猟師

4. 凶作続きの開墾村での農民の生活

4.1 虹別の今昔

虹別は、現在は標茶町の一地区である。標茶町は北海道の東部に位置し、「東京都の約半分の広大な面積を有する町」である（標茶町、2015a）。

現在の標茶町は、「最北部は阿寒国立公園の一部が広がり二つの国立公園を有する大自然にかこまれた雄大な環境」に恵まれている地域で、「人口8,169人（平成25年7月末）に対して、乳牛が約4万2千頭と人口より乳牛が多いのどかな町」でもある（標茶町、2015b）。「南部は貴重な動植物の宝庫であり、塘路湖を含む釧路湿原国立公園の湿地帯が広く分布し、北部は火山灰層に覆われた根釧台地が広がり、酪農を基幹産業とする田園地帯」となっていて、この小説に描かれているような悲惨なことがあった土地とは別の趣のある所である（標茶町、2015c）。同町には移住相談窓口があり、今でも移住者を募集していて、「標茶への移住のご案内」に書かれているのは、＜土と人＞に書かれた当時とは想像を超える厚遇である。

4.2 移住地の現実

4.2.1 開墾ブローカー

移住地は、原始林の覆っている地域だと聞かされて郷里を離れて来た入地者の期待は、「開墾ブローカー」の存在で破られる。

〔大崎が、自分が見つけたきた「向うの土地」が素晴らしいという理由は、〕山と云う山がみんな樹林で深々と掩われていることがそれである。このことだけでもみんなを羨ましがらせるに充分であった。彼等が入地したこの虹別原野が、実際に来て見れば、ある筈であった樹木が思ったよりもずっと少なかった意外な失望をまざまざと思い出したからであった。森林は移住民の入地する前に開墾ブローカーという松けむしの為に喰い尽くされてしまうのが、殆ど当たり前のことのようにされているためである。「そんなにあるなら二年や三年、炭焼きばかりしていても食べられるなあ。」と思わず父親の勉造が感嘆の声をもらした程であった。（65）

開墾ブローカーの他にも、先に入地した開墾者によって隣接する土地に生える目ぼしい樹の「盗み伐り」が行われている。例えば、「第一部 根」で、まだ雪深い2月に一早く福島県双葉郡熊町村からやって来た移住民の竹下（38歳）が、そのいい例である（根61-62）。

大崎は、「盗み作り」で入り込んだ原野では、「冬山の主人であり」、「巨大な立木の持ち主」で、思う存分に大木を伐り、炭を焼いた（145）。しかし、大崎は、自分の入り込んだ地所が官有地であることも、舌辛村であることも、警察署で警部に言われるまで知らなかった（234）。

4.2.2 泥炭地

その上、この盗み作りで入った土地は、泥炭地であった。泥炭とは、「北海道のように寒い地域で、湿原の植物は完全に土に還ることができず、枯れた植物が、完全に分解することなく積み重なった、黒褐色の土壌」のことである¹⁶⁾（美唄市、2015）。つまり、泥炭地は、畑や田として利用するための、有機物質が分解してできる肥沃な土がない、耕作には不向きな土地である。

逃げ出してきた虹別開墾地も、濃霧、早霜、冷夏、夏の日照不足と、気候も劣悪な上、虫害も

加わり、不毛の火山灰地であった。第一部『根』でも、老アイヌが「原野の地味は火山灰で痩せている、従つて肥料を澤山やらなければならぬ」と助言する（根55）。しかし、移住民には役人や役所に対する妄信とも言えるほどの強い信頼がある。

役人からは、一度として火山灰地で地味の痩せていることを聞かされたことはないので、意外のことであつたが、肥料をやれば出来るというなら、そう大して悪い土地でもあるまいし、お役所がそんなひどい土地に、沢山の移住民を入れるわけもあるまいと考え、老アイヌが他人を羨ましがつて、あんなことを言うのだらうと考えた。（根55）

火山灰地や泥炭地が不毛なのを知らないのは、北海道庁殖民課の若い役人が移住説明会で村の皆に見せた宣伝映画の中に繰り広げられた美しく天国のような土地だと信じて移住してきた許可移民たちだけであつた（24-26）。

大崎も、釧路原野に「道庁で世話やいて移民を入れるってなら、やっぱり出来る見込みがあるからでしょう。出来る見込みのない土地を、わざわざ金かけて開墾させるわけではないから」と言ふと、標茶旧市街地の宿の亭主は、道庁の開拓政策への不審を示す。

出来る見込みだけで間違いないのなら、今の虹別だって、もっと出来る見込みだったんだがね。その見込みが今じゃあ、ちっとも当てにならないってことでしょう。道庁の見込みなんてものはみんなそんなものだね。（51）

4.2.3 連年の凶作

大崎は、連年の凶作で、「自分で開墾した土地に喰いつめられてしまい、「此処へ入地して以来、自分の身体で経験した事は、結局土地の不毛ということであつた」と気づく（6）。

昭和4年の3月に入地してからの虹別開墾地の作柄は次のように書かれている（8）。

①初年 凶作【原因】とてつもなく早い、ひどい霜。

【生育と収穫の状況】蒔いた畑のものは生育したものの、一夜で収穫を皆無。

【収入】無し。

②二年目凶作【原因】六月から七月へかけての濃霧と降雨とは、畑の作物から日光と暖気を奪いとして終ったばかりではなく、彼等自身達を夏中寒さに震えさせて置く程であつた。

【生育と収穫の状況】前年の早霜を気遣い、収穫を早める為に早蒔きの危険を冒したが、作物は何もかも、べとべとに立腐れた。

③三年目凶作【原因】新しい開墾地に早くも、ひどい病虫害が湧いて出て来た。

【生育と収穫の状況】ようやく作物らしいものになりかかり、辛くも取り入れたものもあつた。（その収穫物とは、「馬鈴薯、燕麦、蒲麦、稗、菜種、唐黍、大豆、青豌豆、大手亡、葱、玉葱、南瓜と数えあげれば豊富のようでも、どれもこれも、不出来でほんのちょっぴり^{【マメ】}ずつであつた。（140）

【収入】収穫物は先ず借金に取られた。しかも他の地方の一般の豊作に側杖喰つて彼の気づかない儘に、安値に叩かれてしまった。彼の手元には一家の食い料さえ残らなかった。

④年目大凶作：作物は何もかにも駄目で、収穫皆無 (89)

三年目に病虫害を免れたものをやっと収穫できたが、借金の支払い分として取り上げられ、手元には一家の食費にも不足なほどしか残らなかった。しかも借金はこれで全済できたわけではなく、「土地をそっくり債権者へ渡して」「小作になってもおらの処のような大借金は死ぬまでかかって返しきれない」ほどの額になっている (8)。

この土地を大崎は、「人間の土地ということが出来ない」、「その証拠には、この収穫物を見てくれ。五年も六年もの、¹⁷⁾ 死にもの狂いの労働に対してあの土地は何を^{ママ}酬えてくれたのだろう」と、「死の谷間へ、つき落されるような心地で、茫然と目前の収穫物^{むか}に対していた (140)。

4.3 借金苦

こうした不毛の地での凶作の3年間に、移住民は収入がなく、借金が膨れ上がっていった。

4.3.1 掛売り

移住民は、開墾村の店で必要なものを「掛売り」【付け】で買うことができた。支払期限は収穫でお金が入った後だが、凶作で収穫がないため借金が払えず、踏み倒して夜逃げをする家も出てくる。

秋祭りが来ても、世直し競馬があっても、原野の人たちの、乏しい財布が一層乏しくなるばかりで、彼等の餓えている銭は一片も、彼等の財布には入って来なかった。いや、彼等の欲しい美しいものや、うまそうなものは原野には入って来るけど、それを買う銭がないのであった。然もこれ等の大道三文商い屋や田舎香具師たちは、小坂商店のように掛けでは何一つ売ってはくれないのだ。だから人々はその抑えきれなくなった欲しいものを小坂商店から掛けで買うより他はなかった。小坂商店は大凶作の年にかえってよい商売にたんまりありつけた。縁日商人たちは、「今年の凶作はよっぽど、こたえたとみえる。何んにも売れん。これでは足代にもならん」と云ってお互いにこぼし合った。(81)

4.3.2 高利貸しの取立て

高利貸しによる「掛け売の代金と貸金の元利金の取立て」は、「雑穀、野菜、馬鈴薯なぞの名ばかりの収穫が済まぬうちに、大凶作の原野に、早くも幾度となく債鬼の群れが入り込んで来て、凧のように荒れまわった」(99)。高利貸しは、虹別原野に「一番広く根を張っている」地元の小坂商店だけでなく、「この原野を遠くとりまく、釧路、標茶、弟子屈、標津なぞの大小の商店、高利貸たち」である。「大凶作と烙印を捺されてしまっでは、取り立てもはかばかしくないが、併し一文でも多く早く自分の手に納めよう」と、「われ先にと、回収に努めた」(99)。

小坂商店は、後に刊行される「第一部 根」では、恵比寿の仮面をかぶった鬼として描かれている。

市街地では五軒の店屋の内で、馬耕屋上りの小坂商店主が一番、鷹揚に移民たちの依頼に、にこにこ大きく肯いていた。彼の背後の黒幕には、新開墾地移民相手の高利貸、大地主である釧路市の沼内が匿れていた。移民たちは規定通りに開墾を完了し、十町歩の土地が移民たちに無償下附される時までには、移民たちは小坂自身の貸金により、或いは小坂の手を通じて沼内の貸金によって、がんじがらみに身動きが出来ぬようにされ、

土地は右から左へと債鬼たちの手に陥ちてゆく運命にあった（根303）。

その上、虻別原野には、周囲の地域の「小金貸から、路辺りの中処の金貸までが」立ちまわって来た（75）。

4.3.3 債鬼への恐れと開き直し

大凶作と決まって、高利貸たちの取立ては例年にも増して厳しさをます。大崎を始め、「原野の人たちは鼻血までも吸われる気持ちで、日夜おどおどとして、一日も早く冬になって、雪がうんと降り積もり、鉄道線路の除雪なり、砂利採りなりに餓死しないだけの仕事を与えられることを待ちぼうけていた」（99）。

移民は、高利貸しを恐れると同時に、出来る限りの抵抗を試みる。

北海道至ところで大凶作の声が喧しくなって来たので、原野の人たちには、やぶれかぶれに、どうにかなるといふ気持ちがひろがって来た。

「なあに、まかり間違ったら、原野のものみんなが原野に枕ならべて餓え死にすればいいのよ。誰からの区別なく、みんなと一緒に餓え死にするんだから不服もあるまえ。どうだ、そうでないか。」なぞと、へらず口をたたく年寄もあった。（75）

債鬼と対等に渡り合って、困らせる者もいる。

【原野の人】「払わないと云うんではないけど、今年のような大凶作にも、無理やりにとろうと云う気持ちが憎たらしい。」

【高利貸し】「そんなこと云ったって無理だ。お前さんたち払わなくても、おら達は待ったなしにどしどし税金を取られるんだよ。そこを考えてくれなくては困るではないか」（75）。

借金取たちはなかなか金の回収ができない。「開墾小屋から開墾小屋へと、訪ね廻る」高利貸しは、どの家でも「おら、もう、我慢が出来んから、期日に約束通り払って貰わんと、今度こそは訴えて出るから、そう思っただけよ。」と「いまいましように捨科白を吐」くしかない（99）。ちなみに、この沼内の言葉で初めて、大崎や津田爺やその他の人々の出身地や郷里での生活状況が明かされている。

この原野には全く一人として、碌な百姓がいない。さすがに東北の貧乏村から、選り選って水呑み百姓ばかり連れて来たんで、土地を拓くことも知らんのだ。」と悪口をいい、挙句は「この原野のものには、もう融通せんことにする。うかうかしていると、元も子もなくしてしまう。貸金の^{かた}抵当にこんなに土地もらったって、どうにもならんぞ。わしは、もう新しい金は、この原野さ注ぎ込まんことにきめた。いまいましい野っ^{ぼら}原めだ。（75-76）

大崎の高利貸しとの戦いも激しい。「何もかにも諦めて、この困窮に目をつぶり、観念しなければならぬと感じている様子」で大崎は、「最初は散々あたりちらし、悪態をつい」ている「債鬼【沼

内】の手の中に屈するだけ屈してしまう(76)。「債鬼の手の中に屈するだけ屈してしまう」とは、具体的にはどういうことかは、この場面では推測できないが、後日、釧路警察で取り調べ中に彼が告白したいと思ったこととして、「入地以来毎年打ち続いた凶作のために飢餓と借金とでうちのめされて、移住民として分配された土地を失い、最後の望みとして、虹別を逃げし、鶴の棲んでいるといわれる釧路原野の新しい土地に盗み作りの危険を冒して入地はしてみたものの<後略>」(233)と書かれている、下線部がそれではないかと推測される。

大崎は債鬼に屈したように見えるが、しかし、その後で「何か堅い覚悟でもありそうな緊張した顔で、きっぱり言って退けた」開き直りには迫力がある。

この大凶作はあんたのほんくら^{まなこ}眼にも見えてわかっているべよ。払われないものは、逆さになったって払われないでないか。それでも取ろうというなら、おらたちはあんたの手で首を絞殺されると、おんなじだ、それもよかべえ。だが、よく覚えておくがいいぞ。そうになったら一家八人でお前のところ怨み殺してやるからな。約束の期日はまだ来ないんだから、それまでによく考えて置けばいい。お前一人の命とおらたち一家八人の命のやりとりでは、おらたちの方、うんと損だども、お前のとこにだって、いらぬ命はまだあるべえからな。(76)

沼内は、「大崎の眼のすわった、逞しい面構と、荒々しい言葉に氣負けし、こんな獣みたいなものを相手に喧嘩しても損だと考えたが、わざと平気を装い」ながら、「約束の期日に、又、お目にかかろう。一家八人首をくくるのも、おれの知ったことではないが、金の方さえ、拵えてくれれば、十把一とからげの安い首をくくらずとも埒があくのさ」と云い残して戻っていった(76)。

4.4 冬期の出稼ぎ

4.4.1 出稼ぎ

原野の人々にとっての稼ぎ場所として、大雪が降ると、鉄道線路の除雪仕事がある(100)。

その他に、男たちは冬期には遠方まで出稼ぎに行く。「釧路炭田、オホーツク海や根室水道や、襟裳岬や千島方面の冬漁へ、或る者は既に雪につつまれた山間の冬期材木伐り出しに」行った(同上)。出稼ぎ先では、「方々から集まった冬の間だけの仲間と、むだ口を叩きながら仕事をしたり、飲んだり、時には喧嘩をしたり、女にありついたりするその日、その日の生活が困窮と飢餓とに対して何の屈託もない全くの息抜きのように思われるのだった」(同上)。

残されたのは、「余程の老人」と、女、子供たちであった(同上)。女たちは、「男たちはみんな出稼ぎに出ればいい。爺さんなんか残らなければいい。そうすれば誰にも怒られなくて寝ていられる」とぬくぬくとした寝暮しを考える(同上)。

大崎は、「天塩や十勝の山奥の冬期伐材の勇ましい生業」という「飯場の出稼人夫」も幾度かしている(145)。

4.4.2 役所の凶作救済策

凶作で収獲がないため、生き延びるためには、出稼ぎや、役所や村が実施する、砂取りなどの「出面」で稼ぐか、高利貸しから土地を担保に借金をするが、借金が嵩み土地を手放し、小作に転落したり、逃亡する者が続出する。『処女地』の主人公もその一人である。

【標茶旧市街地の宿の亭主】農家の話で景気のよい話はありません。併し、彼等はその滓ばかりになってしまったような味の悪い話を厭わずに繰り返した。亭主の話ではその村でも急いで救済を要する農家が続々と出てくるので、畑の仕事の一段落つくと同時に河砂利の採取をさせて急場を救うことにするように村会で決まったのであるが、そのために支出される経費では一と月も、もつかどうかがあやぶまれているということであった。

「なるべく沢山、山や漁場さ出稼ぎに行って貰わんと、結局、みんなが食えなくなるってことで、みんな騒いでいるんで、困ったもんだで。」 (18)

帰りにまた同じ宿に泊まった大崎は、役人達が大凶作に対して事前に救済方法を立てるために、大勢で視察に來ていると聞き、「去年の砂利取は不公平だった」と不満をのぞかせる (53)。

凶作が続く中、移住者は、騙されたと吐息をつく一方で、村会に対して凶作救済土木事業の実施を要求しようとしていた。

部落の若い者たちが原野中での老精農で村役場や村会議員や世話所に対して評判のよい津田爺さんと横尾爺さんとを表面に押し立て、凶作救済土木事業として、砂利採りと拓殖道路普請の仕事をものにしようと原野の人々を駆り立てて騒いでいる間に、大崎の考はいつの間にか、向うの土地へ移り入り込むことと、その為の用意とに集中されていた。(68)

4.5 大崎一家の日常生活

冬場の出稼ぎ期以外には、凶作に借金という苦しい状況での日常生活は、どのようなものであったのか。

4.5.1 住居

虹別原野に入地した時には、「上等な開墾移民小屋」が待っていた (132-133)。「節穴だらけの薄い板で叩き上げられた安小屋ではあるが、屋根を柱で葺き、小さい窓硝子のついた」ものであった。大崎が「新しい土地」に立てた家は、「おがみ小屋」と呼ばれる隙間風が容易に入り込んで来るような、簡素なもので、厩も同じ屋根の下にある (131-132)。積雪に強い、白樺の立木を利用した掘立の拝み小屋は、家族の協力で瞬く間に出来上がる (同上)。大崎は、その後も、どんどん住みやすく改良を加えていく。照明にはランプを使っている (134)。

4.5.2 家財道具・衣類・夜具

大崎が夜逃げの荷物として馬車に積み込んだのは、食料、種子類の他に、「農具と小屋建て道具、材料、夜具、布団、着物類、勝手道具、仏壇、【父親の】お骨、所有地標」と「最後に思い出した」馬櫓である (101)。その他に、時計、持っていくのを忘れた暦がある。馬櫓は、夜逃げの途中で曠野に捨て置き後で取りに行くつもりがそのままになってしまった。小さい鉄砲風呂は馬車に積み切れず、虹別から持参できなかった (139)。

衣類についての記述は多くない。娘が溺れたとき、大崎が自分の着物を娘に着せるために脱ぐと、その下は「継ぎだらけの、垢にまみれた、メリヤスシャツ一枚」だった (168)。葬式には、娘に「一番上等の、併しかなりつぎの当たった白地の肌襦袢を着せた」 (171)。妻が死んだときには、「洗いざらしの単衣物を着せた」 (183)。

「二度目の逃亡」で大崎が売り払おうとした衣類は、「今時、農家だって、こんなの【襦褌】金

銭出して買う人はありません。デパートへ行けばきれいで安いのが、うんとぶら下がっていますからね」と言われた代物である(209)。一緒に売ろうとした八人分の夜具布団も大風呂敷二つに包めるほどで(210)、その薄さから日常生活の貧しさが推測できる。

4.5.3 食

食事は貧しい。大崎家の「暗い洋燈」の下で、啜るのは、「莢豆の粥」である(12)。「青黄色い皆の顔は垢の為に底光りしていた。」(同上)晩飯は量が充分でないため、育ち盛りで食べたりない子供たちには、種芋として取ってあった小さな馬鈴薯が一人一つ当て、与えられるが、その大きさを巡って喧嘩が起きる(同上)。

大崎が家で酒を飲んでいる形跡はない。ただし、父親の葬式では、寒いので手伝いに来てくれた人には振舞い酒が出ている(82)。

夜逃げの当日、「晩御飯の他に翌日一日分の飯をたいて櫃の中に入れ、更に布団に包ませた。鱈の塩引きを焼いたのと漬物を鉢に入れて、すぐ取り出せるように」用意した(102)。夕飯は、「鰯の干ばしと馬鈴薯との煮ころがし、干わかめの味噌汁、温いご飯。これは誰にも御馳走であった」(同上)。

道中で食べたのは、「冷い握り飯と、焼け焦げた脂臭い身欠き鯨」(120)、朝と昼は「ぼろぼろに冷えた握り飯」(125)、「川水を鍋にくんで、飯をたき、それに干した菜っ葉と味噌を入れた雑炊」(127)である。「新しい土地」に着き、家族で建てた「おがみ小屋」での最初の夕飯は、酒が付き、大崎を驚かせる。

榎火の下から一つまま焼いた馬鈴薯が掘り出された。身欠鯨が脂の青い火をあげながら榎火の上で焼かれた。それをお捨ては指で裂きちぎって、大きい更に馬鈴薯と一緒に入れ、醤油を少しかけた。それから母親のお種は、小さい銚子を一本、大崎の前へつけた。(134)

年の暮れは、黒砂糖を使った鶏豆の「煮豆と赤井塩鱈と菜っ葉の雑炊で送り」、元旦を迎える(153)。1月5日には、大崎は兎をとってきて「正月のおお御馳走がやって来た」と妻に「見せびらか」す(同上)。「ほんのちょっぴりの黒砂糖と醤油とが入れられ」た鍋から、厩にいる愛馬の北星も地面を蹴るほど「うまそうな匂いがむんむんするほど小屋にこも」った(154)。

4.5.4 開拓村の息抜き

凶作ではあったが、開拓村の唯一と言ってよい娯楽¹⁸⁾である馬頭観音の秋祭りには、例年どおりに競馬を行うことになった(80)。大凶作で、「原野の人たちの気持ちが荒れずさんでは、何かにつけて、うるさい事が持ち上がって来る」のを避けるため、移民世話所の秋田さん、生方牧場の管理人赤井さん、原野の人々に多額のお金を貸している小坂商店主などにとっては、「多少は原野の人達の機嫌をとって置くのも損ではない」ということになったからだ(82)。「世直し競馬」である。標茶から仕出し弁当が取り寄せる折詰は、「一個二十五銭に見積もらせて、百七、八十ヶ」の費用は、「赤井さん、秋田さん、小坂商店主、その他の市街地の小店屋たち、駅通所、校長さんなぞからの幾らかの寄付でまかな」い、「競馬場で昼食を出す」計画である(同上)。馬頭観音の秋祭りには、村の外から商人たちもやってくる。

一軒に一つ宛、折詰が渡された。彼等はお互に充分に顔を知り合っているので、二重取りは到底出来なかったが、しかし、前以て念のために、一軒に一枚ずつの引換券が配ら

れていた。どこの家も一家総出で、握り飯を嚙りながら、折詰の料理をつつき合った。そうして、いつの間にか、其処此処に安酒や焼酎の酌み代わされているのが見えた。その有様だけ見たならば人は彼等が豊作の秋祭りに集まり祝っているように思うかも、^{【ママ】}しれないが、ほんとうにそういう苦しい、高い酒を飲みでもしなければ、散ずることが出来ない重苦しいもので胸がつかえているからなのであった。(84)

「秋祭と世直し競馬は原野の人たちに飲み、食い、又賭ける^{【ママ】}放楽【法楽】の一日をほしいままにさせて煙のように消えて行った」(85)。

4.5.5 病氣・医療

病氣は、「医者のいない土地であり、どうにも致し方なく、なりゆきに委せるより致し方がなかった」(97)。祖母の視力が落ちたときには、「寒鳥の生き目がよく効く」という同郷の津田老人の勧めで吞ませてみるが、喉に悶えてしまう(98)。家族は、「祖母のゆがみ、もだえ、油汗の流れる黒い顔をみつめて、うろたえるばかりであった」(同上)。

早川は、農民には病人が多いという指摘をしている。これは早川の地主という家業上の知識によるものと推測される。

暁から黄昏まで新鮮な空気を吸い、万物を生育する大地に足を着けている生活にも拘わらず、農民の間には実に病人が多いと言わねばならぬ。病氣の中でも、特に多いように思われるのは、胃腸病、肺病、眼病、皮膚病であり、特に驚かされるのは子供の發育障害と年齢性別を問わぬ精神病のようである。(178)

大崎は、娘が小沼で溺れたときも、「土の上へ膝をつき、お常の泥臭い身体を着物ごと、もみ揺すぶった」だけで、救急処置を知らなかった(167)。

4.5.6 学校教育

長編小説＜土と人＞では、学校は村の中心的な場の一つとして描かれている。虻別村の歴史を書いて出征したのは、小学校の若き教員だった(早川, 1944)。^{【ママ】}『処女地』では学校での教育の場面は描かれていないが、秋祭りには校長【教員】も寄付した人として登場している(82)。

しかし、「新しい土地」には学校はない。夜逃げをする日の朝、初めて子供達に出かけることを告げると、長男と長女が「おらたち学校はどうしたらいいのか、と突然たずねた。大崎とお捨は痛いところを突かれたというように、目を見張って顔を見合わせた。」大崎は「家に用事っあるから休め」と「ようやくこともなげに言う」が、長男は「あしたはどうするのか」と迫及する(101)。「あしたも、あさっても休んでもいい。こんどほかの学校さ上げてやるからな。うんと、でっかい学校だぞ」と誤魔化す(102)。子供達は、それで黙ってしまうが、結局、新しい土地では、親も字が読めないから家でも習えない。子供達の学ぶ権利も守られていない。

5. 釧路原野の「おらの土地」での悲劇

5.1 夜逃げ

大崎が開墾地を捨てる覚悟をして、家族を説得して、夜逃げを実行するまでに3カ月ほどかかっている(表1)。

表1 夜逃げの決心から実行まで

(括弧内の数字は引用ページ)

①	導入部：逃亡の決意までの経緯 (6-12)	昭和7年	昭和4年に入殖後、あしかけ4年の凶作続き。
②	土地探しの四泊五日の野宿の旅 (12-62)	8月お盆過ぎ	標茶旧市街地の商人宿に宿泊。 野宿4泊。「おらの土地」の発見。 塘路駅から標茶駅まで汽車33銭。 標茶旧市街地の商人宿に1泊。 虹別に帰宅バスに視察の役人が同乗。
③	夜逃げへの家族の説得 (62-101)	秋口	鶴の棲む土地と言っても家族は反対。 債鬼の厳しい取り立てと家族の同意。 馬頭観音の秋祭りでの折詰の配布。 チフスに罹患した父親の急死と葬式。 「父親の智慧で行きがけの駄賃」として無尽講のお金を落として40円ほど入手。 祖母の極度の視力減退。
④	夜逃げの実行 (101-129)	11月20日夜	三日二晩の逃避行。
⑤	新しい土地での盗み作り (129-197)	一昭和8年晩秋	冬越し、末娘の溺死、播種、凶作、家族の相次ぐ死。

5.2 自然の脅威と悲劇の連鎖

5.2.1 「新しい土地」での「盗み作り」

大崎は、開墾地から「新しい土地」に向かう途中の釧路原野での野宿で、「借金と餓え死にとの心配さえなくなれば、百姓の暮しは安楽で好ましいものに相違なかった。然も、そういう暮しが、今、始まりかかったのだと思うと」「のびのびとした気持ちで」の蘆の寝床で眠った(120)。

しかし、虹別開墾地からの逃亡先の「おらの土地」は、鶴の棲む泥炭地であり、虹別開墾村と同じように不毛の地であり、自然の脅威にさらされ「盗み作り」の生活はうまく行かなかった。大崎は、「どんなに悪い土地だって、借金取りよりいいにきまっている。うんと、がんばって開墾せば、土地はおらたちを見殺しにするわけではない」と信じていたが、「彼は債鬼以上に、自然の仮借なき吝嗇というものが厳存することをしなかった」(188)。

虹別では、開墾は「団体移住のこととで共同でプラウを以て馬耕することも出来たし、金銭さえ出せば、あとは種子を蒔くばかりに整地まで請け負うものもいた」が、此处では「否応なしに自分の手と、鋤とで荒土を掘り返さなければならない」ので、ひどく力のいる仕事であった。それでも、立木を伐り倒し芦原を焼いて五反歩ばかりの土地を拓いた(177)。

「彼は大体の整地をして、先ず今年の冬から来春までの餓えぬだけの用意に、手っ取り早く小麦と裸麦とを蒔いた。」(同上)「種子用の蓄えは、これでぎりぎり」「食糧の欠乏で、いつの間にか、種子用の貯えに手がついていたが、既に背に火のついたような飢餓を押さえることはできず」、大崎が「この上にも食べ料を減らしても、作付けを多くしたいと言うのに対して」、母と妻は「これ以上食を減らすことは出来ない」「もし今年の作が悪かったら、それこそ一家餓え死にしなければならない」と反対した(同上)。大崎の「もし食糧の欠乏がこれ以上ひどくなったら、有り金で食糧を買い入れるのも止むを得ない」という、いわば最後の切り札にも、賛成しなかった(同上)。

女たちは、今年はこの新土の性分を見定めるためにも蒔き付けは、この位でやめて置いて、安くともいつでも金銭になる木炭と薪を出す仕事や、火入れや、^{あらおこし}荒転をして、来年の仕事の程度にして置く方が、暮し向きの心配がなくて安心だと、驚くほど熱心に、執拗に、がんばるのであった。(同上)

そこは、美しい鶴の棲む泥炭地で、人間の農耕生活にはまったく不向きな地であった。そして、自然の脅威に負け、蒔き直す種もなく、虻別で味わったと同様の凶作に収穫どころか家族が食い繋ぐだけの食料も危うい状態になる。祖母は、「土地の生産性を支配する見えぬ神の力に豊饒をひそかに祈る様子であった」(178)。「百姓を喰い殺す湿地まなこばかし」で、「おれたちは、みんなこの土地に喰い殺される運にきまったのだのう」と予言する(188)。

5.2.2 悲劇の連鎖

夜逃げの直前の父の急死に始まり、移り住んだ釧路原野では、悲劇は起こるべくして次々と起きる。僅か一年余りのうちに家族を四人も失い、残された子供達にも心身に異常が生じている。

- 悲劇1 チフスの流行と父親の急死と葬式。
- 悲劇2 春の出水による末娘の溺死。
- 悲劇3 娘の死が原因での妻の鬱病発症と縊死。
- 悲劇4 母・祖母の白内障の悪化、母の縊死、それに伴う労働力不足。
- 悲劇5 祖母の呆けと死。
- 悲劇6 二人の子供の栄養失調による発育不全と知恵後れ。
- 悲劇7 宿で全財産を「掠めとられる」【方外に安く買い叩かれる】。
- 悲劇8 子供との別れ【子捨て】。
- 悲劇9 木賃宿で泥酔していて全財産の盗難。
- 悲劇10 放火強盗の容疑で警察に連行。
- 悲劇11 鉄道飛び込み自殺失敗、右脚切除。
- 悲劇12 サムライ部落で紹介されたバタヤ稼業も乞食稼業もできず稼ぎなし。

5.2.3 日々の生活

「新しい土地」に着いた初冬には、虻別でできた「不出来でちょっぴり」の野菜などの収穫物の他に、「とっときの御馳走」としては、「僅かばかりの屑米と、味噌と、醤油、塩があるほかに、身欠鯿、塩鱈、干鰯が少しずつ」あったが、「一家みんなで腹いっぱいになるほど食べられはしない」量であった(140)。それでも木炭を焼く窯が出来上がったとき、「夜は馬鈴薯を大根下しでおろして団子にし、茹でたのが、窯の出来上がりの心祝いとして、みんなの口へ振舞われた」(144)。しかし、食料はどんどん無くなっていき、栄養障害が家族に様々な形で表れる。

風呂もない不衛生な生活である。溺死した末娘の遺骸を「アカまみれた布団」に寝かせ(170)、「曾祖母、祖母、母親にあたる三人の女たちが、おうおうと泣きながら、どろどろした汚い着物に、髪も乱れ、垢じみた顔をして」、「青ぶくれの小さい遺骸を古手拭いで拭う」と、「遺骸の肌から青黒い垢が、ぼろぼろとよれて落ちて来た」(171)。「蜜柑箱の半分にも満たない^{【マツ】}」、お常のお骨の前には、南瓜雑炊が供えられ、皆も「空腹を僅かに医^{【マツ】}やした」(173)。

5.2.4 医療・医薬品・病気

虻別村でも新しい土地でも「医者^{【マツ】}は他の世界のものであった」(60)。大崎家の末娘が事故死し

た後、母親【大崎の妻】のお捨は、心の病に蝕まれ、「子供を奪い掠うものが襲うて来るとわめき出すに至って、どうにも手のつけようがなくなる」(180)。早川も「特に驚かされるのは子供の発育障害と年齢性別を問わぬ精神病」が多く見られると前述のように指摘している(178)。

遂にはお捨を小屋の柱に縛りつけて置かねばならなくなった。…<中略>…お捨が暴れ出すと、縛られた柱ごと、小屋を揺り倒さんばかりであった。大崎は心配のあまり、或る時には、野良仕事の畑へつれて行って、傍の大木へ、犬を繋ぐように繋いで見張りをしながら働くこともあった。お捨は髪をふり乱し、着物をはだけて泣きさわぎ、ひいひい喘ぎながら遂には地上や、叢の中に眠って終うのであった。そういう時、大崎は幾度となく狂った妻の野獣のような寝姿を脚下へ見据えて、暗い心で自分の両手をそっと見くらべ、その、やり場に困ったことであったろう。彼は土と垢とにまみれた妻が、どうかして、このまま目をさまさずに死んで行ってくれぬものかと、熱い、ぬれた目で、横たわったお捨の身体を見守るのであった。(179-180)

病気の中でも心の病は特に手がつけられない。妻と母を縊死で失い、労働力も失い、白内障に認知症の老母の失禁と呆け、幼い子供を抱え、生活にも開墾にも大崎は行き詰まる。

5.3 二度目の土地捨て

10月、「馬鈴薯も大豆も小豆も蕎麦も唐黍も南瓜も秋大根も碌なものは何一つとしてできなかった」(196)。大崎は、みじめな収穫を前に「この土地に来て、僅か一年たつたため内に一家七人のうち四人までがつぎつぎに死んで行った」ことを思い浮かべ、この「新しい土地」は、「作物や種子のみならず、大崎一家の命さえ受け入れようとしない土地なのかもしれない」と言いようのない不安を感じる(同上)。

大崎は、残った二人の子が「発育盛りの年齢に栄養欠乏が続いた」ため、息子は知能に、娘は背骨に発育障害を起こしていることに気付き、「全身の気力が抜け落ちる思いがし」て、「ああ、おら、もう駄目だ」と胸の中で絶叫する(197)。「この絶望の悲嘆は、子供に対する恐ろしい盲目的な情愛だけを極度に強くさせ」、大崎は自分と一緒にいると餓え死すると考え、小樽に子供を捨てる決意を固める(同上)。

死の曠野から釧路に逃れるための「二度目の逃亡」の用意として、「少しでも金銭になりそうな道具や品物は、一切合切持って行って、金銭に換えたかった」が、子供たちと同じように愛馬も「この一年の間に運動と塩との欠乏のため骨軟症【骨軟化症, osteomalacia】にかかって痩せ衰えて」いたため、持って行けるのは「貧しい家財道具の中、郷里から持って来た幾つかの位牌と夜具布団と着類と、僅かばかりの収穫物」だけで、「一番、金銭になる」木炭や炭は、重いので全部置いて行かなければならなかった。

大崎は、いつかスキーに来ていて迷い込んできた札幌の学生に、今いるところが「釧路原野のチルワツナイ附近」の「クチョロプトあたり」であること、釧路までは地図上では南に三里半ほどしか離れてないことを教えてもらっていた(158-159)。大崎は、五反歩の焼畑¹⁹⁾と、家族四人の墓と、「大崎常造所有」と墨で書かれた杣標を残して(199)、いつか山の上から望遠鏡で覗いた工場の煙が立つ釧路の町(161)を目指す。

6. 世界大恐慌下の釧路の町での低所得階層の生活

6.1 釧路での最初の五日間

大崎は、釧路近郊で泊まった宿で全財産を僅か23円50銭で「一切のものを売り払ったというよりは、一切のものを掠め奪われてしまっ」た(211)。そして、寒風吹きすさぶ不況の町で、大崎は、町に到着後わずか五日の中に、無一文になってしまう(表2)。

6.1.1 商人宿で

最初に泊まった「若狭屋」は(207)、大崎が「街道で空車を引かせて来る戻り道の百姓に」教

表2 大崎常造の釧路での転落の軌跡

(括弧内の数字は引用ページ)

	見出し項目		釧路での出来事
①	二度目の土地捨ての決意 (197-198)	10月	乏しい収穫に絶望し、子供を生かすために、小樽行の汽車に乗せて捨てるという「恐ろしい決心」をし、土地を去る準備をする。
②	釧路への出立 (199)	1日目	五反歩の焼畑と、家族4人の墓と、「大崎常造所有」と墨で書かれた杓標を残して、骨軟化症の馬が運べるだけの僅かな収穫物、夜具布団、着物類ものしか持てない。金銭になる木炭や薪は捨てて行く。【この時点で所持金は不詳*】
③	釧路近くの街道沿いの商人宿で (204-211)	1泊目	馬と馬車を含め、全財産を金銭に換えようとして、僅か23円50銭で「掠めとられる。」大人1人、子供2人の1泊3円50銭。【この時点での残金も不詳】
④	釧路駅での子別れ (212-214)	2日目	子供と釧路の町を歩き廻って過ごす。懐中には8、90円。【23円50銭を含む】 昼に親子で赤い魚の寿司をたらふく食べ満足する。「2円幾ら。」 街を流れる甘い女性の歌声に欲情を感じる。 夜、駅でかけ蕎麦を食べる。【金額不詳】 夜7時発の小樽行きの汽車に子供2人だけを乗せ、切符(子供2枚4円95銭)と7円入った小銭入れと弁当を持たせて座席に座らせた。【弁当代・入場料不詳】 大崎は汽車が出るまで待たずに後ろも見ずに込み合ったプラットフォームを街に出て行く。
⑤	誘惑の夜の街 (215-216)	2泊目	屋台店で焼き鳥と酒を飲む。【金額不詳】 女将が「一晚五円で綺麗な若い女」を世話するというのを断り、安宿へ向う。 暗い夜道の途中で老女に袖を引かれ、朝食付きで3円で丸髷の女性を紹介すると言われ、路次の奥の家に連れて行かれ、しこたま飲む。
⑥	仕事探し (216-218)	3日目	翌朝15円請求される。 仕事探しに町を巡る。しかし、「農家が悪いときには、漁の方も悪い」。
⑦	木賃宿 (219-221)	3泊目	木賃宿で晩御飯10銭を食べ、朝食付き30銭で泊まる。 同宿の男に煙草を2本を「騙り奪われる」。
	職安へ (222-223)	4日目	早朝職業安定所へ行くが仕事はない。 職安で仕事を貰えた者が貰えなかった者に、「切符」を売っているのを見て、高利貸しのようなと思う。

牛乳泥棒 (223-224)		軒先に配達されている「牛乳壺をかつされって行く労働者」を目撃し、牛乳泥棒に間違えられないかおびえる。
周旋屋 (224)		魚市場の近くの蕎麦屋で焼うどんを食べる。【金額不詳】
ヤケ酒 (224)	4泊目	前の晩に行った焼き鳥屋で酒を飲み酔っぱらって宿に帰る。【金額不詳】
泥酔 (224-225)		「あんまり、何処さ行っても、凶作だ、不景気だって言うから、胸糞が悪くなってね」と宿の亭主に言っ、よるけながら、泊まり賃30銭を前払いして、寝る。
盗難 (225)	5日目	翌朝遅く目が覚めると部屋には誰も残っておらず、位牌と全財産が入った風呂敷がない。
無一文 (225-226)		宿の亭主に掛け合うが、相手にされず、朝食が済むと追い出される。胸算用では、盗まれた残金は50円**。
彷徨 (226-249)		無一文になって釧路の町を彷徨する。

* 釧路に立出時の持ち金は、虹別を夜逃げしたとき持っていた所持金から道中に使った宿泊費と飲食代の残金であり、少なくとも無尽を落とした約40円はあったと考えられる。④での所持金80～90円から逆算すると、夜逃げしたときには、約60円の所持金があったと推測される。

** ④で懐にあった8,90円から④⑤での出費約30円と出費額不明分を引くと盗まれた残金は約50円となる。

えてもらった安宿だったから (203)、大崎は標茶の旧市街地で泊まったことのある宿屋のように安心して泊まったと考えられる。宿の亭主によって、宿帳には、「釧路国河上郡虹別原野六十九線北十九号、大崎常造、三十六歳」と書かれる (204)。宿賃は、「朝と晩の食事付きで大人一円五十銭、子供一円」であった (205)。

夕食後、大崎は子供と一緒に床屋に行き、「自分と秀造の髪をかって貰い、銭湯に行った」(同上)。久しい間、「熱い湯に入ることは全く夢にも望めないことだったので、身体も魂も、とろけて行くような快感」を味合うが、「既にひどい畸形になっている」「子供たちの様子は大崎の心を暗くした」(同上)。

6.1.2 農家と町の経済の繋がり

宿に戻った後、大崎は「北星や荷馬車や夜具布団や、その他一切のものを売払うために、宿の亭主に相談」する (205)。

亭主は、「挨拶代りに凶作のことから」話し始め、農家と町の経済の繋がりを語る。

農家の悪い年はやはり町だって不景気で、宿屋もまるで商売にならない。農家がいいと、奥の開墾部落から畑ものが、どんどん出て来るので、そのために百姓の人たちも、泊まりがけで出て来て金を使っていくが、「この何年この方ってものは毎年毎年ひどい凶作で開墾部落からは土地を捨てて逃げ出して行く農家が多くてこんなことでは、折角、拓いた土地も草ぼうぼうになってしまうにきまっていますさ。あんたも開墾部落から出てきた人でないか。(206)

このようなことを「平気な顔で、ずばりと言」い「大崎の顔色を見て、わしは百も承知だと言う様子」の亭主に、大崎は、自分の身の上を全て話してしまい、「最早や宿の泊り客ではなく、口すぎを求める一人の労働者として亭主の好意にすぎる人間」になりさがる (同上)。

職を求める大崎に、亭主は釧路の景気は「開墾地よりも、もっと、もっとひどい」と、次のように説明する（同上）。

- ・馬車屋も港も不景気のために仕事が全くない。
- ・馬を飼って行くのさえ難儀をしている。二束三文に馬を売り飛ばし、その日その日の糧を辛うじて得られる日雇い人足になっているが、仕事の当るのは若い者でも、幾日に一度と云う割だ。
- ・附近の炭山でも、まるっきり不景気で、できるだけ鉱夫を減らし、残った鉱夫にも出来るだけ石炭を掘りださせないようにしている。しかし、鉱夫は暮しが立たぬので少しでも多く掘り出そうとするので、会社では稼ぐ日数と時間を減らし、その上、賃金も減らしているが、それでも売れない石炭が山元にも港にも山のように積み重なり、その上に草が生えている。
- ・だから釧路港には汽船の影も見えない。
- ・石炭ばかりか、漁業も海産も駄目だ。
- ・木材も海岸に積み腐らすほど置かれている。
- ・この市街地の製糸工場もいつ仕事を休むかもしれない。
- ・雑穀、畑ものも悪い。

6.1.3 釧路商人の商法

亭主は、大崎の口には出さぬ、「結局、何もかも売って金銭^{かね}にして、子供は小樽へやり、自分は町をあさり歩いても食いつなぐ工面をしなければならぬ」という「大崎の事情と囊中とを察した」ように「今時の景気の悪い時ではいくらにもなるまいが、みんな売るより他にしかたがあるまい」、「明朝、適当な買人を見つけてやる」と言う（207）。しかし、亭主の紹介で来た馬の買い手は、「ぶくぶくに太って、変に青黒い顔をした五十歳がらみの男」で、「つぶし」【肉】にもならないが、「大奮発して、馬車ともで15両」²⁰⁾と買い叩き、「周旋料は売人の方からにしてください」と「五円札三枚」を渡す。（同上）

若い古着屋も、夜具布団は「古綿だけの値段」、着類は「失礼ですが襦袢ばかり」、「今時の人は、農家だって、こんなの金銭出して買う人はない」、「デパートへ行けばきれいで安いのが、うんと、ぶら下がっている」と言い、布団代と合わせて十二円を畳の上に並べて出した（209）。この「デパートへ行けば…」の話は、スキーをされていて迷子になって助けを求めて大崎の小屋に来たスキーヤーとともに、大崎にとっては突如湧いて出た別世界のことのようで、『処女地』の中での貧富の格差が、はっきり感じられる部分である。

大崎を喰い物にしたのは宿の亭主も同様であった。大崎が「あの新しい土地が彼の労力に酬いた貧しい報酬のその又一部にしか過ぎない作物」には、「馬鈴薯、蕎麦、大豆、小豆、唐黍、小麦、燕麦、南瓜」などがあったが、亭主はどれも「ほんのちょっぴりで、まあ家でたべるだけ」、「全部で三元」と「独り決めに」にした（210）。大崎は、「馬車の口銭と差引」にすると言われ、恐れを抱き、宿賃大人一人、子供二人の一泊の宿賃「三元五十銭を払い」、「一切のものを売り払ったというよりは、一切のものを掠め奪われてしまって、魔の口を遁れるように街道を急ぎ釧路の町へと向かった」（211）。

6.2 釧路到着

大崎は、釧路に着いて、改めて子どもを小樽に送る決心をし、汽車に乗せるまで一日を町で寿司を食べたり、街を見たり楽しく過ごす。その後、子どもに6円50銭を持たせ、叔母さんが待っている、釧路の町で用事を済ませて後で行くと騙して汽車に乗せ、込み合ったプラットホームで見送りもせずに、町に出ていく。

町に出て焼き鳥屋に入り、酒を飲む。女将に「若い女」を紹介されると言われるが断って、近くの安宿に向かう途中、気が付くと黒い女影がすり寄ってくる。「丸鬻で、奥さんと同じですよ。朝まで三円。高いようですが、朝御飯付きですよ。宿に泊まるより、得で面白いですよ」と「ひそひそと、併しねちっこく」彼を誘い、「一緒に歩くと、警察の人がうるさいから、おらの後をついて来てください」と言われ、大崎がついて行くと、「ある路次の奥の家に導かれ、その二階で丸鬻の、厚化粧の女にひき合わされ、したたかに酔いつぶされて了った」(216)。

翌朝の迎え酒の後、15円を請求される。大崎は、後で思い返して、「持たないものは、一層持たないように骨までしゃぶられ、貧乏者は一層ひどい貧乏者に落ちるようになるもんだ」と「骨の髄まで込み徹るほど、しみじみ悔恨の念を深めた」(219)。

気が付くと10時で、一時間も前に子供たちは小樽に着いていることを思う。仕事を探しに町を歩くが、最初に泊まった宿で聞いた不景気な話のままであった。「千島行き人夫、求む」という周旋屋の張り紙広告に、行ったらもう二度と帰っては来られないだろうと身震いする(224)。

6.3 低所得階層の生活

6.3.1 転落の始まり木賃宿

大崎は、河岸の裏通りの木賃宿に行く。

戸を開けて入ると、そこは板敷で汚い長い食卓と、長い腰掛が据えられた薄暗い食堂であった。三、四人の黒い、むさくるしい姿の男が、思ひい^{ママ}思いに腰を掛け、食卓にしがみつくように、背をまるくした姿勢で晩飯を食べていた。(219)

宿は、前払いで1泊朝食付30銭で、食事は、別料金の10銭である。苦い番茶を飲みながら、「中位の丼に盛り切りの飯に、馬鈴薯と魚の切れ端との煮込み一皿」の夕飯を食べた。出て行く日の朝御飯には「冷えた、ぼろぼろの飯にぬるい味噌汁をかけて、かきこんだ」(226)。

翌朝、大崎が職業安定所に行ったときには、すでに長い行列が出来ていて、仕事は得られない。別の処に仕事探しに行こうとすると、幸運にも仕事を得られた男に「五銭、割増しつけるから、おめえの札、おれに売ってくれろ」、「五銭なら、安すぎる。十銭だせや」という「切符と銭の交換」を目撃する。

魚市場でも仕事がなく、大崎は前の晩に行った焼き鳥屋に行き、酒を飲んで酔っ払って宿に帰って寝る。抱いて寝ていた全財産と位牌の入った風呂敷包みがないのに翌朝気づき、宿の亭主に訴えるが、朝食が済むと追い出される(224)。

一文無しで寒風の吹きすさぶ町での盗み食いをする路上生活の中で、ある屋敷の納屋で眠り込み、強盗と間違えられて警察が呼ばれる。丘の上の警察署で取調べを受ける中、子捨てのことを含めて身の上を聞き質された末、子どもは無事に小樽で保護されているから迎えに行くようにと言われ、5円50銭を持たされて釈放される。

しかし、自分が居れば子供達は食べていけないと思い、汽車の前に身を投げ自殺を図るが、右

脚を失っただけで、病院に担ぎ込まれ、市役所と警察との取り計らいで「行路病人の施療患者」として全治まで手当を受ける。そして、一ヶ月半後に完治したとして、退院させられる（240-241）。事故で血で汚れた着物の代りをもらい、子どもは「小樽の育成院」にいるから引き取りに行くようにと言われ、6円50銭【5円30銭】²¹⁾を返される（242）。

6.3.2 サムライ部落

行くところのない大崎は、「ふとバタヤ【ばた屋、ごみ箱や道路上で紙くず・ぼろ・金物などの廃品を回収して生活するひと。】（『大辞泉』）」になって、その仲間に入れて貰おう」と思い、『『世の残残者』の群れの雑然と巣食うている」、俗に「サムライ部落」と呼ばれている窪地に行く（243）。しかし、仲間入りするには、世話人に挨拶をし、重だった数名に一升酒を御馳走するという儀式がある。家賃は、「一番安いところで、月に四十銭、下宿なら日に十銭」で前払いである（243）。ここでもお金がないと暮らせない。

最初に会った老婆が大崎を「赤錆の古亜鉛^{トタン}と古板切れと筵で囲まれた小屋」に下宿させ、自分の用心棒兼バタヤの相棒としようと考え、いろいろと面倒をみる（244-248）。

大崎は自分の身体を死から救い、また苦痛から救ってくれた医者よりも、この老婆に対して非常な感謝の念を深くした。医者は自分を救ってくれはくれたが、つまり自分に一層悲惨な運命を無理押しに押しつけてよこしたようなものであった。併し、この老婆は、このどん底の、一切の救助のない生存のうちに、尚お生きる途を与えてくれるのであったから。その日の昼に、彼は、老婆が芥捨ての穢土の中へ種を蒔いて獲ったのだという、小さい南瓜の、ゆでたのを御馳走になった。彼は本当に生きかえった心地がした。（245）

老婆は、仲間が拾ってきた座布団50銭を45銭に値切り、大崎に60銭で売って義足まがいのものを作ってくれる。しかし、片足では思うように働けず、大崎はバタヤは三日で廃業する（244-248）。次に、老婆は、大崎に白い金巾を着せて乞食に仕立てる。仲間から街角の縄張り代の「座銭」を売ってもらい、世話人と老婆に「口利料」を払って橋の上に座るが（248）、不況で道行く人は誰も見向きもせず、稼ぎは「一銭銀貨三つ」だけであった。これは、老婆の家の「下宿代の日分にもひどく不足」している。財布の在り金はあらい、ざらい五十銭余りしか残っていなかった（249）。

彼は急に気持ちがふらふらとした。彼は横町の一膳飯屋に入って、持ち金を叩いて焼酎を一杯のみ、夢中で飯を食べた。小一時間ほどして、彼は、すっかり暮れた街へ出た。彼は、ただ、のろのろと、さ迷い歩いた。そうして老婆の小屋へは戻らず、狐狸に憑かれた者のように、雪の中を彷徨しつづけていた。…＜中略＞…彼は木の根のようなものに、躓いて、転んだ。彼は但し、横になったまま身体のとろけるような、何とも言われぬ、よい気持ちで眠りに陥ち込んだ。一夜に一尺も二尺も降り積もる雪が森々として降って来た。（249）

その年も凶作と飢餓は、荒野を覆う氷雪のように、北海道の農村全部を襲うたのであった。大崎が見捨てて夜逃げした虹別原野も、彼の夢を賭けた新しい舌辛原野^{【マツ】}も、その例外とはならなかった。死亡、離村、逃亡は相次いで起こり、救援を喉^{【マツ】}ぎ【喘ぎ】求める開墾地や農村の危急に対して、当局も政治家も無力を暴露した。（250）

そして、大崎と思しき行倒れの遺体が、翌年の5月に釧路原野に調査に来た博物学者によって発見される。

7. 結びに：敗者となった開墾移民の物語に潜む社会問題

以上、有島武郎の弟子である早川三代治が資産・所得分布の論文と併行して執筆した、長編小説〈土と人〉の中で、第二次世界大戦中に最初に刊行した第二部『処女地』で描かれた、北海道虹別開墾村の許可移民・大崎常造の没落の過程について検討してきた。

大崎が「敗者」となったのは、自然災害の凶作と不況という社会的な状況に加え、さらに大崎が小学校しか出ておらず、地図も文字も読めないという社会階層出身者であるということも原因の一つであり、この男の転落の人生には、様々な社会問題が潜んでいることが描かれている。

最初に入植した虹別開墾村では、問題の中心には、耕作農業には向かぬ不毛の火山灰地と気象条件の下での凶作による農業被害とその補償の欠如がある。

そこから派生的に、一生働いても返し切れない借金の返済難という問題が発生する。開墾村では、生活用品、食料、翌年の耕作のための種苗などは村の商店から掛売りで買えるが、凶作で借金が返済できなくなっても金を借りられる公的制度はなく、高利貸しから土地を担保に金を借りるしかない。つまり、借金の返済不能者は、自分のものになる筈だった開墾した土地を、開墾が終わらぬうちに取られ、郷里にいたときと同様の小作に転じるか、夜逃げ昼逃げするしかない。現代版「逃散」である。皮肉にも、借金の抵当に土地を手に入れた高利貸しの方も、その処置に困るという事態も発生している。

開拓村では医者とは別の世界のものであった。公衆衛生環境も福祉施設も整っていない。村には、在住の医師や保健婦もいないため、十分な医療が受けられず、また日頃の保健衛生指導も行われていない状況にある。秋祭りで村中に配られた折詰弁当でチブスが蔓延し、死者が多数出た。

大崎の開墾地からの脱走は、子供たちにも影響を及ぼす。大崎が移り住んだ、「盗み作り」の孤独な開墾地には、当然のことながら学校はなく、また親も文盲であるため、子供達は学校教育を受けられない。最初に入植した地でかろうじて収穫した貧弱な種を使っての泥炭地での耕作は、実を結ばず、日々の食も満足にない。その結果、子供たちには、飢餓による栄養不足で痩せ細り知能の発達への著しい影響が生じる。大人の権利だけでなく子どもの権利もまるで守られていない。幸福を追求する手段もない。

そして、この、大崎が自分を待っていてくれた「おらが土地だ」と信じている鶴の棲む泥炭地では、様々な不幸な出来事が連続して起こる。それらの出来事は起こるべくして起きたとも言える悲劇である。すべては極度の困窮という根から生じた、防ぎ得た悲劇だとも考えられる。末娘の溺死は、大崎に春の大出水という知識がなかったために起きた事故である。妻の鬱病や認知症の母は、心の病であるが、手当を受ける場もなく、働き手の欠如と介護の問題で大崎は妻を絞め殺すことを考えるところまで追いつめられる。

不況の影響も大きい。子供を餓死させることを恐れて開墾地を捨てて向かった釧路の町では、世界恐慌の影響で失業者の群れが溢れていて、職業安定所はあるが、仕事は得られない。貧困の親子を救う福祉制度も、「サムライ部落」で暮す人々に対する救済もない。大崎はバタヤ民たちが住むサムライ部落でバタヤになるが、片足では満足に働けず、二度目の自殺、選択肢のない自殺に追い込まれる。一度目の自殺は子供を餓死から救うために孤児院に入れる方策として、親である自分を消すという自己犠牲的な鉄道投身自殺であった。二度目の自殺は、釧路市役所が「行路

病人の施療患者」として治療し、「一層悲惨な運命を無理押しに押しつけてよこした」【つまり生きながらえさせられた】が、その後の救援がなかった結果でもある。

「これは一体、誰の罪だと、叫びたかった」が叫^{こゑ}べず死んでいった低所得階層の人々の代表者としての大崎を見て、早川は「息詰まる程の苦悩と憫^{あはれ}憐と憤激すら感じる。自然のふところの中に真裸になって抱かれながらも、餓えかつえている農民を目のあたりに見なければならぬからだ。」(60)と書いている。ここには、地主である早川の小作人や弱者への温かい気持ちと、救えない苦しみの葛藤が見える。

この物語は1929年のウォール街大暴落に始まった世界恐慌期の話であるが、それから約80年後の2008年のリーマンショックで、東京の日比谷公園などに失業者やホームレスの人々がテントを張っていた時との類似性が想起させられる。これは、「自殺による死亡者数が高い水準で推移している」ため、2006年に自殺対策基本法(平成十八年法律第八十五号)が制定された後のことであるが、2009年の正月には「年越し派遣村」が臨時に設立され、約500人もの人が集まったと報道され、現代日本の貧困の実態が多くの人々の知るところとなった。これは、氷山の一角にすぎず、その後も自殺、餓死が相次いで起こっており、大きな社会問題となっている。

片足を失った『処女地』の主人公大崎は、身体障害者手帳も給付されず、生活保護もなく、「年越し派遣村」もなく、乞食をしても生きていけない不況の街を後にして冬の釧路原野で野垂れ死にした。大崎の所有地と書かれた枕標の立つ「おらの土地」の家族の眠る墓、を目指したが果たせず途中で倒れたのだらうと、作品の中には書かれてはいない、話の先が推測される。

経済不況下に噴出したこれらの社会問題は、どちらの場合も、一言でいうと、「生存権」「生活権」の問題である。生存権は、現行の日本国憲法第二十五条に「すべての国民は、健康で文化的な最低限の生活を営む権利を有する」とある。この生存権が成り立ち得るためには、職を得る権利や、教育を受ける権利も保障される必要がある。

ところが戦前の大日本帝国憲法には、日本国憲法第十三条や第二十五条のような個人の権利を扱う条項はなかった。早川が『処女地』の中で文学という形で「主人公になりきって【声なき民になり代って】」書いた、開墾民や釧路の町の低所得階層の人々の生活実態は、結局のところ、「生存権」や「幸福追求権」が犯されているということであった。

この「生存権」という考えを、第二次世界大戦後に日本国憲法に第二十五条として盛り込むことに功績があったのは、森戸辰男(1888-1984)であった。奇しくもその、森戸の書いた「クロボトキンの社会思想史の研究」が朝憲紊乱の罪に問われて起きた筆禍事件こそ、早川が、有島の影響で最初の卒業論文の題とした「クロボトキンの農業理論の批判的研究」を、小樽高商教授の大西猪之助の助言で「収穫逓減法則の研究」に変える契機になった原因であった。早川が、小説という形で一早く「生存権」に関わる問題を取り上げることができたのは、経済学者として所得分布の研究、すなわち「不平等」について問題意識を持っていたからではなかろうか。有島武郎が早川の柔らかな十代の心に蒔いた種は、暗い時代にも静かに芽を出し、戦後にも生き延びたと推測される。

謝 辞

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金による研究(研究代表者金城ふみ子)、課題名「明治以降の社会文化と政治機構変動の日本語への影響：分野による表現差の計量解析」(基盤研究C, 課題番号：246170150)の研究成果の一部として執筆されたものである。本稿の執筆は小樽商科大学附属図書館での早川文庫の資料調査によるところが大きく、調査に際しては学術情報課の職員

の皆様の温かいご協力を得られたことに感謝する。また、現在早川文庫への追贈を行っている早川佳郎氏から資料についてのご教示や、貴重な資料の閲覧の便宜を図っていただいた。また、成稿に至る過程で、第58回有島武郎研究会で会員として行った、有島武郎の弟子早川三代治に関する報告(金城, 2015b)は、研究会では初めて取り上げられる内容であり、座長の片山礼子氏を始め、会長の中村三春北海道大学教授や山口直孝二松学舎大学教授など皆さまからご質問やご意見をいただいた。また、統計数理研究所共同研究「日本における所得・資産分布の計測史と再集計分析」(代表研究者仙田徹志京都大学准教授、課題番号27-共研-2037)の研究集会でメンバーの一人として2回の報告(金城, 2015a, 2015c)を行った際には、研究代表の仙田氏を始めほかの参会者からいただいた種々のコメントや、松田芳郎本学及び一橋大学名誉教授のご報告(松田, 2015a, 2015b)から早川の経済学者としての業績の重要性に関する知見などが得られたが、本稿ではそのすべてを生かしきることはできなかった。今後の論文に生かしたい。ここに記して謝辞に替える。

注

- 1) 最初の結婚相手は、ボン大学に留学中(1921-1924)に知り合い、「欧州で婚約した」女性であったが、1925年、「女性の入国と彼女との結婚をめぐり両親の許しが得られず苦悩する。」(「早川三代治年譜」407ページ、以下、年譜、p. 407などと略記)。1928年春に両親の「反対を押して婚約者と結婚、札幌に新居を構えたが、新妻は環境になじめず、秋帰国させるにいたる」(同上)。その後、商用で出向いていた東京で知り合った山木たけは、婚約中に「高松宮同妃両殿下が1930年4月21日から1931年6月11日までの417日間に渡って全行程7万3900キロのグランド・ハネムーン」に侍女として随行している(平野, 2004)。同書には、その旅行中に婚約者の早川三代治との間に交わされた絵葉書も掲載されている。
- 2) 現在は電子化された書籍一覧が小樽商科大学図書館の「早川文庫」としてネット上で閲覧できる(<http://www.otaru-uc.ac.jp/htosyo1/siryo/bunko/hayakawa.html>)。
- 3) 欧文脈とは、「中田祝夫氏が、漢文訓読によってもたらされた語法・措辞を「漢文直訳語脈」と言われたように、欧文を訓読することによってもたらされた蘭語・英語その他の外国語学習のための訓読の語法・措辞を「欧文の直訳語脈」、略したもの」である(森岡, 1999)。
- 4) 戦前は明治大学教授で、東亜研究所に所属し、『宇宙論』などを出している。戦中には第一書房からの出版が多い。同社の文化雑誌『セルパン』にも関わり、大日本文学報告会理事を務め、公職追放になっている。早川も、1941年に『建設的北海道文学』を『新文化』(『セルパン』の改題誌)に書いている。早川は、1932年1月に第一書房から出版された、大島 豊著『宇宙論』函書きに推薦文「『宇宙論』読後感」を、同文を2月に『文芸北海道』第1巻第1号創刊号に書いている。大島は、戦後は「レーニン哲学批判」などを書いている哲学者。主要著書の一部はCiNiiの図書検索にある(<http://ci.nii.ac.jp/author/DA01738554>)。
- 5) 特に親しい友人ではなかったようであるが、早川は、1940年7月に行われた北海道文話会の伊藤 整歓迎会や、9月の同会講演会に参加している(年譜、p. 471)。「敗戦前後」の中には、1944年7月14日の小樽空襲のあった後日、伊藤 整が、疎開するのだと立ちより、共通の中学校時代の友人である岡田三郎からの伝言を伝える場面が書かれていることから、親しく言葉を交わす同年代の同郷人だったと言える。
- 6) 小樽中学校卒業。岡田三郎は、「大正6年に新聞懸賞小説に応募した『涯(はて)なき路(みち)』が一等当選し、文壇にデビューしました」が、後に自然主義の「徳田秋声の感化を受けて自分の生活に密着した」私小説を書いた小説家である(「第13話 岡田三郎 小説家の運命」(小樽市「広報おたる」平成19年7月号掲載)。岡田の「自分の運命と受け入れた作品『秋・冬』などが、伊藤 整らに深い感銘を与えた」(同上)。「敗戦前後」(未定稿)には、小樽の自宅を訪ねてきた伊藤 整に「日本文学報国会を今頃立ち上げるのは時期既に遅しだ」と岡田への伝言を託したことが書かれている(注5参照)。
- 7) 卒業論文の当初の題は、山木(年譜、p. 455)では、「クロボトキンの農業論批判」となっている。どちらが正しいのかは不明であるが、いずれにしても、「クロボトキン」絡みの研究であることには違いない。

ない。

- 8) 高田保馬先生顕彰会 (<http://takadayasuma.jp>).
- 9) 「貸地」がまだ少し残っていた (四男の早川佳郎氏によるご教示).
- 10) 早川三代治の四男佳郎氏によると、株取引も行っていた (注9と同様、2015年8月7日大手町OAZOのtanto mariでの面談の折にご教示いただいた). 紙不足の戦時中に書かれた原稿用紙は、大きさや紙質など様々で、中には、株取引に使われたと思われる数字が書かれた裏紙に升目を印刷したようなものも多数ある.
- 11) 早川 (1944)『第四部 生ける地』元元書房、の最後の方に、村の学校の若い男の先生が召集を前に、虹別村の歴史を書き残している. この後に、戦後書かれた第五部があるが、当初は四部作として書かれた、長編小説<土と人>は村の歴史のまとめで終わっていると推測される (金城、2014参照).
- 12) 長編小説<土と人>は、戦前に第四部まで書かれ出版している. 戦後に遺稿として第五部『地飢ゆ』が『北方文芸』第1巻第2号 (1968年2月号) から第2巻第4号 (1969年4月号) まで15回に分けて連載されたが (小笠原、1968参照)、生前には刊行はされなかった. 遺族の手によって中央公論事業出版より刊行されたのは2012年である. 書評には、松田 (2012) などがある.
- 13) 清書原稿の主題は、「冷たい土地」となっているが、原稿を包んだ外側の茶色の包装紙には早川直筆で、「冷たい土 二四四枚 (四〇〇字)」と書かれている. 同作品の稿了は昭和22年10月25日であるが、清書が完成したのは同11月19日である.
- 14) 1940年以降の情報局による出版統制が行われ、紙不足は深刻化し、用紙の割り当てがなければ出版は自由にはできなかった (協同出版社編、1942参照). この戦時中の紙不足の状況は、早川の前稿が形や大きさの様々な紙や、裏紙を利用して書かれていることや、それらを整理するために使われた封筒類も再利用のものや、有り合わせの紙を繋いで作っていることからよく判る. 原稿の書かれた裏を返すと、そこには、別の原稿の下書き、多数印刷していたと思われる資料収集のための定型の簡単な挨拶状が書かれていたりする. 印刷会社の名前の入った原稿用紙に加え、中には株価と思しき数字がぎっしりと書かれているものや、ページ数を計算したような数字が書かれているものなどがある.
- 15) 戦前は刊行には至らなかった第五部は、亡くなる少し前まで修正していたそうで、その最終稿には昭和37年8月21日完了と記載されている (山木、2012、p. 448).
- 16) 泥炭は、「90%以上が水分で、踏むとふかふかしていて、水がジュワっとしみ出てくる感じ」で、「ウィスキーを作るためのモルトを薫製するための燃料として有名で」、「酸性度が強く殺菌作用がある」ため、「第二次世界大戦の時はガーゼの変わりに使われた」、「乾燥させれば燃料にもなり、北海道でも戦前までは使われていた」、「現在では、乾燥させて土地改良材としても利用」されているなどと、この美唄市の説明は、泥炭地の利用価値に焦点を当てている. しかし、「美しい鶴の棲む泥炭地は百姓の耕作には向かない」(2.5.1参照).
- 17) 「五、六年」は、他の部分の記述から見て「三、四年」の間違いだと考えられる.
- 18) 葬式に「原野の婆さん達によって作られている御詠歌連の連中が集まって来て、急に賑やかになった」(88). これも一種の娯楽か. その他女性たちの楽しみについての記述はない.
- 19) ただし、「入地第一年目の春には、かれこれ一町歩余りの土地が拓かれて、とも角も大崎一家の生活の根が下ろされた」(177-178) という記述もある. 畑は半分だったのだろうか.
- 20) 「15両」は「15円」のことであることが、すぐ次の「五円札三枚」や、「北星には可哀そうだけど、十五円で買って貰います」(208) から判る. 他にも「両」が「円」の代りに使われている処があり、当時、まだ貨幣単位として「両」が日常語として使われていることがあったと推測される.
- 21) これは、一文無しの大崎が事故前に強盗で取り調べを受けた際に、警察で恵まれた金5円50銭 (239) を返したものであるから誤植である. 病院から出たばかりのところで、「懐中には五円五十銭あるので、十日位食べて、寝ることは出来る」(243) とある.

参考文献

- 有島武郎 (1923)「農場開放顛末」(談)『帝国大学新聞』大正12年4月. 引用は、(1981)『有島武郎全集 第九巻』筑摩書房収録版、pp. 370-373による.

- 有島武郎 (1911) 「或る女のグリンプス」『白樺』第2巻第1号 (明治44年1月号) から16回 (1913年3月まで) の連載. 引用は、『有島武郎全集 第二巻』(1980) 筑摩書房収録版, pp. 63-218による.
- 有島武郎 (1908) 「An Incident」. 引用は、『有島武郎全集 第二巻』(1980) 筑摩書房収録版, pp. 278-285による.
- 有島安子 (1916) 有島武郎編『歌集 まつ虫』(非売品, 限定私家本, 発行400冊).
- 大島 豊 (1932) 『宇宙論』第一書房.
- 大西猪之介 (1920) 『囚われの経済学』寶文館.
- 小笠原 克 (1968) 「『地飢ゆ』の連載にあたって」(解説) 小笠原 克^{まさる}編集『北方文芸』1968年2月号, 札幌, なにわ書房, pp. 140-141.
- 小樽商科大学百年史編纂室 (2011a) 「第五高等商業学校関係書類」『小樽商科大学百年史』小樽商科大学, p. 5.
- 小樽商科大学百年史編纂室 (2011b) 「高等商業学校敷地として寄付申出者調」『小樽商科大学百年史』小樽商科大学, p. 5.
- 小樽商工会議所 (1995a) 「第9章 啄木と多喜二〜その3」小樽商工会議所「小樽商人の軌跡」『小樽商工会議所百年史』. 引用は, www.otarucci.jp/kiseki/kiseki-09c.htmlによる.
- 小樽商工会議所 (1995b) 「北海道移住者の内容」第10章 米の沼田喜三郎と小豆の高橋直治〜その3「小樽商人の軌跡」『小樽商工会議所百年史』. 引用は<http://www.otarucci.jp/kiseki/kiseki-10c.html>による.
- 片山晴夫・片山礼子 (2004) 「有島武郎『或る女』と『松蟲』に関する小稿: 有島安子の短歌の考察を中心に」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』55 (1), pp. I-VI.
- 片山礼子 (2013) 『有島武郎小論 付 有島武郎編・安子夫人遺稿集「松むし」(全)』蒼丘書林.
- 上久保 敏 (2003) 「異質の経済学者早川三代治〜兼ねる経済学者」『日本の経済学を築いた50人: ノン・マルクス経済学の足跡』日本評論社, pp. 86-90.
- 神谷忠孝 (1980) 「解説」『北海道文学全集第9巻』立風書房, p. 418.
- 木戸清平 (1960) 『知られざる文学—近代文学ノート—』川又書店.
- 協同出版社編 (1932) 『書籍年鑑: 昭和17年版』協同出版社. 引用は, 国立国会図書館永年番号ndljpp/id/1122884のスキャンファイルによる.
- 金城ふみ子 (2015a) 「早川三代治の『土』・『土地』への関心と悩み」仙田徹志代表統計数理共同研究第2回研究会 (2015年12月10日にて開催) 口頭発表配布資料, 統計数理研究所.
- 金城ふみ子 (2015b) 「経済学者, 文学者, 地主という三つの顔を持つ早川三代治の『土』・『土地』への関心〜師の有島武郎の影響および文学作品を中心に」第58回有島武郎研究会 (2015年11月21日開催) 口頭発表配布資料, 二松学舎大学.
- 金城ふみ子 (2015c) 「経済学者, 文学者, 地主という三つの顔を持つ早川三代治の『土』・『土地』への関心」仙田徹志代表統計数理共同研究第1回研究会 (2015年8月4日開催) 口頭発表配布資料, 東京立川, 統計数理研究所.
- 金城ふみ子 (2014) 「経済学者早川三代治の長編小説<土と人>の執筆意図, 構成, 出版の経緯——作品分析の背景考察の試み——」『東京国際大学論叢経済学部篇』. 東京国際大学, pp. 43-68.
- 金城ふみ子 (2012) 「有島武郎の作品における身体表現の用法——初期の短編作品 An Incident——」『日本語日本文学 第三十八輯』輔仁大学日本語文学系, pp. 117-139.
- クロボトキン, P. (Peter Kropotkin) 著, 大杉 栄訳 (1920) 『一革命家の思い出』春陽堂. (Kropotkin, P. (1901). *Autour d'une Vie* [ある生涯をめぐる], Paris: ストック社 (フランス語版). Kropotkin, P. (1899). *Memoirs of a Revolutionist*. New York: Houghton Mifflin.)
- クロボトキン, P. (Peter Kropotkin) 著, 高杉一郎訳 (1979) 『ある革命家の手記』上/下, 岩波文庫, 白218-2/, 岩波書店. (Kropotkin, P. (1899). *Memoirs of a Revolutionist*. New York: Houghton Mifflin.)
- Kropotkin, P. (1899). *Memoirs of a revolutionist*. Boston; New York: Houghton Mifflin Cambridge: Riverside Press. 【小樽商科大学所蔵早川文庫洋書0030491312 LH E.K110930311049131.】
- 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 (2015) 「東北農業研究センター水稲冷害早期警戒システム」. 引用は<http://www.reigai.affrc.go.jp/zusetu/reigai/kako/kyorei.pdf>による.
- 汐見三郎, 毛里英於菟, 武田長太郎, 益田熊雄 (1933) 『国民所得の分配』(財政金融研究会紀要) 有斐閣. 本文244p. 統計付録54p.

- 汐見三郎 (1932) 「国民所得の分配の型を論ず」『経済論叢』第34巻6号, 京都帝国大学経済学会, pp. 879-891.
- 標茶町 (2015a) 同町ホームページ <http://www.town.shibecha.hokkaido.jp>.
- 標茶町 (2015b) 「移住相談窓口」 http://www.town.shibecha.hokkaido.jp/gyousei/ijuu_kouryuu/soudanmadoguchi.html.
- 標茶町 (2015c) 「標茶移住へのご案内」 http://www.town.shibecha.hokkaido.jp/gyousei/ijuu_kouryuu/files/iturn011_migrant_guide.pdf.
- 寺崎康博 (1986) 「戦前期の所得分布の変動：展望」『長崎大学教養部紀要 人文科学篇』26 (2), 長崎大学, pp. 25-42.
- 手塚壽郎 (1920) 『ゴッセン研究』同文館.
- トルストイ (Lev Nikolayevich Tolstoy) 著, 米川正夫訳 (1929) 「地主の朝」『トルストイ全集 第1巻』岩波書店, pp. 649-741. 引用は, 出版年1930年版の小樽商科大学附属図書館早川文庫登録番号LH L.T110650211085301による.
- 日本郵船 (1928) 『日本郵船営業案内』(原文英語) 日本郵船株式会社.
- 早川 昇 (1970) 『アイヌの民俗』民俗民芸双書54, 岩崎美術社.
- 早川治男・佳郎 (2012a) 「主要著作」『地飢ゆ 土と人 第五部』中央公論新社, pp. 459-463.
- 早川治男・佳郎 (2012b) 「早川三代治 年譜」『地飢ゆ 土と人 第五部』中央公論新社, pp. 464-477.
- 美唄市 (2015) 「泥炭地って」『宮島沼の不思議』美唄市ホームページ http://www.city.bibai.hokkaido.jp/miyajimanuma/07_fusigi/7_1_04.htm.
- 平野久美子 (2004) 『高松宮同妃両殿下のグランドハネムーン』中央公論新社.
- 松田芳郎 (2015a) 「[第2次世界大戦前の] 税務統計の利用可能性について」仙田徹志代表統計数理共同研究第2回研究会 (2015年12月10日開催) 口頭発表配布資料, 統計数理研究所.
- 松田芳郎 (2015b) 「第2次世界大戦前後の所得・資産分布の研究動向のサーベイ」仙田徹志代表統計数理共同研究第1回研究会 (2015年8月4日開催) 口頭発表配布資料, 統計数理研究所.
- Matsuda, Yoshiro (2014). A Short Sketch of the History of the Development of Statistical Surveys and Income Distribution. Kamiya Denzo, Yoshiro Matsuda and Mikio Suga (eds.) *Income Distribution in Asian Regions*. pp. 54-61. Tokyo, Japan Statistical Association. 400p.
- 松田芳郎 (2012) 「書評：早川三代治『地飢ゆ』」『緑丘112号』小樽商科大学同窓会, pp. 29-31.
- 松田芳郎 (1976) 「早川三代治教授と早川文庫」小樽商科大学附属図書館『早川文庫目録』小樽商科大学, pp. xii-xiv.
- 森戸辰男 (1919) 「クロボトキンの社会思想の研究」『経済学研究』創刊号, 東京大学経済学部. 【発禁になった書物であるため, ページ番号未確認.】
- 森岡健二 (1999) 『欧文訓読の研究—欧文脈の形成』明治書院.
- 山木丈生 (2012) 「刊行に寄せて」早川三代治 (2012) 『地飢ゆ』中央公論新社, pp. 448-458.

【早川三代治の著作のうち本稿で言及および引用した著作のみの目録】

- (以下の情報は, 早川佳郎編 (2015) 「早川三代治著作目録Ver. 4」(ページの記載なし) からの引用のため, 筆者所有の資料以外はページ番号の記載はない.)
- 早川三代治 (1914a) (連名執筆) 「第五学年旅行記」『小樽中学校校友会雑誌』10号, 小樽, 小樽中学校校友会.
- 早川三代治 (1914b) 「愁の人と自由の鳥」(詞藻欄 五甲早川三代治) 『小樽中学校校友会雑誌』10号, 小樽中学校校友会.
- 早川三代治 (1914c) 「THE CHRYSANTHEMUM」(詞藻欄) 『小樽中学校校友会雑誌』10号, 小樽中学校校友会.
- 早川三代治 (ペンネーム朝千吉) (1914) 「盲目の王子」『北大文芸会会報』73号.
- 早川三代治 (ペンネーム朝千吉) (1915) 「サタンの目ざめ」『北大文芸会会報』74号.
- 早川三代治 (1927) 「吹雪の底」(戯曲) (島崎藤村に送った草稿. 1932年「新しき縄」と改題).

- 早川三代治 (1929) 「聖女の肉体」(戯曲)『三田文学』第4巻第1号, 昭和4年1月号.
- 早川三代治 (1932a) 「新しき縄」(戯曲)(旧題 (1927) 「吹雪の底」)『劇と評論』復活第2号. [1933年末に新劇座で上演.]
- 早川三代治 (1932b) 戯曲「入地」. 初出『劇と評論』昭和七年所十一月号所載. 『トレ グラチエ 戯曲集』所収, pp. 1-34.
- 早川三代治 (1932c) 「出家」『北大文藝』第14冊有島武郎追悼号.
- 早川三代治 (1932d) 「我邦耕地の分配状態に就て」『高岡熊雄教授在職35年記念論文集 農政と経済』北大法経会.
- 早川三代治 (1932e) 「『宇宙論』読後感」[大島 豊著『宇宙論』函書き推薦文と同文]『文芸北海道』第1巻第1号創刊号, 第一書房.
- 早川三代治 (1933) 「海から」『ラインのほとり』(随筆集) 明窓社.
- Hayakawa, Miyoji (1933, Septembre). Sulla Distribuzione dei Terreni Agrari nel Giappone dal 1908 al 1930. *Giornale Degli Economisti*. Anno XLV III, No. 9, Italia, Città di Castello.
- 早川三代治 (1934a) 「鶴の棲息地」(第一回)『北大文芸』27号, 北大文芸編集部.
- 早川三代治 (1934b) 「鶴の棲息地」(第二回)『北大文芸』28号, 北大文芸編集部.
- 早川三代治 (1934c) 「鶴の棲息地」(第三回)『北大文芸』29号, 北大文芸編集部.
- 早川三代治 (1934d) 「旭川市に於ける所得分布」『法経会論叢』第3輯, 北大法経会.
- 早川三代治 (1935a) 「鶴の棲息地」(第四回)『北大文芸』30号, 北大文芸編集部.
- 早川三代治 (1935b) 「有島先生のこと」(未定稿).
- 早川三代治 (1935c) 「農村に於ける所得分布」『日本社会学会年報 第3輯』(昭和10.5.5 同学会第10回研究会報告) 日本社会学会.
- 早川三代治 (1935d) 「所得の社会的ピラミッドに就いて」『日本統計学会第四年年報』日本統計学会.
- 早川三代治 (1935e) 「鶴の棲息地の連載中止に際して」『北大文芸』31号, 北大文芸編集部.
- 早川三代治 (1938a) 「所得分布の形態に就て」『日本統計学会第四年年報』日本統計学会.
- 早川三代治 (1938b) 「ボム神恵の地主」(未刊行). (1942年刊行の『処女地』の前半部分.)
- 早川三代治 (1941a) 「野火」『北大文芸』42号, 北大文芸編集部.
- 早川三代治 (1941b) 「建設の北海道文学」『新文化』(『セルバン』の改題誌).
- 早川三代治 (1942) 『処女地』元元書房. 引用は, 「処女地」『北海道文学全集第9巻』(1960) 立風書房, pp. 3-255による.
- 早川三代治 (1944a) 『第三部 土から生まれるもの』(土と人), 元元書房. 393p.
- 早川三代治 (1944b) 『第四部 生ける地』(土と人), 寶文館.
- 早川三代治 (1944c) 「所得分布に関する諸考察」日本統計学会編『国民所得とその分布』日本評論社.
- 早川三代治 (1945) 『第一部 根』(土と人) 寶文館. 392p (発行部数1,500部).
- 早川三代治 (1946) 「養ひの土地一小樽」(随筆)『週刊朝日』(北海道版) 第49巻第16号.
- 早川三代治 (1947a) 『若い地主』青年論壇社, 238p.
- 早川三代治 (1947b) 「ある時期の謙介」(未定稿).
- 早川三代治 (1947c) 「第五部 地飢ゆ」(土と人)(成稿725p.) 初稿は, (1968)『北方文芸』なにわ書房に1968-2から1969-4まで15回に分けて連載. 修正稿の刊行は, 早川治男・早川佳郎(共編)(2012)『地飢ゆ 土と人 第五部』中央公論新社, 477p. (本書には標題作品の他に下記の文献が収録されている.) 小笠原 克^{まさる}「『地飢ゆ』の連載にあたって」(『北方文芸』1968年2月号, 札幌, なにわ書房, pp. 140-141の再掲.) 木戸清平「『地飢ゆ』の原稿」(『北方文芸』1970年4月号の再掲). 山本文生「刊行に寄せて」pp. 448-458. [早川治男・早川佳郎]「主要著作」pp. 459-463. 早川治男・早川佳郎「早川三代治 年譜」pp. 464-477.
- 早川三代治 (1947d) 「農地解放」(成稿333p. 未刊行).
- 早川三代治 (1947e) 「冷たい土地」(成稿244p. 未刊行).
- 早川三代治 (1947f) 「敗戦前後」(未定稿).

早川三代治 (1947g) 「有島武郎と島崎藤村」 [同年10月27日に北大予科で行われた講演の記録]. 『北海日日新聞』1月1日, 第120号.

早川三代治 (1948) 「作家と生活—島崎藤村と有島武郎—」 『文芸復興』第3巻第2・3号.

早川三代治 (1953) 「有島先生と小樽の『草の葉』の会」 『北海タイムス』 「小樽文学散歩」10月17日号.

早川三代治 (1959) 「パレート法則による所得と財産分布に関する研究」 (早稲田大学博士学位論文).

早川三代治 (1962) 「有島先生」 『有島武郎集 月報25』 講談社.

Have Japanese English Textbooks Really Improved?: Reexamination of Gender Representation in Current Textbooks

NAKAI, Motohiro

Abstract

The purpose of this paper is to investigate how the registered high school English textbooks in Japan have improved in terms of gender representation in both literal and visual components by partially duplicating Nakai (2000; 2001; 2002) which explore these two components of the two older versions of the textbooks used in the late 1990s to the early 2000s. The results still show mixed realities including some improvements and a number of chronic problems such as female invisibility or omission, male chauvinism, and gender stereotypes in social status and occupations, which are basically the same weaknesses revealed by the precedent studies about fifteen years ago.

Keywords: EFL, textbook, gender

Contents

- I. Introduction
- II. Method
- III. Results
- IV. Conclusion

I. Introduction

I.1 Purpose

The purpose of the present study is to investigate the sex and gender representation of the publicly registered senior high school English textbooks currently used in Japan, focusing on the chronological change or shift in the gender representation of the textbooks over these fifteen years. Methodologically, the precedent studies on the same issues (Nakai, 2000; Nakai, 2001; Nakai, 2002) are partially duplicated and the results are compared with those of the former ones.

The goal of this paper is threefold. First, the contents of the textbooks, both topics and central characters of the lessons, are examined in terms of sex and gender because what and how the current textbooks deal with in their units or lessons supposedly affect the students and teachers who

use them. Secondly, the visual images, both photographs and illustrations, included in the textbooks are investigated in that they help the learners to comprehend the contents of the lessons, and also their relationships with the literal texts they are attached to are examined because those visuals sometimes provide more information and so affect the readers more than their literal counterparts. Finally, the results of the present study are compared with those of the former research stated above and discussed on whether any difference exists between the two and, if so, how different or how better, or worse, in terms of gender representation.

I.2 Rationale

Almost two decades ago, I examined several high school English textbooks made in Japan including the ones I wrote as one of the authors. I was just curious how those textbooks would turn out to be in the perspective of sex and gender studies which were just budding out as a distinctive discipline in the field of education. The results were quite disappointing for me because the examined textbooks were very male-centered or sexist and often chauvinistic although we the authors had seriously tried to produce the best textbooks as we could. Since then I have continuously examined how the registered textbooks in Japan deal with sex and gender issues and problems (Nakai, 1999; Nakai, 2000; Nakai, 2001; Nakai, 2002; Nakai, 2005). And now, after twenty years, it seems very feasible to investigate how the registered Japanese textbooks today have improved because such gender issues came to be better recognized all over the country.

In order to do this, I choose textbooks, as a research subject, because of two major advantages. One is that they are one of the most tangible, the most accessible, and the most concrete elements to single out of the various school components including teachers, students, physical settings, and administration: They are visible, handy, and available for everyone. The other one is that textbooks tend to be far more authoritative and so more influential over the users than the other elements of classroom learning/teaching. Especially in Japan, it holds true because the main textbooks are produced based on the national course of study named *Gakushushidojouryo* (GSY, hereafter) and authorized by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology (MEXT, hereafter). From my own experience as an EFL (English as a Foreign Language) teacher of secondary education in Japan, I have learned that textbooks are so revered that both learners and instructors tend to depend on them as a reliable information source as well as solid teaching tools and learning materials.

The examination of the textbooks, hopefully, will lead us to better understanding of the realities, at least partly, of the English education in Japan in terms of sex and gender representation.

I.3 Review of literature

I.3.i Course of study

As stated above, the English education in Japan, both at its primary and secondary levels, is basically administered by MEXT, which issues GSY as the main guidelines to public education and usually renewed it every decade since the first version appeared soon after World War II. The current version for senior high schools was notified in 2009 and enacted in 2011.

As for foreign language education in Japan, reflecting the international trends and the

domestic demands in favor of globalization, MEXT officially chose the subject of English as a requirement in 1998, and they started to place the major focus on promoting more practical linguistic communication skills. In the current version of GSY, such emphasis is quite explicit; for example, some of the new courses have titles such as English Communication I, II, and III and English Expression I and II.

I.3.ii Gender in education in Japan

Along with the worldwide rise of feminism and anti-sexist movements in the 1970s through the 1980s, the national government of Japan has carried out quite substantial legal reforms in the pursuit of gender equality or fairness as seen in the Equal Employment Opportunity Act (1985) and the Basic Act for Gender Equal Society (1999). This socio-political wave has reached the field of public education. The national course of study has reflected such global trends especially in the school subjects closely connected with people and society such as Home Economics, Civics, Geography and History, and Health and Physical Education. Home Economics, for example, used to be taught only to girls at secondary schools, but it came to be learned by both sexes in 1993.

In academia, Ito *et al.* (1991) conducted a comprehensive survey on the gender representation of the elementary school textbooks of *kokugo* or Japanese Language, Social Studies, Home Economics, and Moral Education, and reported a multitude of problems such as female invisibility, gender stereotypes, fixed gender roles, and male chauvinism.

In addition, a number of contemporary scholars and practitioners point out male-female inequality and sexist practices that still prevail at school as well as in society. Hoonoki (1999), for example, argues that school education actually reproduces gender problems as a model of the fixed gender roles in society and claims that the subject of Home Economics will be the key to solve such gender problems by reexamining the contents and methods of the course. The Japanese Association of University Women or JAUW (2014) also investigated the textbooks of Home Economics and their past and present users including both students and teachers and maintains the need of better understanding of the importance of gender equity education on both school administrators and class teachers.

I.3.iii Gender in ESL/EFL textbooks

With regard to the sex and gender representation in ESL (English as a Second Language) materials, Hartman and Judd (1978), Porreca (1984), and Lesikin (1995) point out that their contemporary textbooks portray women in a problematically unbalanced and stereotyped way, and suggest that ESL teachers make efforts to reduce the pervasive gender biases or sexism in the field.

Sunderland (1992) takes a comprehensive overview of the gender issues in language education and categorizes them into three types: The English language, Materials, and Processes. The first one includes linguistic sexism such as the generic use of masculine nouns and pronouns and semantic derogation in male-female equivalency; the second one refers to pedagogic grammar, course books, and dictionaries which contain a variety of gender-related problems and their handling by the course teachers who use them; the final one “refers to what happens in the classroom because of people’s gender” (p. 87).

In the field of EFL education, Narisawa (1992), Sasaki (1994), and Nakai (1999; 2000; 2001; 2002; 2005) mention that the junior and senior high school EFL textbooks in Japan present

problematically stereotyped and prejudiced images of males and females, which may have a long and profound effect on the future of the users. Farooq (1999) also takes an extensive overview of the gender issues in EFL education, specifically, in Japan and claims the importance of examination of the problems at the sentence and discourse level as well as at the word level of the language.

Recent studies on EFL instructional materials, however, report contradictory results. Togano (2009) claims that MEXT-approved high school writing textbooks still show gender imbalances such as female invisibility and gender stereotypes in occupations and activities. On the other hand, Pihlaja (2008) maintains that the Japanese high school textbook he evaluated “provides clear positive presentations of men and women” (p. 9).

I.3.iv Visuals: Photographs and illustrations

With regard to the role of illustrations in reading comprehension of linguistic texts, some claims that visuals attached to written materials facilitate language learning (Peeck, 1974; Levin & Lesgold, 1978) while others maintain that such pictures even hinder the readers’ understanding (Vernon, 1953; Samuels, 1970). Schallert (1980) argues that the effectiveness of visuals depends on how to combine illustrations and texts as well as on the type of information expected to be learned. Wright (1989), as an author of ESL resource books using pictures, claims that language learners comprehend visually as well as verbally so much that the pictures of places, objects, and people contribute to learning by means of providing “a sense of the context of the language” (p. 2), for example.

As for the negative effects of visual components of instructional materials, Hartman & Judd (1978) point out the drawings might be more harmful than photographs because gender stereotypes in society are reinforced by simplistic and symbolic strokes of drawings. Ito *et al.* (1991) also claim that visuals of the textbooks made in Japan are likely to even distort the reality of men and women in society by their misrepresentation.

I.3.v Teachers’ role and responsibility

As for other influential aspects at school, Grossman & Grossman (1994) argue that schools and teachers are responsible for “the creation and maintenance of gender differences in students’ school participation and achievement” (p. 73) and claim that many of the instructional materials bring societal gender biases into school. Gollnick, Sadker, & Sadker (1982) also claim that the teachers play an important role in selecting non-sexist textbooks, and propose that teachers cope with different types of gender biases in the textbooks by encouraging students to recognize and think critically of them. As for the attitudes of class teachers today, Yoshihara (2013) maintains that EFL students are ready to learn about gender issues while teachers are reluctant to teach them even though they know its importance.

II. Method

II.1 Materials

Six textbooks are examined. They are all bilingual, English and Japanese, textbooks published by Japan-based companies according to the current GSY, officially authorized by the MEXT, and started to be used nationwide in 2014 and 2015. For reference, in the precedent studies, the first

versions were used from 1994 to 1996 or 1997 and the second sets replaced the former ones and were used up to around 2000.

The choice of the textbooks is mainly based on their large market shares and accessibility. According to Watanabe (2012; 2013; 2014; 2015), the top five titles of the best-selling books list of *English Communication I* textbooks, for example, account for nearly 60% of the whole national market. Among them, I select three series which have been on the lists for all these three years and among the most widely-used textbooks in the field. As you can see in **Tables 1 to 3 of Appendix 1**, they account for 30.4 % of the entire market. In addition, I make it a rule to choose only one series from the same publisher in order to collect as many different types of data as possible and also to avoid overlaps or redundancy in the themes, topics, contents, and editorial principles, even though more than one series by the same company are on the list. Following are the examined textbooks.

- 1) *Crown English Communication I* (CR1)
- 2) *Crown English Communication II* (CR2)
- 3) *All Aboard! English Communication I* (AA1)
- 4) *All Aboard! English Communication II* (AA2)
- 5) *Vivid English Communication I* (VV1)
- 6) *Vivid English Communication II* (VV2)

These six textbooks are composed of three pairs. Two books with basically the same names, for example, *Crown English Communication I* (CR1) and *Crown English Communication II* (CR2), are designed to be used in succession, usually for two consecutive years; English Communication I, first and English Communication II, second.

Why the textbooks for *English Communication I* and *English Communication II* are chosen is because the two courses are supposed to be taught at most high schools in Japan. In the current curriculum, out of four courses named *English Communication*, Basic English Communication, English Communication I, English Communication II, and English Communication III, some schools teach the first three courses while others the last three. So, the middle two courses are more likely to be taught at almost every high school and to be the core of the seven English courses, including English Expression I, English Expression II, and English Conversation.

In general, the structures of the older textbooks published two decades ago were similar to one another. More than a dozen lessons or units composed a single textbook. Typically, each lesson contained four major constituents: 1) an introduction; 2) a reading text followed by a comprehension-check part (hereafter a reading text); 3) visuals; 4) post-reading activities and other components (hereafter post-reading activities).

Today, the compositions of the textbooks are more varied and different to one another. However, all the examined textbooks still employ reading passages as the main body of the lessons because reading English has been one of the most essential linguistic skills for students to learn as well as for teachers to teach.

II.2 Data collection and analysis procedures

II.2.i Reading texts:

First, all the main lessons and units, except for sporadic small columns and brief articles, of

the textbooks are examined in terms of genre or category of the topics and themes. I focus on the reading section of each lesson of the textbooks because it is very likely to be the main body of the lesson in a traditional way of teaching in Japan even though the new GSY by MEXT officially declares that English should be taught more communicatively with far more focus on oral skills. For genre classification, I base my model on the Nippon Decimal Classification though I sometimes modify it when the types of the reading passages are often interdisciplinary and so very difficult to identify in a single category.

Secondly, the main characters in the reading texts of each lesson, if any human being appears in them, are also examined in terms of sex and gender. If the texts do not feature any people but personify animals or inanimate objects, they are treated as humans and categorized into one of the three groups: Male, Female, and Mixed (meaning both male and female included). Otherwise they go into Neutral group which indicates unspecified gender. The numbers of the four categories are counted by the group. Then, the numbers and the male-female ratios are compared and analyzed in relation to one another.

Thirdly, the relationships between the lesson topics/themes and the sex/gender of the main characters are examined in terms of relevancy.

II.2.ii Visuals: photos & illustrations

The visual components of the textbooks are examined, focusing on how photographs and illustrations help the users' comprehension of the themes and the topics of the literal texts they are attached to.

In general, textbooks include a variety of visuals such as photographs and drawings of people, animals, plants, and other inanimate objects, as well as different types of illustrations including charts, graphs, and maps. This holds true of EFL materials. Here, for the sake of sex and gender investigation, all the visual components of the textbooks are categorized into four groups according to their contents: Male, Female, Mixed, and Neutral. Pictures and illustrations exclusively portraying one or more male characters fall into the Male category; if photographs and drawings exclusively portray one or more female characters, they fall into the Female category. Pictures and drawings dealing with both sexes equally belong to the Mixed category. All the other visuals, which have no special reference to either human beings or personified objects, are categorized into the Neutral group. The number of the items in each group is counted and analyzed. The contents of the first two groups, Male and Female, are examined from the perspective of male and female equality or gender fairness. The numbers of the first three categories dealing with human beings are also examined later in relation to the findings in the reading texts reported above.

II.2.iii Comparison and discussion

Finally, the data of the examined two sections of the textbooks are compared and analyzed in terms of the mutual relationships. The correspondence of the main reading texts of each lesson and the visual images, drawings and illustrations, are investigated in terms of how closely the two components are related.

In addition, the results of the present study and those of the former studies conducted about fifteen years ago are compared and analyzed in order to learn whether or not, and how, the current English textbooks have improved in the light of gender-equal or non-sexist education.

III. Results

III.1 Reading texts

III.1.i Quantitative analysis

As EFL instructional materials, all the reading passages of the six examined English textbooks seem to appreciate the cross-cultural diversity by covering an extremely wide range of topics and themes from world history to science to art, reflecting the new course of study which advocates reforming the national education in favor of globalization. Advanced technology, environment, philanthropy, and pacifism are among preferred topics and themes. In terms of race and ethnicity, the reading sections describe people and objects from different countries and districts as well as cultures. No lessons, however, explicitly deal with gender issues as a topic or a theme in any way. See **Tables 4 to 9 of Appendix 2** for the details.

In terms of sex and gender, however, the main characters of the reading texts, as shown in **Tables 7-1 to 7-4 of Appendix 2**, are quite male-dominant in numbers. Out of 76 lessons, 32 have male central characters while 16 have female; 42.1% and 21.1%, respectively. Among 56 human characters, male characters account for 57.1% while females 28.6%.

Looking closely at each of the three pairs of the textbooks, CR1 and CR2 show an extremely unbalanced male-female ratio: Out of 26 lessons, 19 are male while four are female; 73.1% and 15.4%, respectively. Among 25 human-centered lessons, males represent 76% while females 16%. *Vivid English Communication* series (VV1 and VV2) show a similar, though a little softer, tendency: Out of 23 lessons, 7 are male (30.4%) while 4 female (17.4%). In contrast, *All Aboard! English Communication* series (AA1 and AA2) turned out as the opposite. Out of 27 lessons, 6 are male while 8 are female; 22.2% and 29.6%, respectively. The two series other than CR1 and CR2 have more neutral lessons than those in the other three gender categories.

III.1.ii Qualitative analysis

Looking at the social status and occupations of the main characters, 24 of the 32 male main characters have explicitly described occupations while ten of the sixteen female main characters do. CR1 and CR2, for example, introduced the male characters of quite exceptional occupations such as astronaut (Lesson 1 of CR1), photojournalist (Lesson 8 of CR1), *shogi* player (Lesson 2 of CR2), and robot scientist (Lesson 8 of CR2) besides more traditional jobs including pianist and scholar, but only a few females on relatively common jobs such as novelist (Lesson 3 of CR1) and doctor (Lesson 4 of CR2). Rather rare ones for females are environmentalist (Lesson 6 of CR1) and science writer (Lesson 7 of CR2).

In the case of AA1 and AA2, as mentioned above, they have the highest ratio of female characters (8 of 27; 29.6%), but five of them are high school students and only three have jobs such as gardener (Lesson 8 of AA1), musician (Lesson 8 of AA2), and animal therapist (Reading 2 of AA2). This paucity of paying jobs also holds true of VV1 and VV2: Three of four females have jobs such as blogger (Lesson 3 of VV1), singer (Lesson 6 of VV1), former United Nations staff (Lesson 9 of VV1).

Another case to mention is Lesson 9 of CR1, which tells a story of *Hayabusa*, an autonomous space navigation system and also includes a listening comprehension check question on a girl who

speaks of being an astronaut as her future profession. This is a good example of the measures to compensate the hazardous female omissions in the current English texts.

In addition, when the female characters appear, they are more frequently described as girls, not adults, and so are jobless figures or even war victims (Lesson 8 of CR1; Reading of VV1). One of the most problematic materials is the lesson 9 of CR2, where the *Activities* section deals with occupations as the topic, including two lists of the jobs high school boys and girls want to become in the future. Although the lesson introduces the aforementioned girl who speaks of being an astronaut as her future profession, the job names on the two lists along with the corresponding illustrations on the same page are so conventional or even outdated to handle in favor of gender equity that the materials would just reinforce gender stereotypes in society. This matter will also be discussed later in the section on the visual components of the textbooks.

III. 2 Visual components

The visual components in language textbooks are very “helpful in presenting more abstract, conceptual, and complex vocabulary at higher levels” (Seal, 1991, p. 301) when learners comprehend the textual and contextual message more effectively through the concrete images of the important elements of the materials. Especially, for cultivating the learners’ cross-cultural understanding in favor of globalization, they are powerful in dealing with new and unfamiliar people and objects inside and outside the earth.

III.2.i Quantitative analysis

The examined six textbooks contain 1,286 visuals in total: 730 photographs (56.8%) and 556 illustrations (43.2%). Among them, 786 (61.1%) depict people in some manner though 500 (38.9%) have no reference to human beings. Out of the former group, 335 are male-exclusive, 206 are female-exclusive, and 245 are gender-mixed pictures: 42.6%, 26.2%, 31.2%, respectively. Male to female ratio is approximately 3 to 2, which is about the same ratio as Nakai (2002) reports.

Looking closely at each series, AA1 and AA2 have 525 photographs and illustrations, the largest number of all the three titles. Out of them, 130 are male-exclusive, 130 female-exclusive, 120 gender-mixed, and 145 neutral pictures. The male to female ratio is one to one: They have exactly the same number of pictures.

In contrast, CR1 and CR2 have 419 visual images, and out of them 145 are male-exclusive, 36 female-exclusive, 68 mixed, and 170 neutral: 34.6%, 8.6%, 16.2%, and 40.6%, respectively. The male to female ratio is 4 to 1.

Out of 342 photographs and illustrations VV1 and VV2 contain, 60 are male-exclusive, 40 female-exclusive, 57 mixed, and 185 neutral visuals: 17.5%, 11.7%, 16.7%, and 54.1%, respectively. More than half of them are gender unspecified pictures though the series has still more male-exclusive visuals than female-exclusive counterparts.

As for the photograph and illustration ratios, among the 1,286 visual images are 730 photographs and 556 illustrations: The ratio is approximately three to two. As for each of the three pairs, CR1 and CR2 have 304 photographs and 115 illustrations (72.6% and 27.4%), AA1 and AA2 have 190 (36.2%) and 335 (63.8%), and VV1 and VV2 have 236 (69.0%) and 106 (31.0%). The AA pair is the only one series that utilizes more illustrations than photographs and also the equal

numbers of male and female visuals. The other two series have more photographs than illustrations: Approximately 70% are photographs in both two titles. For the details, see **Tables 11–1 to 11–4 of Appendix 3.**

III.2.ii Qualitative analysis

Looking more closely at the photographs and illustrations attached to the literal texts, how to handle visuals in lessons is varied with each series. AA1 and AA2, for example, not only have the largest numbers of pictures but also they utilize more illustrations than photographs. Among them, Word Box 2 of AA2 titled “Various Jobs” presents 50 drawings describing 19 males, 29 females, and two gender unspecified people with 50 different occupations including males as mechanic, pilot, carpenter, security guard, and construction worker as well as females as announcer/broadcaster, travel agent, graphic designer, teacher/instructor, and receptionist. Although many of them are very traditional, common trades for each sex, some are relatively unusual jobs for females as well as males: females as businessperson, judge, architect, politician, and professor; males as secretary, sales clerk, server/waitperson.

Along with male and female pictures of various occupations, AA2 contains a lesson on a restaurant run by local high school students, including five photographs of boys and girls cooking and serving food together. The textbook also has an illustration of a cooking boy in Word Box 1 (p. 28).

In contrast, CR1 and CR2, whose reading texts deal with far more male main characters, contain more photographs and illustrations of males than females. Most of the photographs portray some sorts of great figures such as astronaut, physically challenged pianist, world-famous cartoonist, top popular musician, and *shogi* champion; they are all men. Females are very few and depicted in stereotyped manners; for example, the illustration in Sound Studio 4 of CR2 (p. 119) draws a woman serving food to a boy though it has seemingly no connection with the content of the section. In addition, women tend to be presented in a supporting role or even as the weak. Lesson 4 of CR1, which tells a success story of a visually-impaired pianist, shows some photographs of the hero with his mother on the side or in the back. This seems unproblematic in itself, but it can become rather influential when those pictures are among the few that portray real women in the textbook.

Since VV1 and VV2 have the smallest number of visuals of the three examined titles and more than half of them are neutral pictures, photographs and illustrations depicting people are relatively few, though it is the only one series that employs photographs of people on the covers. Among the few pictures, Lesson 3 of VV1 shows a number of young people on streets in a wide variety of clothes including a young man in a skirt. However, when they differentiate people’s physical attributes such as sex/gender, race/ethnicity, and age/generation in drawings, they tend to become stereotyped: Sex/gender is typified by hairstyles and eyelashes as with race/ethnicity by skin colors, and age/generation by wrinkles and lines.

III.2.iii Comparison and discussion

After more than a decade, Japanese high school textbooks do not show so many significant differences, or improvement, from the older versions, either quantitatively or qualitatively.

With regard to the frequency of appearance of male and female characters in the reading texts, compared with the results of Nakai (2000) and Nakai (2001), both of which examined the then contemporary English textbooks, the current versions of textbooks are more androcentric or more

male-centered in terms of gender appearance or frequency. The previous studies report that the male-female ratios are 38.4% and 24.6% in 2000 while 34.1% and 21.7% in 2001. In a numerical sense, the current high school English textbooks do not show any improvement in the female visibility or frequency of appearance of female characters in the main reading texts. Women are still invisible or omitted from the scene.

However, in the range of occupations and social status, the current textbooks introduce a few but quite new and unprecedented occupations for females such as medical worker for NGO and disarmament/peacemaking coordinator for the United Nations and Japanese government, which were not seen in the older books and very likely to widen the future visions of boys as well as girls.

In terms of visual images, as shown in **Appendices 3 and 4**, the six examined textbooks contain 1,286 pictures; i.e. 214.3 per book. The former versions include 2,519 in the twenty books in total; i.e. 126.0 per book. The newer textbooks have twice as many pictures as the older ones. This difference may be related to the fact that the current textbooks deal with more cross-cultural themes and topics that are often unfamiliar to the young and inexperienced learners and so more information are necessary for them. In terms of gender representation, no special improvement is discovered here.

As for the percentage of photographs and illustrations, the current textbooks contain 730 photographs (56.8%) and 556 illustrations (43.2%) while the older books have 59.0% and 41.0%. The number of illustrations has slightly increased. As stated above, illustrations sometimes add another kind of information which literal texts do not provide: The race/ethnicity of the characters, for example, are apparent in visuals even though it is not referred in texts (Nakai, 2002). Moreover, drawings are inherently simplistic and symbolic, and so they are more likely to “portray easily recognizable clichés” (Hartman & Judd, 1978, p. 387) in very stereotyped or even sexist manners. This holds true with the current textbooks as already mentioned on the results of VV1 and VV2. However, no such extremely sexist drawings as reported in the older textbooks, e.g. a personified female mosquito wearing underwear, high-heeled shoes, and red lipstick and a girl skating in a skirt, are found in this examination.

From a large number of research studies in the past, we have already learned that no single textbook is perfect in every sense. Then, all we have to do as a researcher and a practitioner, as Gollnick, Sadker, & Sadker (1982) and Grossman & Grossman (1994) claim, is to make the best and critical use of it as well as to create as good materials as possible if students are ready to learn (Yoshihara, 2013). It is our responsibility to teach them what gender really is and why it is important to learn.

IV. Conclusion

IV.1 Summary

The exploration into the registered high school English textbooks currently used in Japan, focusing on the degrees to which such EFL textbooks have improved in terms of sex and gender representation over these fifteen years, by means of duplicating and comparing with the precedent studies, has revealed a very complicated and mixed reality at this moment. In a numerical sense,

the examined textbooks are still androcentric and sexist in their representation of men and women. They have more male main characters with a wide variety of occupations and social status than the female counterparts in a narrow and limited range. In quality, some of the lessons and units challenge the gender stereotypes and chauvinism by introducing some untraditional types of people such as a female medical expert working overseas, a female UN official for peacekeeping, and a cooking schoolboy, which were seldom described fifteen years ago.

IV.2 Limitation

There are a number of limitations to this study. One of them is that the present paper deals with textbooks, which is just one of the three research areas in the EFL education: the English language, Process, and Materials (Sunderland, 1992). The other types of materials as well as the two other areas are also important in order to understand hidden phenomena happening in English lessons every day. Another limitation is that the number of examined textbooks, six, might not be large enough for a comprehensive investigation, although the book selection was conducted very carefully on the basis of the market share data. Still another is that the present paper analyzed only two of the seven courses officially offered by the current GSY. A more extensive investigation of the textbooks for the other five courses including English Expression I & II and English conversation might reveal completely different faces of the materials.

IV.3 Future research suggestion

On April 30th in 2015, MEXT issued, according to the law enacted in the previous year, a highly important notice that schools take more careful and sensitive measures to treat all the pupils and students of sexual minorities including those with sexual identity disorders (MEXT, 2015). The notice suggests that, even though not explicitly mentioned in the current course of study, gender is now one of the indispensably important issues to deal with at schools as well as in society of Japan. Then, the language textbooks are now expected to urgently follow such new current of thought when they cope with sex and gender issues along with other contemporary problems. In order to produce such improved textbooks, more comprehensive and extensive research should be conducted on these ongoing phenomena at school in more carefully controlled ways.

List of Examined Textbooks

- Kiyota, Y. *et al.* (2015). *All aboard!: English communication I*. Tokyo: Tokyo shoseki.
 Kiyota, Y. *et al.* (2015). *All aboard!: English communication II*. Tokyo: Tokyo shoseki.
 Shimozaki, M. *et al.* (2013). *Crown: English communication I*. Tokyo: Sanseido.
 Shimozaki, M. *et al.* (2014). *Crown: English communication II*. Tokyo: Sanseido.
 Tsukumichi, K. *et al.* (2015). *Vivid: English communication I*. Tokyo: Diichi gakushusha.
 Tsukumichi, K. *et al.* (2015). *Vivid: English communication II*. Tokyo: Diichi gakushusha.

References

- Farooq, M.U. (1999, September). *Examining sexism in an EFL textbook*. Retrieved from <http://www.birmingham.ac.uk/Documents/college-artslaw/cels/essays/sociolinguistics/farooq6.pdf>
 Gollnick, D., Sadker, M., & Sadker, D. (1982). Beyond the Dick and Jane syndrome: Confronting sex bias in

- instructional materials. In M. Sadker & D. Sadker (Eds.), *Sex equity handbook for schools* (pp. 60–95). New York: Longman.
- Grossman, H. & Grossman, S. H. (1994). *Gender issues in education*. Needham Heights, MA: Allyn and Bacon.
- Hoonoki, K. (1999). Gakkouni okeru danjo-byodou [Male-female equity at school]. *Kokuritsu-fujin-kyouiku-kaikan kenkyukiyou*, 3, 23–32. Retrieved from <http://www.nwec.jp/jp/data/journal303.pdf>
- Hartman, P.L. & Judd, E.L. (1978). Sexism and TESOL materials. *TESOL quarterly*, 12(4), 383–393.
- Ito, Y., Owaki, M., Kamiko, T., & Yoshioka, M. (1991). *Kyokasho no nakano danjosabetu* [Sexism in textbooks]. Tokyo: Akashishoten.
- Japanese Association of University Women. (2014). Jendah byodou no shitennkara kateika-kyouiku wo kangaeru [Home economics education in the perspective of male-female equality]. *JAUW iinkai houkoku 2014*. Retrieved from <http://www.jauw.org/aboutjauw/books/2014kyouikuinkai-report.pdf>
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2004, January). 2004nendoyou koutougakkou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 48, 68–74.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2005, June). 2005nendoyou shougakkou koutougakkou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 49, 57–69.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2006, August). 2006nendoyou chugakko koutougakkou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 50, 68–74.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2008, March). 2007–2008nendoyou kyokasho saitaku deta. *Kyokasho repohto*, 51, 58–66.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2009, May). 2009nendoyou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 52, 51–62.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2010, July). 2010nendoyou chugakko koutougakkou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 53, 65–75.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2011, August). 2011nendoyou shougakkou koutougakkou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 54, 67–81.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2012, December). 2012nendoyou chugakko koutougakkou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 55, 61–75.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2013, August). 2013nendoyou koutougakkou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 56, 55–67.
- Kyokasho repohto henshu iinkai. (2015, January). 2014nendoyou koutougakkou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto*, 57, 50–59.
- Lesikin, J. (1995). *ESOL textbooks and the social power of the ESOL students: Procedures for analyzing the potential influences of textbook characteristics*. Unpublished doctoral dissertation. Teachers College, Columbia University.
- Levin, J.R. & Lesgold, A.M. (1978). On pictures in prose. *Educational communication & technology*, 26(3), 233–243.
- MEXT. (2006). Danjo kyoudousakakushakai no keisei nimuketa gakushukatudou no shinkou. *Monbukagaku hakusho*, Pt.2, Ch.1, Sec.11. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/029.htm
- MEXT. (2015). Koutougakkou Gakushuu-shidouyouryou eiyakuban (kariyaku). Retrieved from <http://www.mext.go.jp>youryou>eiyaku>
- MEXT. (2015). Seidouitsushougai ni kakawaru jidouseito nitaishuru kimekomakana taiou no jisshi ni tsuite. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm
- Naikakufu. (2012). *Danjo kyoudosankaku hakusho* (Statement of men & women equal employment).
- Nakai, M. (1999, August). *Sex and gender presentation of senior high school English textbooks in Japan*. Paper presented at the 12th World Congress of International Association of Applied Linguistics (AILA), Tokyo, Japan.
- Nakai, M. (2000). Have Japanese English textbooks improved?: Male and female representation of current

- textbooks. *The bulletin of the Graduate School of Education of Waseda University*, 10, 69–80.
- Nakai, M. (2001). Sex and gender in the pre- and main reading sections of high school English textbooks in Japan. *The Tsuru University Review*, 54, 83–96.
- Nakai, M. (2002). Gender representation in visual components of high school English textbooks in Japan. *The bulletin of the Graduate School of Education of Waseda University, Separate Volume*, 9(2), 211–234.
- Nakai, M. (2005). Students' perception of the female title Ms. *The Journal of Tokyo International University: The School of Language Communication*, 7, 31–41.
- Narisawa, Y. (1992). Comprehensive studies in English education (5): The portrayal of women in English textbooks in Japan: A sociolinguist's view. *Tohokugakuindaigaku-ronshu: Ningen, gengo, joho*, 102.
- Peeck, J. (1974). Retention of pictorial and verbal content of a text with illustrations. *Journal of educational psychology*, 65(6), 880–888.
- Pihlaja, S. (2008). Would you like to dance with me, Miwa?: Gender roles and the EFL text. Retrieved from <http://www.oro.open.ac.uk>
- Porreca, K.L. (1984). Sexism in current ESL textbooks. *TESOL quarterly*, 18 (4), 705–724.
- Samuels, S.J. (1970). Effects of pictures on learning to read, comprehension and attitude. *Review of educational research*, 40, 397–407.
- Sasaki, E. (1994). Sexism in English textbooks: How could Japanese possibly survive in “internationalized” world. In Women's studies association (ED.), *Joseigaku*, 2, 121–139. Tokyo: Shinsuisha.
- Schallert, D.L. (1980). The role of illustrations in reading comprehension. In R.J. Spiro, B.C. Bruce, & W.F. Brewer (Eds.), *Theoretical issues in reading comprehension: Perspectives from cognitive psychology, linguistics, artificial intelligence, and education* (pp. 503–524). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Seal, B.D. (1991). Vocabulary learning and teaching. In M. Celce-Murcia (Ed.), *Teaching English as second or foreign language* (2nd ed.) (pp. 296–311). Boston: Heinle & Heinle.
- Shuppan roren kyokasho taisaku iinkai. (1997, February). 1997nendoyou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto '97*, 41, 59–75.
- Shuppan roren kyokasho taisaku iinkai. (1998, February). 1998nendoyou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto '98*, 42, 44–48.
- Shuppan roren kyokasho taisaku iinkai. (1999, February). 1999nendoyou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto 1999*, 43, 53–58.
- Shuppan roren kyokasho taisaku iinkai. (2000, February). 2000nendoyou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto 2000*, 44, 56–66.
- Shuppan roren kyokasho taisaku iinkai. (2001, February). 2001nendoyou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto 2001*, 45, 42–55.
- Shuppan roren kyokasho taisaku iinkai. (2002, February). 2002nendoyou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto 2002*, 46, 62–85.
- Shuppan roren kyokasho taisaku iinkai. (2003, March). 1997nendoyou kyokasho no saitakukekka. *Kyokasho repohto 2003*, 47, 61–70.
- Sunderland, J. (1992, January). Gender in the EFL classroom. *ELT journal*, 46(1), 81–91.
- Togano, F. (2009, February). So where are the working women?: A discussion of gender roles in high school textbooks. *The language teacher*, 33(2), 13–17.
- Vernon, M.D. (1953). The value of pictorial illustration. *British journal of educational psychology*, 23, 180–187.
- Watanabe, A. (2012, April). Koukoukyoukasho no saitakujoukyou, ge. *Naigai kyoiku: Deta de yomu kyoiku 2011~2012: Chousa toukei kaisetsushu*, 47–54.
- Watanabe, A. (2013, May). Koukoukyoukasho no saitakujoukyou, ge. *Naigai kyoiku: Deta de yomu kyoiku 2012~2013: Chousa toukei kaisetsushu*, 63–72.
- Watanabe, A. (2014, May). 2014nendo koukoukyoukasho saitakujoukyou: Monkasho matome, ge. *Naigai*

- kyoiku: Deta de yomu kyoiku 2013~2014: Chousa toukei kaisetsushu*, 73-81.
- Watanabe, A. (2015, May). 15endo koukoukyoukasho saitakujoukyou: Monkasho matome, ge. *Naigai kyoiku: Deta de yomu kyoiku 2014~2015: Chousa toukei kaisetsushu*, 52-59.
- Wright, A. (1989). *Pictures for language learning*. New York: Cambridge University Press.
- Yoshihara, R. (2013, September/October). Learning and teaching gender and sexuality issues in the EFL classroom: Where students and teachers stand. *The language teacher online*, 37(5), 8-11. Retrieved from http://www.jalt-publications.org/files/pdf-article/37.5tlt_art02.pdf

Appendix 1

Table 1 Market share of English Communication I textbooks

Book title	Publisher	2012-2013	2013-2014	2014-2015	Total 1
All Aboard!	Tokyoshoseki	125441	144136	158116	427693
Vista	Sanseido	99711	113617	112070	325398
Crown	Sanseido	108527	107115	108427	324069
My Way	Sanseido	69404	76951	79527	225882
Vivid	Daiichi	67269	71718	75604	214591
Whole market		1220673	1276758	1277214	3774645

Table 2 Market share of English Communication II textbooks

Book title	Publisher	2013-2014	2014-2015	Total 2
Crown	Sanseido	111456	109833	221289
All Aboard!	Tokyoshoseki	87254	106592	193846
My way	Sanseido	69115	80594	149709
Vista	Sanseido	66699	73886	140585
Element	Keirinkan	70569	68707	139276
Vivid	Daiichi	65055	70589	135644
Whole market		1080229	1126881	2207110

Table 3 Market share of English Communication 1 & II

Book title	Publisher	T1+T2	Share%	Ranking
Crown	Sanseido	545358	9.1	2
All Aboard!	Tokyoshoseki	621539	10.4	1
My way	Sanseido	375591	6.3	4
Vista	Sanseido	465983	7.8	3
Element	Keirinkan	343156	5.7	6
Vivid	Daiichi	350235	5.9	5
Whole market		5981755		

Appendix 2

Titles and contents of registered H.S. English textbooks in Japan

Table 4 Crown English Communication I (Sanseido, 2013)

L.	Title	Genre	Main Character	Ethnicity
1	Going into Space	Space travel/ Pioneer	Male: Astronaut	Asian: Japanese
2	A Forest in the Sea	Landfills/Ecology	Mixed: Ecologists	Asian: Japanese
3	Waters without Borders	Foreign languages & cultures	Female: Novelists	Asian: Mixed
4	Playing by Ear	Biography/ Physical challenge	Male: Pianist	Asian: Japanese
5	Food Bank	Welfare/NPO	Male: Philanthropist	Caucasian: American?
R1	Wisdom of a Fool	Literature/Fables	Male: Sage	Asian: Middle Eastern?
6	Roots & Shoots	Biology/Wildlife, Conservation	Female: Envi- ronmentalalist	Caucasian: British
7	Diving into History	History/African Archeology	Male: Archeologist	Caucasian: French
8	Not So Long Ago	Photojournalism/ Pacifism	Mixed: war victims & Photojournalist	Mixed: Asian & American
9	Paddling a Log?	The Internet/ Information technology	Male: Mixed	Caucasian
10	Good Ol' Charlie Brown	Culture/Cartoon	Male: Cartoonist	Caucasian: American
R2	The Luncheon	Literature/Humor	Male: Writer	Caucasian: French?
O	Two Dreamers, One Dream	History/Freedom	Male: Politician & reformer	Mixed: Afro- American

Table 5 Crown English Communication II (Sanseido, 2014)

L.	Title	Genre	Main Character	Ethnicity
1	A Boy and His Windmill	Biography/Social reform/Self-help	Male: Inventor	African: Malawian?
2	Into Unknown Territory	Biography/Celebrity	Male: Top <i>shogi</i> player	Asian: Japanese
3	Paul the Prophet	Wonder/Animal prophecy	Male: Octopus	Caucasian: German
4	Crossing the border	Biography/NGO/Medical volunteer	Female: Doctor	Asian: Japanese
5	Txtng-Language in evolution-	Culture/Language & technology	Neutral	Mixed
R1	Sun-Powered Car	Literature/Humor	Male: TV news reporter	Caucasian: American?
6	Ashura	History/Buddhist art	Male: Scholar	Asian: Japanese
7	Why Biomimicry?	Science/Sustainability	Female: Science writer	Caucasian?
8	Before Another 20 Minutes Goes By	Technology/Humanitarianism	Male: Robot scientist	Asian: Japanese
9	The Long Voyage Home	Science/Space exploration	Male: Space scientist	Asian: Japanese
10	Grandfather's Letters	Biography/Family bond	Male: British army officer	Caucasian: British
R2	A Fall Before Rising	Literature/Mountaineering	Male: Mountaineer	Asian: Indian
O L	MJ	Biography/Celebrity	Male: American pop musician	African: American

Table 6 All Aboard! English Communication I (Tokyo Shoseki, 2015)

L.	Title	Genre	Main character	Ethnicity
1	Hello, Everyone!	Cross-culture/Introduction	Mixed: H.S. Students	Mixed: No African
2	A Letter to Australia	Cross-culture/Letters	Male: H.S. students	Caucasian: Australian
3	Kawaii Culture	Cross-culture/Dialogue	Female: H.S. Students	Mixed: Asian & Caucasian
4	A Symphony of Soup and Noodles	Culture/Food	Neutral	Asian: Japanese
5	Lifelong Friends	Cross-culture/Language learning	Male: Comedians	Mixed: American & Japanese
R1	Short Stories in English	Literature/Humor	Mixed:	Mixed
6	A Funny Picture from Edo Period	Culture/Art	Female: H.S. Student	Asian: Japanese
7	Living on Ice	Biology/Wildlife	Neutral	Unspecified
8	A Garden in Hokkaido	Biography/Nature	Female: Gardener	Asian: Japanese
9	Pigs from across the Sea	History/Humanitarianism	Neutral	Asian: Japanese
10	Memories on Trees	Cross-culture/Lifestyle	Neutral	Caucasian: Finnish
11	A Window on the Universe	Science/Astronomy	Neutral	Hawaiian & Japanese
R2	The Kite	Literature/Fable	Male: Animals	Unspecified

Table 7 All Aboard! English Communication II (Tokyo Shoseki, 2015)

L.	Title	Genre	Main character	Ethnicity
1	My Friend in Hawaii	Cross-culture/ E-mail	Mixed: H.S. Student	Mixed: Japanese & Hawaiian
2	Streetcars in my City	Culture/ Environment	Neutral	Mixed: Japanese & American
3	Crossing Language Barriers	Cross-Culture/ Show business,	Male: Ventriloquism Performer	Asian: Japanese
4	The Spirit of the Forest	Biology/Wildlife	Neutral: Animal	Asian: Japanese
5	Girl with a Pearl Earring	Culture/Art (Painting)	Female: H.S. Student	Asian: Japanese
6	Grandchildren's Restaurant	Business/ Restaurant	Mixed: High School. Students	Asian: Japanese
R1	Mujina	Literature/Fable	Male: Merchant	Asian: Japanese
7	A Microcosm in the Sea	Geography/ World Heritage/ Environment	Male: H.S. Student	Caucasian: Australian
8	Wings of Music	Biography/ Profession	Female: Musician	Asian: Japanese
9	Magic of the Cotswolds	Geography/ Travel abroad	Female: H.S. Student	Asian: Japanese
10	Bunraku	Culture/Art	Female: H.S. St	Caucasian?
11	Bitter Truth about Chocolate	Economics/ Fair-trade	Neutral	African:
12	Hayabusa's Present from Space	Science/ Astronomy, Space exploration	Neutral	Asian: Japanese
R2	Olivia	Literature/	Female: Animal therapist	Caucasian: American

Table 8 Vivid English Communication I (Daiichi Gakushusha, 2015)

L.	Title	Genre	Main character	Ethnicity
1	Voices from the World	Cross-culture/ Lifestyle	Mixed: H.S. Students	Mixed:
2	Stories behind Names	History/Custom, English names	Neutral	Caucasian: British? American?
3	Look Cool on Your Streets	Culture/ Street fashion	Female: Blogger	Asian: Japanese
4	Our actions Can Make Electricity	Technology/Ecology Clean energy	Male: Scientist	Asian: Japanese
5	Being Cute to Survive	Biology/Survival	Neutral	Unspecified
6	Take a Chance on You	Biography/ Challenge	Female: Singer	Mixed: Japanese & American.
7	Japanese Dish from Abroad	Economics/Food miles, Ecology	Neutral	Asian: Japanese
8	The Sphinx in Danger	History/Geology Environment	Neutral	African: Egyptian
9	The Dream of a Young Japanese Girl in Ghana	Biography/Social reform	Male: Overseas volunteer	Asian: Japanese/ African
R.	Misako's A-bombed Piano	Literature/ Pacifism	Female: A-bomb survivor	Asian: Japanese

Table 9 Vivid English Communication II (Daiichi Gakushusha, 2015)

L.	Title	Genre	Main character	Ethnicity
1	Pictograms-Useful Signs on Streets	Culture/ Communication	Neutral	Unspecified
2	Fun with Pakkun	Biography/Life abroad	Male: Comedian	Caucasian: American
3	Origami Is Not a Piece of Paper	Culture/Art, Paper craft	Neutral	Asian: Japanese
4	The Real Top Player in the World	Biography/Sports & Handicap	Male: Wheelchair tennis player	Asian: Japanese
5	The Doctor in the Stomach	Science/Medical technology	Neutral	Unspecified
6	Nature for the Next Generation	Geology/ Ecotourism	Neutral	Asian: Japanese
7	A Young Man in the Sea Who Made a Change	Biography/ Historical figure	Male: English translator pioneer	Asian: Japanese
8	Streetcars in the 21 st Century	Economics/ Ecology	Neutral	Asian: Japanese
9	The Challenge of Disarmament	History/Pacifism, Disarmament	Female: U.N. staff	Asian: Japanese
10	Hayabusa-With Our Hopes and Dreams	Science/ Astronomy, Space exploration	Neutral	Asian: Japanese
R.	1,000 Winds and 1,000 Cellos	Literature/ Human bond	Mixed: a boy and a girl	Asian: Japanese
FR 1	A Retrieved Reformation	Literature/	Male	Caucasian:
FR 2	The Joker	Literature/		Caucasian:

Table 10-1 Gender ratio of main-characters of textbook lessons

	male	female	mixed	neutral	lessons
Crown I	9	2	2	0	13
Crown II	10	2	0	1	13
All Aboard I	3	3	2	5	13
All Aboard II	3	5	2	4	14
Vivid I	2	3	1	4	10
Vivid II	5	1	1	6	13
Total	32	16	8	20	76
%	42.1	21.1	10.5	26.3	-
%/56	57.1	28.6	14.3	-	

Table 10-2 Crown English Communication I & II (Sanseido)

	male	female	mixed	neutral	lessons
Crown I	9	2	2	0	13
Crown II	10	2	0	1	13
Total (%)	19 (73.1)	4 (15.4)	2 (7.7)	1 (3.8)	26
%/25	76.0	16.0	8.0	-	-

Table 10-3 All Aboard! English Communication I & II (Tokyo Shoseki)

	male	female	mixed	neutral	lessons
All Aboard I	3	3	2	5	13
All Aboard II	3	5	2	4	14
Total (%)	6 (22.2)	8 (29.6)	4 (14.8)	9 (33.3)	27
%/18	33.3	44.4	22.2	-	-

Table 10-4 Vivid English Communication I & II (Daiichi-Gakushusha)

	male	female	mixed	neutral	lessons
Vivid I	2	3	1	4	10
Vivid II	5	1	1	6	13
Total (%)	7 (30.4)	4 (17.4)	2 (8.7)	10 (43.5)	23
%/13	53.8	30.8	15.4	-	-

Appendix 3

Numbers of visuals

Table 11-1 Crown I & II

	male	female	mixed	neutral	total (%)
photograph	116	27	45	116	304 (72.6)
illustration	29	9	23	54	115 (27.4)
total (%)	145 (34.6)	36 (8.6)	68 (16.2)	170 (40.6)	419

Table 11-2 All Aboard! I & II

	male	female	mixed	neutral	total (%)
photograph	25	27	27	111	190 (36.2)
illustration	105	103	93	34	335 (63.8)
total (%)	130 (24.8)	130 (24.8)	120 (22.9)	145 (27.6)	525

Table 11-3 Vivid I & II

	male	female	mixed	neutral	total (%)
photograph	40	25	36	135	236 (69.0)
illustration	20	15	21	50	106 (31.0)
total (%)	60 (17.5)	40 (11.7)	57 (16.7)	185 (54.1)	342

Table 11-4 Total

	male	female	mixed	neutral	total (%)
photograph	181	79	108	362	730 (56.8)
illustration	154	127	137	138	556 (43.2)
total (%)	335 (26.0)	206 (16.0)	245 (19.1)	500 (38.9)	1286

Key:

- 1) male stands for male-exclusive visuals;
- 2) female stands for female-exclusive visuals;
- 3) mixed stands for visuals of mixed sexes;
- 4) neutral stands for sexually neutral or unspecified visuals.

Appendix 4

Data of the older textbooks from Nakai (2000)

Table 12-1 Numbers of visuals of the second editions (1997)

	male	female	mixed	neutral	total	%
photograph	149	89	264	268	770	60.3
illustration	118	70	138	184	508	39.7
total	267	159	402	452	1278	100
%	20.9	12.4	31.5	35.4	100	

Table 12-2 Numbers of visuals of the first editions (1990)

	male	female	mixed	neutral	total	%
photograph	139	89	218	270	716	57.7
illustration	136	77	152	160	525	42.3
total	275	166	370	430	1241	100
%	22.2	13.4	29.8	34.6	100	

Table 12-3 Numbers of visuals (1990 & 1997)

	male	female	mixed	neutral	total	%
photograph	288	178	482	538	1486	59.0
illustration	254	147	290	344	1033	41.0
total	542	325	772	882	2519	100
%	21.5	12.9	30.6	35.0	100	

Key:

5) male stands for male-exclusive visuals;

6) female stands for female-exclusive visuals;

7) mixed stands for visuals of mixed sexes;

8) neutral stands for sexually neutral or unspecified visuals.

「郭象莊子序」の眞偽について

水 野 厚 志

The Issue of Truth or Falsehood of Guoxiang's Introduction of Zhuangzi

MIZUNO, Atsushi

Abstract

In Fen Youlan's words the emphasis on the word "Emperor" in the phrase "Saint and Emperor" in the Introduction of Zhuangzi is inappropriate for Zhuangzi's Annotation. He says that it is Zhuangzi's Annotation that emphasizes the nature of all things in the universe, and the introduction is for Zhuangzi instead of Zhuangzi's Annotation, which in a sense is to the point when it is prescribed to the first half of Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi. In the latter half of Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi, words like "*duhua*" and "*zide*" which are preferred by Guo Xiang and express his original thought appear many times. This paper argues that it is appropriate to regard the text after the expression "故曰不知義之所適 (*gu yue bu yi zhi suo shi*)," which is in the latter half of Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi where Guo Xiang's original thought can be observed, as a later added portion to the annotation "Saint and Emperor" of the first half.

Keywords: 莊子 (Zhuangzi), 郭象 (Guo Xiang), 郭象莊子序 (Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi)

目 次

はじめに

- 一. 『莊子』「郭象莊子序」の眞偽を巡る問題について
 - 二. 『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」
 - 三. 『莊子』「郭象莊子序」と郭象「莊子注」の関係について
- まとめ

はじめに

周知のごとく、現行本『莊子』三十三篇本は現存する唯一の『莊子』の完本である。そしてその編纂を手掛けたのは、西晋の郭象である。

嘗て武内義雄は、日本の高山寺所藏舊鈔卷子本末の跋尾の文に、陸徳明の『經典釋文』序録と共通する部分が多く見られ、郭子玄（郭象の字）の語としていているところから、高山寺所藏舊鈔卷子本末の跋尾全體が郭象の跋文であるとし、¹⁾ この説は今日に至るまで廣く支持されている。

それに對して、もともと現行本に付されている「郭象莊子序」について疑いの目を向けた學者は、管見する限りにおいて、日本國內では青木五郎と古勝隆一だけであるが、²⁾ 中國・臺灣では「郭象莊子序」の眞偽を巡って、王利器・余敦康らを皮切りに、今日に至るまでその問題を巡る議論は引き續いている。³⁾

また、郭象の跋文であつたとみられる高山寺所藏舊鈔卷子本末の跋尾の文は、現行本『莊子』三十三篇本の最後の篇である「天下篇」の後に付されていたのであるが、「天下篇」の内容を精査するとその中心となっている思想の一つに内聖外王が挙げられ、⁴⁾ 奇しくもその内聖外王は現行本『莊子』卷頭の「郭象莊子序」にも置かれている。

『莊子』本文・「郭象莊子注」・「郭象莊子序」全體の中で、内聖外王が用いられているのはこの二カ所だけであることを考えると、兩者の間には何らかの繋がりがあると考えるのが自然である。

そこで本稿では、「郭象莊子序」の内容を見直すことによって、現行本『莊子』郭象序の眞偽に對する私見を述べていくことにしたい。

一. 『莊子』「郭象莊子序」の眞偽を巡る問題について

「郭象莊子序」の眞偽問題を提起した嚆矢は王利器であり、『宋會要輯稿』所載の文に、北宋初年に莊子序の眞偽を巡って、それを殘すか廢すか議論された記録があることから、偽作ではないかと疑っている。そしてそのすぐ翌年に余敦康は、王利器の論據としているのが『宋會要輯稿』だけであり、莊子注と莊子序の内容に齟齬はきたしていないとして、反駁している。また、王利器は何焯（1661-1722）の『何義門家書』卷二書中に、宋版『莊子』の序文を刻したのは、王安石の子の王雱（1043-1076）が當時まだ無名であつたため、郭象に假託して莊子序を偽作したと記しているのに對し、景德三年に刻印された時には王安石の生まれた北宋の眞宗天禧五年（1021）まで十三年、王安石の子の王雱が生まれた慶曆三年（1043）までは更に三十七年も距てていることから、別人であるとしている。そして『新唐書』「藝文志」丙部に王滂の『百里昌言』二卷があり、陳隋の間の人であるとされているのがまさしく其の人であるとしている。⁵⁾

また、馮友蘭は「郭象莊子序」で「内聖外王」の王が強調されているのは、「莊子注」にはそぐわない。萬物の性分を強調するのが「莊子注」の立場だとし、「莊子注」の序文ではなく、『莊子』に對する序文であるとしている。⁶⁾

近時、その他の學者では、姜龍翔が莊子序の最後の語句と『世說新語』の引く『竹林七賢論』の向秀を評した文の語句との異同を確認した結果、載達の文を脱胎したものであり、東晋晩期の作品であつて、この「莊子注」は郭象の作品ではない、と一應の結論を導き出している。⁷⁾ しかしながら『竹林七賢論』は佚文であり、向秀等の注文が紛れ込んでいないとも限らず、まだこれからも様々な意見が噴出して来るものと思われる。

一方日本での「郭象莊子序」の眞偽を巡る問題については、青木五郎は「余敦康の反論は、王利器の論に對する批判に性急なあまり偽作という行爲が原意を改纂しようとする目的の外に、原意に即しながらも亡佚・散亂したものを新たに作成して原著者の名を冠することによって、それを權威あらしめると同時に、自己の（思想的）立場を有利ならしめるために行われた、という中國思想史に特に顯著な狀況に對する配慮を欠いている」⁸⁾と述べている。加えて青木五郎は、「端的にいえば、郭象の思想に習熟したものであれば、この位の序文（あくまで余敦康の論證の範圍内での條件を満たすもの）は、或は偽作することも可能であつたのではないか」⁹⁾と述べ、北宋の老子注『老子藏室纂微篇』をとりあげ、余敦康の例證の範圍内での『莊子注』と符合する序文を偽作することも可能であつたろうこと、余敦康の論證の範圍内では、莊子序を確實に郭象の手定になると斷定することはできない」¹⁰⁾ことを例證している。そして、「郭象の莊子序の眞偽に關する疑問は、今日のところ、他の資料乃至は方法によっては、これ以上論證を進めることが一應不可能であるならば、殘る道は余敦康によつてとられた莊子序の内面からの資料批判を、より一層徹底させる以外にないのだろう」¹¹⁾と結び、「あらためて莊子序と『莊子注』とを比較検討した結果、莊子序に用いられたそのほとんどすべての用語を『莊子注』の中に検索できることになり、ここにいたって、この兩者をなお別人の手になるものと反證することは、恐らく不可能であらう」¹²⁾と結論づけている。この點については、以下「三.『莊子』『郭象莊子序』と郭象「莊子注」の關係について」の中で改めて檢證していくことにする。

古勝隆一は、後漢から東晉までの注釋書の序文を總體として取り上げ、「後漢から東晉にかけて成立した注釋書に附せられた序文群は、共通する學術史的基盤に依接して執筆されたものである」¹³⁾とし、この時期の序文に共通する要素として「A 原著が著された経緯、B 原著者の傳記、C 原著の書名に關する説明、D 傳承や注釋の歴史への言及、E 自身による文獻整理や辨偽の記録、F 注釋の動機についての説明、G 讀者に向けてのメッセージの要素がそれぞれ確認できる」¹⁴⁾としている。

そして、宋版以降の『莊子』刻本の巻首に見える「南華眞經序」について、「『莊子』の思想をパラフレーズしてまとめたものであるが、歴史的な記述がまったく含まれない。ここには〈莊子〉以外、學術史上の固有名詞—先行する注釋家の名前、書物の篇名など—は見えず、また本文の執筆者が『莊子』と學術的に關與した事跡が記されない。この序文は、内容から判斷する限り同時期の他の注釋書の序文と類似しない」¹⁵⁾とし、「京都高山寺には鎌倉時代抄寫の『莊子』郭注殘本が藏され、同書の終卷に當たる天下篇が遺る。この卷子の末尾には通行本に見えない一文があり、これが従來、〈莊子後序〉〈莊子後記〉などと稱されることが多かった。この一文に對して、上記の七要素の有無を調べると、そのうちのB・D・E・Fの四要素が存している事が分かる。この文は、形式的に見て同時期の注釋書の序文と類似しており、形式面から考えても眞の「郭象莊子序」ではないかと思われる」¹⁶⁾とし、先に挙げた青木五郎とは正反對の結論に至っている。他の同時期の序文とその性質を比較することだけによって結論を出すということは些か性急に過ぎるが、「郭象莊子序」だけが同時代の注釋書の序文と類似しないという指摘には注目するべきである。

二.『莊子』『天下篇』と「郭象莊子序」

先に挙げたように、「内聖外王」の四字句が現れているのは、『莊子』本文の中でも天下篇の一箇所だけである。そして、郭象注まで廣げてみても書籍全體で「内聖外王」は全く見られない。そして、本文以外では唯一郭象序の中で用いられている。

あくまでも試論ではあるが、いくつかの原本『莊子』から、ほぼ現行本『莊子』に近い形に編纂される前の段階では、様々な系統の『莊子』があり、西晉の前後までにそれぞれに注釋が付けられていた。そして後に「惠施」が「天下篇」の末尾に加えられ、篇末に評語を付け加えることによって整えられたのではないだろうか。¹⁷⁾

なぜなら、「天下篇」の他の諸子では道術・方術に分け、その上で批判する手法を取っているのに對し、惠施については、一切そのような記述は見られないからである。そして末尾の評語は比較的長いものであり、「物」の分析と莊子の「道」の分析を對比させているのは、「天下篇」の主張する「内聖外王」の道から考えて違和感が残るからである。

なお、譚戒甫は「現存莊子天下篇的研究」の中で、王夫子の『莊子解』を引用し、「天下篇」に頭となる總論があるのに尾となる結論がないことに奇怪さを覚える。結論を埋めるために長文ではない「惠施」を持ってきたものの、いびつさは免れない。或いは後世の注釋者がもともとと存在した七節目の文に不満を持っていたので、單行の「惠施」と取り替えてしまったのかもしれない。「惠施」との間に隔てが有るように感じるのは、無理矢理くっつけたからである、という趣旨のことを述べている。¹⁸⁾

『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」との関係については、兩者を一句一句精査する必要があるため、當論考ではこれ以上論及しないが、後日改めて私見を公けにし、大方の叱正を請いたいと考える次第である。

三.『莊子』「郭象莊子序」と郭象「莊子注」の関係について

次に「郭象莊子序」と現行本の郭象「莊子注」との関係について見ていくことにするが、先ずは煩を厭わず「郭象莊子序」の原文を挙げることにする。¹⁹⁾ 前掲の青木五郎に「『莊子』郭象序の眞偽問題について」があり、「郭象注」との關わりについて分析を加えていることから、その正否も含め検討していきたい。²⁰⁾

なお、下線が付されている①から⑮に互る指摘箇所は、後で挙げている青木五郎の指摘する「郭象注」と關連のある箇所である。また、青木五郎には郭象序の眞偽問題について、前掲書と同年に發表された「郭象〈莊子序〉私箋」があり、²¹⁾ 郭象注と關係する箇所を抜き出して補っていったのが傍線部AからEの箇所である。

莊子序 河南郭象子玄撰

夫莊子者、可謂知本矣、故未始藏其狂言、①言雖無會而獨應者也。夫應而非會、則雖當無用。言非物事、則雖高不行。與夫②寂然不動、不得已而後起者、固有間矣、斯可謂知無心者也。夫心無爲、則③隨感而應、應隨其時、言唯謹爾。故與化爲體、流萬代而冥物、豈曾設對獨遣而游談乎方外哉。此其所以不經而爲百家之冠也。

然莊生雖未體之、言則至矣。通天地之統、序萬物之性、達死生之變、而明A内聖外王之道、上知造物無物、下知有物之B自造也。其言宏綽、其旨玄妙。④至至之道、融微旨雅。⑤泰然遣⑥放、C放而不敖。

故曰不知義之所適、猖狂妄行而蹈其大方。含哺而熙乎澹泊、鼓腹而游乎混芒。至仁極乎無親、孝慈終於兼忘、禮樂復乎己（己）能、忠信發乎天光。用其光則其朴自成、是以⑦神器獨化於玄冥之境而源流深長也。

故其D長波之所蕩、⑧高風之所扇、暢乎物宜、適乎民願。弘其鄙、解其懸、灑落之功未加、

而⑨矜夸所以散。故觀其書，超然自以爲已當，經崑崙，涉太虛，而游⑩愜悅之庭矣。雖復⑪貪婪之人，⑫進躁之士，暫而攬其餘芳，味其溢流，彷彿其音影，猶足⑬曠然有⑭忘形自得之懷，況探其遠情而E玩永年者乎。遂⑮綿邈清遐，去離塵埃而返冥極者也。

夫れ莊子は、本を知ると謂ふ可し。故に未だ始めより其の狂言を藏さず。言は會すること無しと雖も、獨り應ずる者なり。夫れ應じて會するに非ざれば、則ち當ると雖も用ふる無し。言ふこと物事に非ざれば、則ち高きと雖も行はれず。夫の寂然として動かず、已むことを得ずして後起つ者と、固より間有り。斯れ無心を知る者と謂う可きなり。夫れ心無爲なれば、則ち感に隨ひて應ず。應じて其の時に隨ひ、言ふこと唯だ謹むのみ。故に化と體を爲し、萬代に流れて物に冥す。豈に曾て對を設けて獨り邁ひ、而して方外に游談せんや。此れ其の經ずして百家の冠爲る所以なり。

然れども莊生未だ之を體せずと雖も、言は則ち至れり。天地の統に通じ、萬物の性を序し、死生の變に達し、而して内聖外王の道を明かにす。上は造物の無物なるを知り、下は有物の自ら造れるを知るなり。其の言は宏綽、其の旨は玄妙なり。至至の道、融微にして旨雅なり。泰然として遣放たれ、放たれて敖らず。

故に曰く「義の適く所を知らず、猖狂妄行して其の大方を蹈み、哺を含みて澹泊に熙しみ、鼓腹して混芒に遊ぶ。至仁無親に極まり、孝慈兼忘に終り、禮樂已（己）が能に復し、忠信天光に發す」と。其の光を用ふれば則ち其の朴自ら成る。是を以て神器獨り 玄冥の境に化して源流深長なり。故に其の長波の蕩く所、高風の扇ぐ所、物の宜きを暢べ、民の願ひに適ひ、其の鄙を弘め、其の懸を解く。灑落の功未だ加はらずして、矜夸散ずる所以なり。故に其の書を觀れば、超然として自ら以爲へらく已に當に、崑崙を經、太虛に涉り、而して愜悅の庭に遊ぶべしと。復た貪婪の人、進躁の士と雖も、暫くも其の餘芳を攬り、其の溢流を味はひ、其の音影に彷彿とすれば、猶ほ曠然として形を自得に忘るの懷ひ有るに足る。況んや其の遠情を探りて永年に玩ぶ者をや。遂に綿邈清遐、塵埃を去離して冥極に返る者なり。

「郭象莊子序」について青木五郎は「余敦康によって試みられた莊子序と莊子注との間に何らの矛盾・抵牾もないという論証は、莊子序に盛られた中心思想とそれを表わすための術語（その多くは郭象特有のものといつてよいが）の範囲に限られていた。しかるにいま、あらためて莊子序にみられる用語を、必ずしも中心思想を表わすものではないものをも含めて、逐一、『莊子注』の中に検索してみると、なお次のように多くの同一乃至は類似の表現を見出すことができるのである」²²⁾とし、テクニカルタームを含む語句十五箇所に及ぶ分析を加えている。

次に青木五郎の分析箇所を全て列記するが、原文の並び順に表記するため、論文の表記を一部變えている箇所がある。また、郭象独自のテクニカルターム、或いは郭象と同時期に作られたと思われる箇所には、二重の下線を付してある（傍線部AからEの箇所については、青木五郎の指摘する箇所を全て挙げると、膨大な量になってしまうため、「郭象〈莊子序〉私箋」の中から「莊子注」に關する箇所と本文の論及に必要な箇所だけをピックアップした）。

なお、〈 〉の中の語は「莊子序」中の語句であり、「 」内の語は「莊子注」や他の出典による該當箇所である。

- ① 〈言雖無會〉「古之言者，必於會同」。(徐無鬼注)
- ② 〈寂然不動〉「豈得寂然不動，應感無窮，以輔萬物之自然也」。(則陽注)
- ③ 〈隨感而應〉「豈得寂然不動，應感無窮，以輔萬物之自然也」。(則陽注)・「是以無心玄應，

唯感之從」。(逍遙遊注)

④〈至至〉「豈知至至者不虧哉」。(逍遙遊注)

⑤〈泰然〉「此二者泰然而自得」。(庚桑楚注) 他多出。

⑥〈放〉「皆放之自得之場，則不治而自治也」。(應帝王注) 他多出。

⑦〈神器〉「所以逆其天機，而傷其神器也」。(秋水注)・「巧者有爲，以傷神器之自成」。(天下注)

⑧〈高風〉「其志尙清遐，高風邈世，與夫貪利沒命者，故有天地之降也」(讓王注)

⑨〈矜夸〉「將奔馳於勝負之竟，而助天民之矜夸」。(秋水注)・「去其心矜夸故也」。(寓言注)

⑩〈惚恍〉「豈求無爲於惚恍之外哉」。(庚桑楚注)

⑪〈貪婪之人〉「雖貪冒之人，乘天衢入紫庭，猶時慨然中路而歎，況其凡乎」。(讓王注)

⑫〈進躁〉「進躁無崖爲銳」。(天下注)

⑬〈曠然〉「然後能曠然無懷，而遊彼無窮也」。(知北遊注) 他多出。

⑭〈忘形自得〉「唯儼然無矜，遺形自得，道乃盡也」。(外物注)

⑮〈綿邈清遐〉「其志尙清遐，高風邈世，與夫貪利沒命者，故有天地之降也」(讓王注)

A〈內聖外王之道〉「是故內聖外王之道，闇而不明，鬱而不發，天下之人各爲其所欲焉以自爲方。悲夫，百家往而不反，必不合矣」。(「天下」)

B〈上知造物無物，下知有物之自造也〉「故造化者無主，而物各自造。物各自造而無所待焉，此天地之正也」。(齊物論注)・「夫莊老之所以屢稱無者，何故。明生物者無物，而物自生耳」。(在宥注)・「夫無不能生物，而云物得以生，乃所以明物生之自得」。(天地注)・「明物物者無物，而物自物耳。云云，則爲之者誰乎哉。皆忽然而自爾也」。(知北遊注)・他多出。

C〈放而不敖〉「獨與天地精神往來，而不敖倪於萬物」(「天下」)

D〈長波之所蕩〉「其波蕩傷性，遂至於此」(外物注)

E〈玩永年者〉「若使憂能傷人，此子不得永年矣」(孔融「論攏摯章書」)・「鈞調中道，可以永年」(何晏「景福殿賦」)

青木五郎は、莊子郭象序に現れている語句について、郭象注との係わりについて比較検討しているが、改めてその出典をおさえていくと、「源流深長也」までの前半截においては、二重の下線を付した箇所である「言雖無會」一対象は「會」の一字のみである一、「至至」、「自造」の外は、莊子注以外の出典や莊子本文を同時に踏まえた出典である。²³⁾

そして「言雖無會」について見ていくと、「會」については「達生」第十九に

不内變，不外從，事會之適也。始乎適而未嘗不適者，忘適之適也。²⁴⁾

(内に變らず，外に従はざるは，事會の適也。適に始まりて未だ嘗て適せずんばあらざる者は，忘適の適也)。

とあるように，類似の表現が見られる。

また、「至至」についても「田子方」第二十一と「秋水」第十七にそれぞれ

老聃曰，夫得是，至美至樂也，得至美而遊乎至樂。謂之至人。²⁵⁾

(老聃曰く，夫れ是を得るは，至美至樂也，至美を得て至樂に遊ぶ。之を至人と謂ふ)。

以其至小求窮其至大之域。是故迷亂而不能自得也。²⁶⁾

(其の至小を以て其の至大の域を窮めんことを求む。是の故に迷亂して自ら得る能はざる也)。

とあり，必ずしも郭象独自の思想を表白しているとは言えず，中には傍線部A・Cのように「天下篇」だけにその用例が認められる箇所も存在する。換言すれば，前半截で郭象独自の思想であると言える語句は「自造」のみである。

それに對して、後半截では郭象注からの出典が多く見られ、「故に曰く、義の適く所を知らず」から始まる全體の半分餘りを占める文章は、用いられているテクニカルタームや語句を見る限り、莊子「天下篇」との關連性は極めて薄いと思われる。なお、莊子郭象序後半の文中では、郭象が好んで使う用語である「獨化」・「自得」・「自成」といった郭象独自の思想も多く使用されている。

青木五郎は「郭象〈莊子序〉私箋」に於いても、莊子郭象序に現れている語句について、一語句一語句細かく出典を挙げ、郭象注との係わりについて比較検討しているが、「莊子本文と郭象注の雙方に出典の見られる例」・「先行する先秦期の語句と郭象注の雙方に出典の見られる例」・「莊子本文にしか出典の見られない例」・「先行する先秦期の語句の引用」といった引用箇所を除くと、郭象注独自のテクニカルタームや郭象と同時期に作られた語を含んだ箇所は、やはり後半截に集中して現れている。

そして、二重の下線部を付した箇所である「内聖外王之道」について、青木五郎は「郭象が、『莊子』の思想を〈内聖外王の道〉を明らかにしたものであるととらえていることは、老莊思想に經世的意義を積極的に見出そうとした表われで、注目に値するものであらう」と述べている²⁷⁾が、君臣がそれぞれ持って生まれた「性分」・「適性」を守るべきだと説くのが郭象であり、それは言わば「知足安分（足を知り分に安んず）」といった郭象独自の思想であり、「内聖外王」という經世的語句と相反する考えである。

「内聖外王」については、「天下篇」の莊子本文と郭象の「莊子序」を併せても二箇所の用例しかないのに對して、「獨化」は郭象注だけで十二箇所、「自得」に至っては郭象注だけで百十五箇所の多さである。²⁸⁾ 傍證とはいえ注視するべきである。やはり莊子郭象序の前半三分の二を占める部分は、莊子本文からの流用乃至關聯する部分であるが、「故に其の長波の蕩する所」以下の文は、前半部分に對する後世の注であると考えるのが穩當ではないだろうか。

最後に、莊子序の大意を挙げ、内容を見ていくことにする。

（莊子は言葉によって道を表現しようとしたことでは、充分に表現しきれてはいないが）道に到達している。だから始めから狂言を藏していたわけではない。莊子の言葉は感應するが、言葉は物の概念と言葉とが合致しなければ崇高であっても行われぬ。

道を體得した莊子はひっそりと靜止して動かず、必要に迫られて立つ者であり、無作為自然の無心の境地で、萬物に感應し、時の變化に随ってただ自分自身を慎むだけである。

だからあらゆる變化と一體になり、萬代に互って萬物と冥合する時、相對的な差異を設けて方外に談遊することだけを説いていたわけではない。これは莊子が諸子百家に冠たる所以である。

莊子は言葉によって道を表現しようとしたことでは、充分に表現しきれてはいないが、その言葉は至極である。莊子の言葉は天地萬物・あらゆる變化に通曉し、内聖外王の道を明らかにした。缺ける所のない道は泰然として天性の自己を解放しても傲り高ぶることはない。

以上の文章によって、莊子本文を多用し、言葉によって道を表現しようとするものの限界と莊子が諸子百家に冠たる所以が「内聖外王」という經世的語句に由來していることが理解できる。

また、以下の「故に曰く、義の適く所を知らず」から始まる文は、郭象の注乃至後人の作為する所と目される部分であり、莊子「知足安文」の考えによって述べた箇所であって明らかに前半とは趣を異にしている。

そこで、「あるがままに自己にふさわしい生き方をする」、「古代社會の理想通り、口に哺を含んで靜かに清らかに楽しみ」、「腹をたたいて混沌の中に遊ぶ」。「至仁は親愛の情を捨てた所に極まり」、「孝慈は自他共に忘れたところに移り」、「禮樂は自分の持ち前に具わり」、「忠信はその人の自然の輝きから發せられる」と莊子はいつている。その輝きを使えば、その人の本來持っている性質は自然と醸成されるのである。

だから莊子の考え・教化が及び至っているところについて、物の本來あるべき所を述べ、民の意をくみ、素樸を廣め、物事に執着せず、拂い落とせない物は加えず、調和を亂す物を外すのである。よってしばらく莊子の一部でも味わえば心身ともに自在な境地に達する。ましてや莊子の遙かな思いや永遠の生命を重視する者ならば尙更である。かくして莊子とは俗世から遠く離れ、俗塵と袂を分かち、本性に備わった分限に従って物と一體になる者なのである。

以上、「郭象莊子序」の内容から、全體の半分弱を占める前半の箇所は郭象の思想ではなく、『莊子』本文や先行する文献に拠っている（注23を参照）ことが理解されるが、「故に曰く、義の適く所を知らず」から始まる「郭象の注乃至後人の作爲する所」と目される部分は、何故この注の末尾に置かれているのか、という疑問が遺される。

目下の所、推測の域を出ないが、景德二年（1005年）の郭象注『莊子』校定・刻版に際して、「事に従った社鑄等が、序は郭象の文ではないとして删除した」後、「眞宗の命により李宗諤・楊億・陳彭年等によって別に讎校が加えられ、篇首に置かれた」²⁹⁾と徐輯本『宋會要稿』にあることから、郭象に似せて讎校が行われていったことに拠るのかも知れず、或いは單純ではあるが、前半部分についての郭象の注が「郭象莊子序」の末尾に付いているだけなのかも知れない。

以上の内容から「郭象莊子序」の眞偽について、作品全體としては郭象の作ということは出来ないものの、一部郭象の注も含まれている可能性があるといえるのである。なお、この問題については、「郭象莊子序」と「天下篇」との関係が明らかになれば、いっそうはっきりすることと思われる。

ま と め

「郭象莊子序」の眞偽を巡っては、王利器、余敦康らを皮切りに、今日に至るまでその眞偽問題は今日に至るまでその問題を巡る議論は陸續している。馮友蘭は、莊子序の「内聖外王」の王が強調されているのは、「莊子注」にはそぐわない。萬物の性分を強調するのが「莊子注」だとし、「莊子注」の序文ではなく、『莊子』に對する序文であるとしているが、それはある意味「莊子注」前半の部分に限って言えば正鵠を射ている。

また、「郭象莊子序」後半部分の文中では、郭象が好んで使う用語である「獨化」・「自得」・「自成」等といった郭象独自の思想も多く使用され、前半截と趣を異にしている。郭象独自の思想が多く見られる「郭象莊子序」後半の「故に曰く、義の適く所を知らず」以下の文は、前半部分の内聖外王に對する後世の注であると考えてるのが穩當ではないだろうか。

あくまでも試論ではあるが、いくつかの原本『莊子』から、ほぼ現行本『莊子』に近い形に編纂される前の段階では、様々な系統の『莊子』があり、西晉の前後までにそれぞれに注釋が付けられていた。そして「恵施（篇）」が「天下篇」の結語として加えられ、整えられたのではないだろうか。なぜなら、「天下篇」中に現れている恵施以外の他の諸子は、道術・方術に分け、その上

で批判する手法を取っているのに、惠施については、一切そのような記述は見られないからである。そして末尾の評語は比較的長いものであり、「物」の分析と莊子の「道」の分析を對比させているのは、「天下篇」の主張する「内聖外王」の道から考えて違和感が残るからである。やはり、「天下篇」の後半部分には、結語となるべき文章があるべきである。結論があつてこそ、「天下篇」の諸子の中で最も解説が短く、中途半端な「未之盡者」で終わる莊子評の文を落ち着かせることが出来、「物の分析」に對する一定の結論も得られるからである。

思うに唐代の頃のテキストには、まだ本來の「郭象序（高山寺本所収の跋文）」が残されていたのではなかろうか。その後、何者かが郭象に假託して「天下篇」の一部を取り出し、「莊子序」として巻頭に置いた。そして、宋版『莊子』が版本として廣く流通するに随つて思想史的意味合いの強い郭象序は廣く認知されるようになっていき、反對にテキストの編纂に係わる内容を中心としている本來の「郭象序」は跋に追い遣られ、「天下篇」全體が跋文的な性格を兼ね備えていることから不要と見なされて刪去された。その結果、宋版以降のどの版本にも見られなくなってしまったのではないだろうか。

なお、『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」との関係については、當論考の“二、『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」”でも述べたように、試論の域を出ていない爲、機會を見つけ、論證していくことを今後の課題としたい。

注

- 1) 武内義雄『老子と莊子』（岩波書店、1930）、PP. 128-130
- 2) 郭象序の眞偽問題について、青木五郎には『『莊子』郭象序の眞偽問題について』（『京都教育大學國文學會誌』、1979）、「郭象〈莊子序〉私箋」（『京都教育大學紀要』A、人文・社會五五、1979）の專論がある。なお、青木五郎は當初『老子藏室纂微篇』に引かれている注を引用し、郭象注を十分に咀嚼した者であれば、序文を偽作することは可能だとするが、序文中に引かれた郭象注によって、最終的に「郭象莊子序」は郭象のものだと判斷している。
また、古勝隆一にも「郭象による『莊子』刪定」（『東方學』第九一輯、1996）、「後漢魏晉注釋書の序文」（『東方學報』第七三冊、2001）の專論がある。
- 3) 例えば、王利器『『莊子』郭象序の眞偽問題』（『哲學研究』第九期、1978）、余敦康「關於《莊子》郭象序の眞偽問題」（『哲學研究』第一期、1979）、黃聖平「所謂《莊子》郭象《序》作者辨正」（『中國哲學史』、2003）、李耀南「難“《莊子序》非郭象所作說”：兼與王曉毅和黃聖平兩位先生商兌」（『中國哲學史』、2005）、韓國良「也談《莊子序》的眞偽問題：兼論郭象“獨化論”在當時缺乏回應的原因」（『咸陽師範學院學報』、2007）、姜龍翔「郭象〈莊子序〉眞偽問題續探」（『國文學報』第四八期、2010）、馬鴻雁「郭象《莊子注》文獻學研究總述」（『成都大學學報（社會科學版）』、2012）等を擧げることが出来る。
- 4) 水野厚志「『莊子』天下篇の〈内聖外王〉について」（『東京國際大學論叢』言語コミュニケーション學部編、第十一號、2015）を参照。
- 5) 王利器「再論『莊子』郭象序の眞偽問題」（『曉傳書齋文史論集』、1978）PP. 209-216
- 6) 馮友蘭『中國哲學史新編』第四卷（人民出版社、1989）、P. 196
- 7) 前掲「郭象〈莊子序〉の眞偽問題續探」、PP. 53-56
- 8) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 31
- 9) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 32
- 10) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 33
- 11) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 33
- 12) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 34
- 13) 前掲「後漢魏晉注釋書の序文」、P. 12
- 14) 前掲「後漢魏晉注釋書の序文」、P. 7
- 15) 前掲「後漢魏晉注釋書の序文」、PP. 12-13

- 16) 前掲「後漢魏晉注釋書の序文」, P. 13
- 17) 「様々な系統の『莊子』があり…」の一文について補足すると、『漢書』『藝文志』に『老子』は三種、『莊子』は一種のみが挙げられているのに對し、南北朝の宋の劉義慶が編纂した『世說新語』には、兩者併せて百餘りの書があったとあることから當時、様々な系統の莊子が残っていたことを窺い知ることができる。また、「惠施」が「天下篇」の末尾に加えられ、篇末に評語を付け加えることによって整えられた可能性と「天下篇」の「内聖外王」の關係については、前掲『『莊子』天下篇の〈内聖外王〉について』を参照。なお、後述のように『莊子』『天下篇』と「郭象莊子序」との關係については、近日中に別稿にて論證していく豫定である。
- 18) 譚戒甫「現存莊子天下篇の研究」の當該箇所は次の通りである。
- (4) “天下篇”共六章，第一章是總論，第二至第六章是分論，章法極其謹嚴，呼應極其靈活，古籍中實不易見。但有一個缺點，僅有首而無尾，即沒有總結，很覺奇怪……中略……所以我認為當時的“略要”，可能還有第七章來敘述莊惠各自的思想 and 辯論，并加以批判作為總結的……中略……我又認為這第七章，原文或不很長，比起第一章來，不免相形見拙……中略……或者後世注家不滿于原第七章的較遜，竟擅引單行的“惠施篇”來代替了。也許原第七章和“惠施篇”間有相似之處，故敢取彼以易此，這可能也是一個原因。
- 譚戒甫「現存莊子天下篇の研究」（『哲學研究叢刊第5輯』『中國哲學史論文初集』，1959），P. 72。なお、「天下篇」篇中の惠施は、前掲『『莊子』天下篇の〈内聖外王〉について』を参照。
- 19) 郭慶藩撰・王孝魚點校「新編諸子集成」『莊子集釋』（中華書局，1985，北京五次印刷），P. 3によるが、一部標點を變更している。
- 20) 前掲『『莊子』郭象序の眞偽問題について』，PP. 33-34
- 21) 「郭象〈莊子序〉私箋」（『京都教育大學紀要』A，人文・社會五五，1979）
- 22) 前掲『『莊子』郭象序の眞偽問題について』，P. 33
- 23) 青木五郎は、「余敦康が例證した四の諸例と合わせると、〈未始藏其狂言〉〈不得已而後起〉〈内聖外王之道〉〈不知義之所適〜忠信發乎天光〉など莊子本文をふまえた表現をのぞいて、〈莊子序〉に用いられたそのほとんどすべての用語を『莊子注』の中に検索できることになり、ここにいたって、この兩者をなお別人の手になるものと反證することは恐らく不可能であろう」という。前掲「郭象〈莊子序〉私箋」P. 189。しかしながら、以下に列挙するように、莊子序の前半截はそのほとんどすべてが莊子本文と『易』や『孟子』等を出典としている（青木氏が自身の專論「郭象〈莊子序〉私箋」の中で指摘している出典がその證左となっている）ことから、後半截と分けて考えるべきである。出典を挙げると次の通りである（〈 〉中の語は「莊子序」中の語句であり、「 」内の語は『莊子』本文や他の先行する出典による該當箇所である）。
- 〈可謂知本矣云云〉「狂屈聞之，以黃帝爲知言」。（知北遊）
- 〈未始藏其狂言〉「夫體道者，天下之君子所繫焉。今於道，秋豪之端萬分未得處一焉，而猶知藏其狂言而死。又況夫體道者乎」。（知北遊）・「肩吾問於連叔曰，吾聞言於接輿，大而無當，往而不反云云。吾以是狂而不信也」。（逍遙遊）
- 〈寂然不動〉「易，無思也，無爲也，寂然不動，感而遂通天下故」。（易，繫辭上）
- 〈不得已而後起〉「故曰，聖人之生也天行，其死也物化云云。感而後應，迫而後動，不得已而後起。去知與故，循天之理」（刻意）・「孟子曰，予豈好辯哉。予不得已也」。（孟子・滕文公）・「一宅而寓於不得已，則幾矣」。（人間世）・「且乘物以遊心，託不得已以養中，至矣」。（人間世）・「崔乎，其不得已乎」。（大宗師）
- 〈知無心者〉「形若槁骸，心若死灰。眞其實知，不以故自持，媒媒晦晦，無心而不可與謀。彼何人哉」。（知北遊）
- 〈夫心無爲，則隨感而應〉「故曰，聖人之生也天行，其死也物化云云。感而後應，迫而後動，不得已而後起。去知與故，循天之理」（刻意）
- 〈應隨其時〉「故禮義法度者，應時而變者也」。（天運）
- 〈言唯謹爾〉「孔子於鄉黨，恂恂如也，似不能言者。其在宗廟朝廷，便便言唯謹爾」。（論語・鄉黨）
- 〈故與化爲體〉「古之眞人，不知說生，不知惡死」。（大宗師）・「死生無變於己」。（齊物論）
- 〈豈曾設對獨邁，而游談乎方外哉〉「孔子曰，彼遊方之外者也。而丘遊方之內者也」。（大宗師）

〈然莊生雖未體之〉「夫體道者，天下君子所繫焉」（知北遊）
 〈達死生之變〉「死生無變於己，而況利害之端乎」。（齊物論）・「死生爲晝夜」。（至樂）
 〈泰然〉「宇泰定者，發乎天光」。（庚桑楚）
 〈放〉「一而不黨，命曰天放」。（馬蹄）
 〈放而不敖〉「獨與天地精神往來，而不敖倪於萬物」。（天下）
 〈不知義之所適，猖狂妄行，而蹈其大方〉「南越有邑馬。名爲建德之國。其民愚而朴，少私而寡欲，知作而不知藏，與而不求其報，不知義之所適，不知禮之所將，猖狂妄行，乃蹈乎大方」。（山木）・「大均緣之，大方體之」。（徐無鬼）
 〈含哺而熙乎澹漠，鼓腹而遊乎混芒〉「夫赫胥氏之時，民居不知所爲，行不知所之。含哺而熙，鼓腹而遊，民能以此矣」。（馬蹄）・「古之人在混芒之中，與一世而得澹漠焉」。（繕性）・「澹而靜乎，漠而清乎，調而閒乎」。（知北遊）
 〈至人極乎無親〉「請問至仁，莊子曰，至仁無親」。（天運）・「故曰，至禮有不仁人，至義不物，至知不謀，至仁無親，至信辟金」。（庚桑楚）
 〈孝慈終於兼忘〉「故曰，以敬孝易，以愛孝難。以愛孝易，而忘親難。忘親易，使親忘我難。使親忘我易，兼忘天下難。兼忘天下易，使天下兼忘我難」。（天運）
 〈禮樂復乎己能〉「禮樂偏行，則天下亂矣。彼正而蒙己德，德則不冒。冒則物必失其性也」。（繕性）・「性情不離，安用禮樂」。（馬蹄）
 〈忠信發乎天光〉「宇泰定者，發乎天光。發乎天光者，人見其人」。（庚桑楚）
 〈用其光，則其朴自成〉「見小曰明，守柔曰強。用其光，復歸其明，無遺身殃」。（老子・五十二）・「常德乃足，復歸於樸。樸散則爲器。聖人用之，則爲官長」。（老子・二十八）・「夫殘樸以爲器，工匠之罪也」。（馬蹄）
 〈神器獨化於玄冥之境〉「天下神器，不可爲也」。（老子・二十九）・「以天合天，器之所以疑神者，其是與」。（達生）・「於謳聞之玄冥，玄冥聞之參寥」。（大宗師）・「始於玄冥，反於大通」。（秋水）

- 24) 前掲『莊子集釋』, P. 662
- 25) 前掲『莊子集釋』, P. 714
- 26) 前掲『莊子集釋』, P. 568。故に曰く義の適く所を知らず
- 27) 前掲「郭象〈莊子序〉私箋」, P. 189
- 28) 本文の検索には北原峰樹編『莊子郭象注索引』（北九州中國書店，1990）及び劉殿爵・陳方正主編『香港中文大學中國文化研究所 先秦兩漢古籍逐次索引叢刊 子部第四三莊子逐字索引』（商務印書館，2000）を利用した。
- 29) 前掲 王利器『「莊子」郭象序の眞偽問題』, PP. 53-55, 「『莊子』郭象序の眞偽問題について」P. 28を参照。

参考文献

- 赤塚忠（一九七四年）『全釋漢文大系16 莊子上』 集英社
 赤塚忠（一九八〇年）『全釋漢文大系17 莊子下』 集英社
 池田知久（一九八三年）『莊子上』 學習研究社
 池田知久（一九八六年）『莊子下』 學習研究社
 王先謙（一九七四年）『莊子集解』 臺灣・三民書局印行
 郭慶藩 撰（一九六一年）『新編諸子集成 莊子集釋』 中國北京・中華書局
 周啓成 校注（一九九七年）『莊子虞齋口義校注』 中國北京・中華書局
 服部宇之吉 校訂（一九一一年）『莊子翼』 富山房
 福永光司（一九六六年）『中國古典選7 莊子 內篇』 朝日新聞社
 福永光司（一九六六年）『中國古典選8 莊子 外篇』 朝日新聞社
 福永光司（一九六七年）『中國古典選9 莊子外篇 雜篇』 朝日新聞社
 方勇 撰（二〇一二年）『莊子纂要』 中國北京・學苑出版社
 牧野謙次郎（一九一四年）『漢籍國字解全書 莊子上』 早稻田大學出版部
 牧野謙次郎（一九一四年）『漢籍國字解全書 莊子下』 早稻田大學出版部

株式会社による自己の株式の取得についての一考察

本 島 浩

Acquisition by a Corporation of Its Own Stocks

MOTOJIMA, Hiroshi

Abstract

This research note studied whether a corporation could acquire all issued and outstanding stocks as treasury stocks in several cases. If it can by meeting certain conditions, the corporation with no stockholders is formed. I discussed some issues about the call of a general meeting of stockholders and issues of additional stocks in the corporation in which there is not a single stockholder.

Keywords: corporation, treasury stock, stockholder, general meeting of stockholders, additional stock

目 次

- はじめに
- 第1章 考察の対象とする株式会社および種類株式について
- 第2章 株式会社の定款の定め
 - 1. 譲渡制限株式の発行について
 - 2. 取得請求権付譲渡制限株式の発行について
 - 3. 取得条項付譲渡制限株式の発行について
 - 4. 全部取得条項付譲渡制限株式の発行について
- 第3章 株式会社による自己株式の取得
 - 事例1. 譲渡制限株式の取得
 - 事例2. 取得請求権付譲渡制限株式の取得
 - 事例3. 取得条項付譲渡制限株式の取得
 - 事例4. 全部取得条項付譲渡制限株式の取得
- 第4章 株主総会の招集

第5章 募集株式の発行等
おわりに

はじめに

株式会社による自己株式の取得について、¹⁾「商法は、長い間、限られた例外を除き自己株式の取得を厳しく制約してきた（平6改正前210）」。^{2) 3) 4)} この「限られた例外」は、平成6年商法改正、平成9年商法改正で「逐次拡大されていく」。⁵⁾ その後、「平成13年6月商法改正は、自己株式の取得規制の緩和を推し進め、自己株式の取得・保有についての目的・数量・保有期間の規制を撤廃し（いわゆる金庫株解禁）、株主の利益を保護するための手続規制と債権者保護のための財源規制を守る限り、原則として自由に取得できることとした」。⁶⁾ 「会社法上の自己株式に関する規制」は、この「流れの延長上にある」。⁷⁾

本稿は、株式会社は、発行済み種類株式の全部を取得することができるのか、株式会社が取得する自己株式の数量⁸⁾ について若干の考察をする。なお、会社法の条文は、2条13号と略記する。

第1章 考察の対象とする株式会社および種類株式について

考察の対象とする株式会社（以下、株式会社という）は、公開会社（2条13号）でない会社、取締役会設置会社（2条7号）以外の会社、監査役（326条2項）を設置しない会社および株券発行会社（117条7項）でない会社とする。取締役の員数（326条1項）は1名で、取締役の任期は、定款の定め（332条2項）により、10年とする。内容の異なる2以上の種類の株式の内容が定款に定められている（2条13号）。株式会社が発行する株式の種類は、1. 譲渡制限株式（2条17号）2. 取得請求権付譲渡制限株式（2条18号）3. 取得条項付譲渡制限株式（2条19号）4. 全部取得条項付譲渡制限株式（108条1項7号・2項7号）とする。

株式会社の定款には、発行可能種類株式総数を、それぞれ100株式と定める（108条2項）。

第2章 株式会社の定款の定め

株式会社の定款には、次の事項が定められている。

1. 譲渡制限株式の発行について

譲渡による譲渡制限株式の取得について株式会社の承認を要する旨（107条2項1号イ、108条2項4号）。

2. 取得請求権付譲渡制限株式の発行について

- (1) 取得請求権付譲渡制限株式について、株主が株式会社にその取得を請求することができる旨（107条2項2号イ、108条2項5号）。
- (2) 株式会社は、取得請求権付譲渡制限株式1株を取得するのと引換えに、取得を請求する株主に対して、株式等以外の財産を交付すること。交付する財産の内容は金銭であり、その額は1株当たり5万円、算定方法は、1株当たりの払込金額と同額とする（107条2項2号ホ、108条2項5号イ）。

- (3) 株主が株式会社に対して取得請求権付譲渡制限株式を取得することを請求することができる期間（107条2項2号へ）は、会社成立の日より3年間を経過した日より1ヵ月間とする。

3. 取得条項付譲渡制限株式の発行について

- (1) 取得条項付譲渡制限株式について、株式会社が一定の事由が生じたことを条件としてこれを取得することができる旨（107条2項3号イ、108条2項6号イ）。一定の事由として、「会社成立の日より3年間を経過した日」⁹⁾とする。
- (2) 取得条項付譲渡制限株式の一部取得についての定款の定めはない（107条2項3号ハ）。
- (3) 株式会社が取得条項付譲渡制限株式1株を取得するのと引換に、その株主に対して、株式等以外の財産を交付する。交付する財産の内容は金銭であり、その額は1株当たり5万円、算定方法は、1株当たりの払込金額と同額とする（107条2項3号ト、108条2項6号イ）。

4. 全部取得条項付譲渡制限株式の発行について

- (1) 全部取得条項付譲渡制限株式について、株式会社が株主総会の決議によってその全部を取得する旨（108条1項7号、171条1項）。
- (2) 取得対価（171条1項1号ホ）の価額の決定の方法（108条2項7号イ）は、「その決議時の会社の財務状況を踏まえて定める」¹⁰⁾。
- (3) 取得に関する株主総会の決議をすることができるか否かの条件（108条2項7号ロ）は、「会社に破産原因たる債務超過があること」¹¹⁾である。

第3章 株式会社による自己株式の取得

株式会社は、定款に定める発行可能株式総数100株にもとづき、下記の種類株式をそれぞれ100株発行した。

- 事例1. 株式会社が発行する株式の全部が譲渡制限株式であり、株式会社が1人会社である場合、その株主が有する全部の譲渡制限株式を会社に贈与するときは、「会社は無償で自己株式を取得する」¹²⁾ことになる（155条13号、会社法施行規則27条）。結果として、株式会社には1人の株主もいない。
- 事例2. 株式会社が発行する株式の全部が取得請求権付譲渡制限株式であり、取得請求権付譲渡制限株式を有する株主全員が、第2章2. (2), (3) の定款の定めに従い、会社にその株式の取得を請求する場合、461条2項が規定する分配可能額を超えていないときは、株式会社は、その請求の日（167条1項）に、取得請求権付譲渡制限株式の全部を自己株式として取得する（155条4号）。結果として、株式会社には1人の株主もいない。
- 事例3. 株式会社が発行する株式の全部が取得条項付譲渡制限株式であり、第2章3. (1), (3) の定款の定めに従い、一定の事由が生じた日に、461条2項が規定する分配可能額を超えていないときは、株式会社は、取得条項付譲渡制限株式の全部を自己株式として取得することができる（155条1号）。結果として、株式会社に1人の株主もいない。株式会社に株主が1人もいない結果については、「会社の発行する株式の全部が取得条項付株式である場合において、定款の定めに基づいて会社が全部の株式を取得することができるかという問題が観念的には考えられる。」¹³⁾ が、「取得の対価があらかじめ定款で定めら

れている取得条項付株式においては、自動的に帰属主体のない会社財産が生じることになるので、そのような全部の取得を認めることは不可能であるというべきである。」¹⁴⁾との見解がある。

事例4. 株式会社が発行する株式の全部が全部取得条項付譲渡制限株式であり、第2章4. の定款の定めに従い、株式会社が全部取得条項付譲渡制限株式の全部を取得するには、取得を決定する株主総会（171条1項）において、取締役は、その取得を必要とする理由として、会社が破産原因である債務超過であること、100%減資¹⁵⁾を目的とすること、「再建のために発行済株式をすべて無償で取得すること」¹⁶⁾（171条1項1号）、「株主の取得対価（171条1項1号ホ）がないこと」¹⁷⁾ および取得日（171条1項3号）を説明した。株主総会の特別決議（309条2項3号）により、株式会社による全部取得項付譲渡制限株式の全部の取得が決定された。この結果、株式会社は、取得日に、全部取得条項付譲渡制限株式の全部を、自己株式として取得することになる（155条5号）。

株式会社の再建のための全部取得条項付譲渡制限株式の全部の取得であることにより、その株主総会において株式会社の再建のために募集株式の発行等に関する決議がなされるところと考えられるが、この決議がなされないとすると、結果として、株式会社には1人の株主もいないこととなる。株式会社に株主が1人もいない結果について、「従来の用語でいう100%減資等のように瞬間的に議決権ある株式がゼロになる場合は認められると解してよい」¹⁸⁾との見解があるが、他方で「立案担当者により、会社法上は全部取得条項付種類株式のみを発行している会社がその全部を取得することを禁止する旨の規定は設けられていないので、全部の取得が許容される」¹⁹⁾ というが、「会社法が明文で禁止していないというだけで実質的な株主がゼロであってよいという解釈をとらなければならないとするものの必要性は疑問である。」²⁰⁾との見解がある。

第4章 株主総会の招集

定時株主総会は、毎事業年度の終了後一定の時期に招集しなければならない（296条1項）。しかし、第3章事例1～事例4において、株主が1人も存在しない株式会社では、定時株主総会を招集するにあたり、株式会社が発する招集通知を受領する株主が1人もいない。株式会社は定時株主総会を招集することができない。取締役は定時株主総会の招集の規定（296条1項）に違反し、100万円以下の過料に処せられる（976条18号）。

第5章 募集株式の発行等

第3章事例1～事例4において、株式会社に1人の株主がいない結果、株式会社は定時株主総会を招集することができない。この事態を回避するためには、株式会社には募集株式の発行等を行う必要が生じる。

募集株式の発行等は、「次の三類型に分かれる。」²¹⁾（1）株主割当て、（2）第三者割当て、（3）公募である。

（1）株主割当てによる募集株式の発行の場合

第3章事例1～事例4においては、株式会社には株主は1人もいないので、株主割当てによる募集株式の発行をすることができない。

(2) 公募による募集株式の発行の場合

「公募とは、不特定・多数の者に対して引受けの勧誘をするもの」²²⁾であるので、株式会社においては、公募による募集株式の発行はないと考えられる。

(3) 第三者割当てによる募集株式の発行の場合

第三者割当てとは、「縁故者に対してのみ募集株式の申込みの勧誘および割当てを行う方法である。」²³⁾

株式会社は、公開会社でない会社であるので、会社が発行する株式を引受ける者の募集をしようとするときは、募集事項（199条2項）の決定は、株主総会・種類株主総会の決議がなければその効力を生じない（199条2項，199条4項）。株主総会・種類株主総会の決議を要しない旨の定款の定めはないものとする、第3章事例1～事例4においては、株主は1人も存在しないので、株主総会・種類株主総会の決議を行うことができないことになる。

しかし、199条4項の但書「当該種類株主総会において議決権を行使することができる種類株主が存在しない場合は、この限りでない」の規定がある。この規定の趣旨はいかなる内容であろうか。第3章事例1～事例4においては、株主は1人も存在しない。199条4項の但書の規定により、第三者割当てによる募集株式の発行における募集事項の決定は株主総会・種類株主総会の決議を要しないとの解釈を行うことができるのであろうか。この解釈を行うことができるとすると、第三者割当てによる募集株式の発行に関する募集事項の決定は誰が行うのであろうか。株式会社においては、1名の取締役がこれを行うことになるのであろうか。仮に、このような解釈が可能であるとすると、この取締役が募集株式の発行において第三者割当ての方法により、例えば、譲渡制限株式1株を取締役本人に割当て、その取締役が自らに申込みを勧誘し割当てを行うこととなろう。結果として、株式会社は1人の株主が存在することになり、株式会社は定時株主総会を招集することができる。

他方で、199条4項但書の規定は、株式会社が発行済み種類株式の全部を自己株式として取得することができることを認めるものと解釈することができるのであろうか。

おわりに

本稿は、会社法にもとづき、観念的ではあるが、株式会社が取得することができる自己株式の数量について、若干の考察をおこなったものである。

注

- 1) 「自己株式の取得」という用語について、会社法113条4項「自己株式」の定義より概念上あり得ないことになると指摘されている。藤田友敬「株式会社による自己の株式の取得」編集代表 江頭憲治郎・森本 滋『会社法コンメンタール』第4巻 山下友信編 株式 [2] 商事法務 2009年4月 6ページ。本稿では、従来の「自己株式の取得」の用語を用いる。
- 2) 藤田、前掲1)，6ページ。
- 3) 商法による自己株式の取得の規制の沿革について、龍田 節「株式会社による自己の株式の取得」編集代表 酒巻俊雄／龍田 節『逐条会社法』第2巻 株式・1 中央経済社 2008年7月 356ページ。
- 4) 商法による自己株式の取得の制約の理由について、龍田、前掲3)，358ページ。江頭憲治郎著『会社法』第5版 有斐閣 2014年7月 245ページ。
- 5) 藤田、前掲1)，7ページ。
- 6) 藤田、同上。

- 7) 藤田, 同上.
- 8) 株式会社による自己株式の取得の数量制限の撤廃について, 「実際には問題にならないと思われるものの, 発行済の議決権のある株式のすべてを取得することはできないと解される. 会社法は少なくとも議決権のある株式が1株は社外に存在することを要求していると解すべきである」. 神田秀樹著『会社法』〔第15版〕弘文堂 2013年3月 98ページ.
- 9) 江頭, 前掲4), 一定の事由の定め方として, 「一定の暦日を定める等の期限型の定めなどがあり得る」. 155ページ, 注(25).
- 10) 江頭, 前掲4), 159ページ, 注(34), 注(35).
- 11) 江頭, 同上.
- 12) 藤田, 前掲1), 9ページ.
- 13) 山下友信「取得条項付株式の取得」編集代表 江頭憲治郎・森本 滋『会社法コンメンタール』第4巻 山下友信編 株式〔2〕商事法務 2009年4月 77ページ.
- 14) 山下友信, 同上.
- 15) 100%減資の意義について, 「会社が債務超過(破16条1項)の場合に既存株主の持株をゼロにする」ことである. 江頭, 前掲4), 158ページ.
- 16) 山下, 前掲11), 97ページ.
- 17) 山下, 同上.
- 18) 神田, 前掲8), 98ページ.
- 19) 山下, 前掲11), 98～99ページ.
- 20) 山下, 同上.
- 21) 江頭, 前掲4), 704ページ.
- 22) 江頭, 前掲4), 707ページ.
- 23) 江頭, 前掲4), 706ページ.

執筆者紹介（掲載順）

金城 ふみ子	経済学部	教授	日本語学・日本語教育
中井 基博	言語コミュニケーション学部	教授	英語教育・社会言語学
水野 厚志	言語コミュニケーション学部	専任講師	中国思想・哲学, 中国語教育
本島 浩	商学部	教授	法律学—商法・会社法

編 集 後 記

論叢の発行形態が新しくなり、かつての言語コミュニケーション学部論叢は分野が大きく広がり発展した『人文・社会学研究』第1号として刊行されました。査読を経て内容の充実した論文を掲載することができました。投稿者の方々、査読審査に快くご協力くださいました多くの方々、滝本雄二氏、鈴木翔三氏はじめ、ご支援を頂きましたみなさまに心よりお礼申し上げます。今後学部を越えた新しい論叢により、研究成果を学内外に力強く発信していきたいと思えます。多くのご投稿をお待ちしております。

(『人文・社会学研究』編集委員 佐用章子)

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第1号 2016(平成28)年3月20日発行
[非 売 品]

編 集 者	東京国際大学人文・社会学研究論叢編集委員
発 行 者	高 橋 宏
発 行 所	〒350-1197 埼玉県川越市の場北1-13-1 TEL (049) 232-1111 FAX (049) 232-4829
印 刷 所	株式会社 東京プレス 〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18 3F

THE JOURNAL OF TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

Humanities and Sociology

No. 1

Articles

Economist Miyoji Hayakawa's Depiction of Hokkaido's Pioneer Farmers
in His Novel *Shojo-chi* [Virgin Land] KINJO, Fumiko

Have Japanese English Textbooks Really Improved?:
Reexamination of Gender Representation in Current Textbooks NAKAI, Motohiro

The Issue of Truth or Falsehood of Guoxiang's Introduction of
Zhuangzi MIZUNO, Atsushi

Research Note

Acquisition by a Corporation of Its Own Stocks MOTOJIMA, Hiroshi

2 0 1 6